

## 10代の母という生き方①

大川 聡子

### ★まえがき

私は応用人間科学研究科に2期生として在籍しました。そこで学んだことは一言では言い表せませんが、最も大きな学びは、その人の生き方のありのままを尊重し、各々の生き方に合わせた支援の枠組みを考えるといった視点でした。私は大学院入学まで保健師として働いていた事もあり、それぞれのケースの弱点、援助が必要な点ばかりに目が行きがちになっていました。研究対象とした10代の母親に至っても同様でした。また、日本での10代の母親に関する論文も、リスクを中心にした論調が殆どでした。しかし、10代の母親のインタビューを進めていく中で、こうした論調に違和感を覚えるようになりました。いわゆる「望まない妊娠」ではなく、主体的に出産を選択した母親もいます。また、同世代の横のつながりを生かして子育てをすることができたり、母親となることが新たな社会とのつながりを作るきっかけとなるなど、10代で出産する事の「強み」もあるとわかりました。さらに、社会的に不利な環境に置かれてきた方達も少なからずいます。このことから、彼女たちが出産を決意する背景を明らか

にし、10代の母親を支える社会の仕組みのあり方はどういったものかを考えたいと思い、修士・博士を通じて研究をしてきました。今回の連載でその一部をご報告させていただき、10代の母という生き方がライフスタイルの一つとしてあることを、多くの皆様に知っていただければ幸いです。

初回である今回は、10代の出産数の推移について見ていきます。

### ★10代での出産は増えている？

10代での出産は増えているのでしょうか？実は、10代での出産は1985年の17,877人をピークに毎年減っていて、2010年は13,546人です。これは全出生率の1.26%であり、10代の母親は非常に少数派であることがわかります。人口千対出生率で見ても、近年では2000年の5.5%から2009年は5.0%まで下がっており、10代での出産は数・率ともに減っています。

一方で、10代の人工妊娠中絶件数は1995年以降急激に上昇した後、2000年の46,511件をピークに2002年に初めて減少に転じ、2010年は20,650件と10年で半減しました。2011年は、20,903件と10年ぶりに増加に転じて

います。10代の人工妊娠中絶件数が減少し続けた当時は、産婦人科医師など関係職種が話題として取り上げていた程度でしたが、増加した途端にYahooのトップニュースに現れた時は、私も驚きました。こうした取り上げられ方を見ても、10代の性に対してメディアがどのような関心を持っているのかが垣間見られます。

過去10年間の出産数と人工妊娠中絶数の関係を見てみますと、人工妊娠中絶件数は過去10年で半減していますが、出産数は2002年の21,401人から2010年の13,546人と、それほど大きな増減は見られません。

2000年～2010年までの人工妊娠中

絶件数、出産数、さらに出産数と中絶件数を足して、その年に妊娠した人数と仮定し、出産数から妊娠した人数を除いたものを出産割合として値を計算したものを[図1]に示しました。この図から、10代で妊娠した時に出産を選択する人、人工妊娠中絶を選択する人の割合がおおよそわかります。2000年は出産する人の割合が30.8%と、3人に1人に満たない数でした。このことから、10代で妊娠した際に人工妊娠中絶を選択した人が3人に2人以上いたことがわかります。10代の出産率は年々増えていきましたが、2010年から減少に転じ、2011年では38.9%と、出産する人がおよそ4割という状況です。

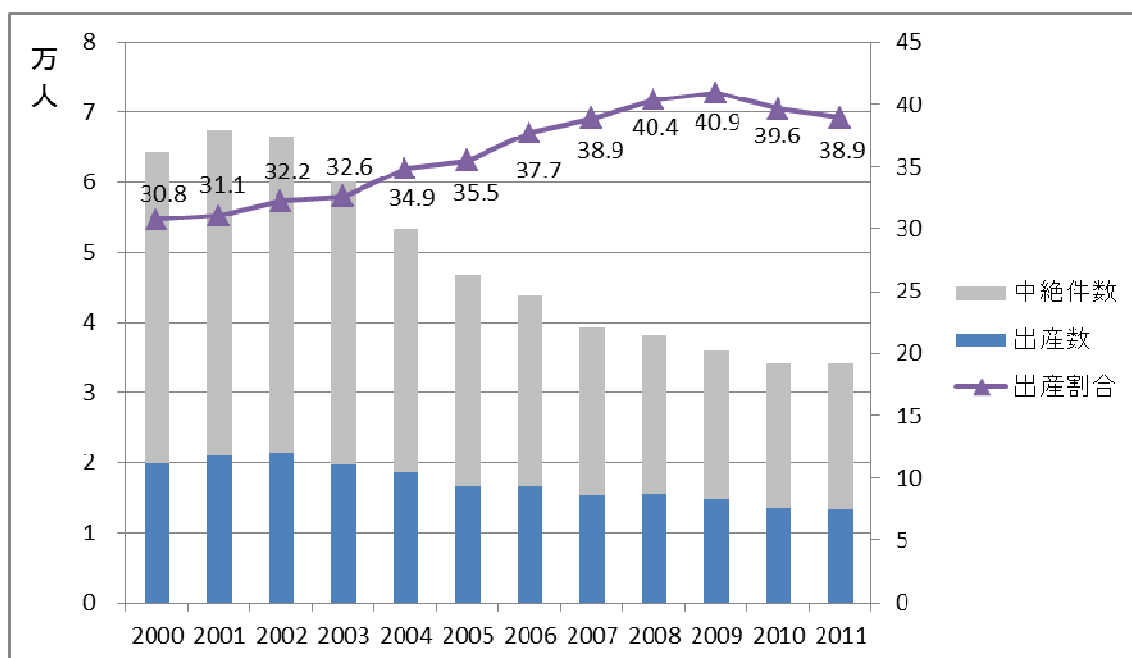


図1 2000～2010年の10代の出産数、中絶件数、出産割合(人口動態統計及び衛生行政報告例から筆者作成)

## ★10代の出生率に影響を及ぼすものは何か

10代の人口千対人工妊娠中絶実施率と、人口千対出生率、高校3年生女子の性交経験率<sup>1)</sup>(以上左軸)、10代の結婚期間が妊娠期間より短い出生(いわゆる「できちゃった結婚」)が嫡出第1子に占める出生構成割合の率：以下、結婚期間が妊娠期間より短い出生：右軸)を示し、1955年から5年おきに比較したものを[図2]に示しました。性交経験率は毎年調査されていないため、便宜的に1974年の実施結果を1975年、1981年を1980年、1987年を1985年、1993年を1990年及び1995年、1999年を2000年、2012年を2009年と、比較的近い年に記載しています。

す。

図2から、1975～1980年の間に人工妊娠中絶率が出生率と逆転しており、出生率よりも中絶率の方が高くなり、現在も同じ状況で推移していることがわかります。出生率は、1955年からみても増減幅はわずかでほぼ横ばいです。10代の人工妊娠中絶件数の増加には性交経験率の上昇が背景にあることが指摘されているように(玉城ら,2007)、人工妊娠中絶率は性交経験率が急上昇した2000年に上昇しています。しかし出生率は、この時もそれほど大きな変化は見られません。このことから、性交を経験する人が増加しても、出産する人数は増えなかったと言えます。

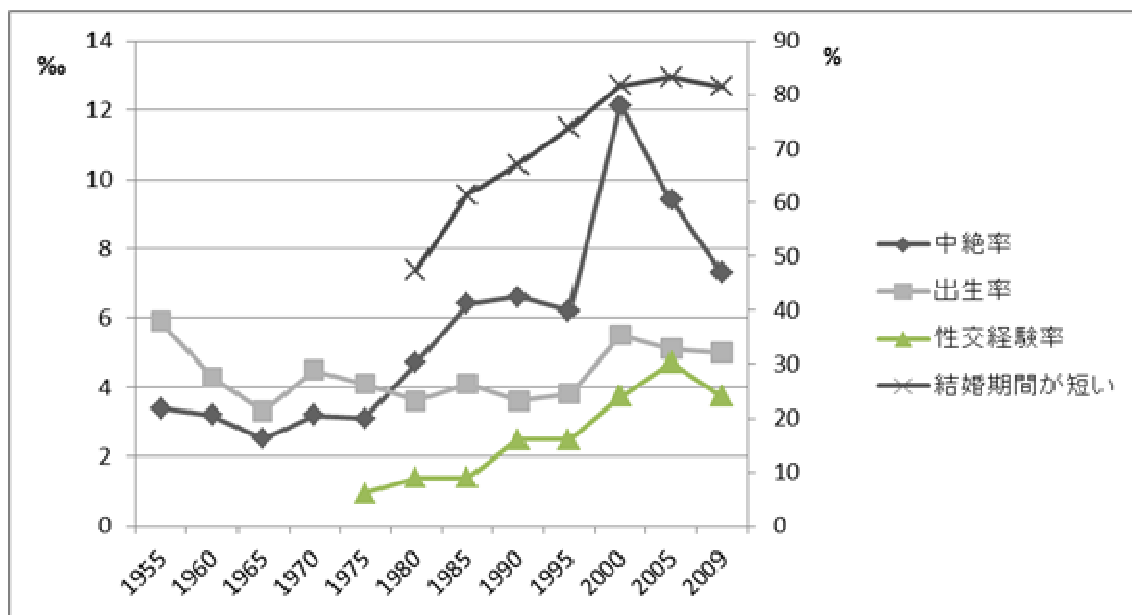


図2 10代の人工妊娠中絶実施率、出生率、性交経験率と結婚期間が妊娠期間より短い出生が嫡出第1子に占める出生構成割合

人工妊娠中絶率は 2002 年から減少していますが、この理由についてピルの普及(佐藤, 2005)や、地方行政における支援の促進(森田, 2008a)が指摘されています。しかし、国内の 16~49 歳のピル普及率はわずか 3%です。さらに、産婦人科受診が必要で 1 ヶ月の価格は 3000 円とやや高額でもあることから、若年層にピルがそれほど普及したとは考えにくい状況です。若年層の人工妊娠中絶の減少は、ピル普及というよりも、図 1 で示したように、妊娠した時に出産を選択する割合が増えていることが理由の一つとして考えられるでしょう。

また、結婚期間が妊娠期間より短い出生は、全年齢中で 15~19 歳が最も高く、2000 年以降は 80%台を超えて推移しています。このことから、近年では 10 代では妊娠前に婚姻するケースは少なく、妊娠後に婚姻したケースが極めて多いことがわかります。結婚期間が妊娠期間より短い出生は 2000 年までは上昇傾向にありましたが、現在は横ばいです。結婚期間が妊娠期間より短い出生が増加したことにより、妊娠した際に、結婚して出産を選択するケースが多いのではないかと考えましたが、結婚期間が妊娠期間より短い出生が増加しても、出生率の変化はほとんどみられませんでした。

このことから、10 代女性の出生率は妊娠者数が多い年に減少する傾向はありますが、性交経験率の上昇や人工妊娠中絶率の増減、結婚期間が妊娠期間より短い出生の増加などに左右されず、過去 50 年間大きな増減はなく、ほぼ一定の割合で推移していることがわかります。10 代の出産は、婚姻制度にのっとらず、ピルの普及で減少することもなく、また人工妊娠中絶件数の増減にも左右されないということになります。それでは、10 代女性の出生率が影響を受けている要因は何なのでしょう。

北村(1995)は、十代における妊娠は、多くの社会的要素の相互作用によるものであるとし、貧困な母親達への社会福祉・生活保護システムや住宅政策、義務教育等一見して家族計画に直接関与していないかのような政府政策も、重要な関わりを持っていると言います。こうした中、先進国中で 10 代での出産が極めて多いアメリカやイギリスは、10 代の母親を取り巻く社会的要因に注目しています。アメリカでは、若年母親の人生の道筋は、幼少期に始まり 30 歳まで持続する不平等な人生の遺産を反映している(Smithbattle, 2007)とされています。また、イギリスでは若年出産は地理的要因や社会経済的地位と関連があること(Babb, 1994)、さらに若年母親全員

が貧困の経験をしていた(Phoenix, 1991)ことが指摘されています。さらに、イギリスで 2010 年に策定された「若年妊娠防止のための戦略」(Teenage Pregnancy Strategy) (DH, DCSf, 2010) では、経済的機会の欠如や貧困が若年妊娠につながる要素であることが報告されています。このことから、アメリカやイギリスでは、若年出産の背景にある社会経済的地位や生育歴などに関心が向けられていることがわかります。こうし

た 10 代の母親の背景にある社会的要因は、日本でも同じようにみられるのでしょうか。

今回は海外に目を向け、先進国中で最も若年出産が多いアメリカと、EU 諸国の中で若年出産が最も多く、若年出産を社会的排除の対象と位置付け、様々な取り組みが行われているイギリスの 10 代の母親の社会的背景を記述し、日本の状況と比較したいと思います。

### 【注】

1) 2005 年から調査項目に変更があり、中学生には質問の文言「性交」を「性的接触(性交)」と変えて調査をしている。また、高校生には「性交経験の有無」を直接問うことを止め、「初交の動機」を問うことで「性交経験ありを間接的にとらえるようにした」(2005 年版児童・生徒の性)

### 【引用文献】

Babb, P. 1994, Teenage conceptions and fertility in England and Wales, 1971-1991, Population Trends, 74, pp12-17.

Department of Health, Department for children, schools and families, 2010, Teenage Pregnancy Strategy Beyond 2010, Department for children, schools and families Publications.

北村邦夫, 1995, 十代の望まない妊娠防止対策に関する研究 1. 世界各国の十代妊娠、中絶、流産、避妊等に関する現状調査, pp148-159, 2. 日本十代女性の性、妊娠、避妊、出産に関する現状調査, 平成 7 年度厚生省心身障害研究 望まない妊娠の防止等に関する研究報告書, pp160-179.

森田明美, 2008a, 若年出産・子育ての現状と福祉的支援の課題, 思春期学, 26(1), pp134-139.

佐藤郁夫, 2005, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究, 厚生労働科学研究研究費補助金子ども家庭総合研究事業, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究 平成 16 年度総合研究報告書, pp1-14.

SmithBattle L., 2007, Legacies of Advantage and Disadvantage: The Case of Teen Mothers, Public Health Nursing, 24(5), pp409-420.

玉城清子, 上田礼子, 2007, 若年母親の申請時に対する知覚と育児行動, 沖縄県立看護大学紀要, pp9-15.

東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会, 2005, 児童・生徒の性, 東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告, 学校図書.

## 10代の母という生き方②

大川 聡子

### ★まえがき

今回は、10代の出産数の推移を追い、10代女性の出生率は、性交経験率の上昇や、人工妊娠中絶率の増加、結婚期間が妊娠期間より短い出生（いわゆるできちゃった婚）の増加に左右されず、過去50年間ほぼ一定の割合で推移していることをお示ししました。今回は海外に目を向け、先進国中で最も若年出産が多いアメリカと、EU諸国の中で若年出産が最も多く、若年出産を社会的排除の対象と位置付けているイギリスの10代の母親の社会的背景を記述し、日本の状況と比較したいと思います。

その前に、若年出産の定義が日本とアメリカ・イギリスでは異なりますので、まずそちらを整理していきたいと思います。

### ★若年とは何歳のこと？

若年出産の定義について、日本では、20歳未満の出産を若年出産として定義している(定月, 2009)ことから、多くの若年母親を対象とした論文は、20歳未満で出産した母親を対象にしています。

アメリカでは、若年妊娠として示さ

れているデータの多くは20歳未満を対象にしていますが、15～17歳の母親と18～19歳の母親とを区分した妊娠率、出産率、中絶率を算出し、それぞれの年齢層における傾向を見出しています(CDC, 2012)。先行研究でも18歳未満で出産した母親と18～19歳で出産した母親を区別し、比較したものが多いです。その内容として、18歳未満では短大、大学を修了する者の率が少ないこと、5歳までに養子に出す確率が高いこと、虐待やネグレクトを受ける率が高いこと(Hoffman, 2006)、また父親の収入が少ないこと(Brien and Willis, 1996)が指摘されていて、若年出産した母親の中でも、より若い母親に注目した支援が必要であることが強調されています。

イギリスでは、若年母親は18歳未満の母親を指します。若年母親の大多数である18歳や19歳での妊娠と18歳未満の妊娠は大きく異なり、18,19歳の母親は母性役割を持つことに大きな困難は見られない(Phoenix, 1991)とされています。

このことから、アメリカやイギリスでは、若年出産の中でも母親の年齢を18歳で区切り、18歳未満で出産した

母親に、より困難が見られるとしています。このことには、イギリスとアメリカの州の多くは、成人年齢が 18 歳であることも大きく関連しているでしょう。

日本では、若年の人工妊娠中絶が急激に上昇した 2003 年に、人工妊娠中絶件数を従来の 20 歳未満一括表記から 15 歳未満、及び 15 歳から 19 歳までの 1 歳刻みに変更しました。2009 年に人工妊娠中絶数は減少していますが、14 歳未満のみ中絶件数が上昇したことに着目した報道もなされました。このことから、日本でも若年母親の年齢をさらに区分することで、よりリスクを細分化し特定しようとする動きがみられます。しかし、18 歳未満、18 歳以上といったような、年齢により区切って若年母親の特性を見出すといったことは行われていません。

### ★アメリカ・イギリスの若年母親「問題」

先進国中における若年出産割合が 2008 年で 40.0%と最も多いアメリカでは、若年母親は社会問題とされ、そのリスクも多様に述べられています。「若く未婚の母親の 2/3 は貧困であること(Sawhill, I.V.,1999)、公的扶助を受けている母親の 52%は若年で子どもを持つこと(Moore,1993)など、若年の出産を契機とした貧困、また貧困に陥る理由としての若年の出産と、順序

は異なるが密接な関連があると指摘されています。子どもの福祉の観点からは、若年母親の子ども達は早産しやすく、低出生体重児であること(Hamilton et al ,2006)、また、非嫡出子の半数が若年母親から生まれることや、里子に出されることが多いこと(Steir, 1993)もリスクとして挙げられています。思春期の子育てには、実質的な公的負担が必要となることから、若年母親の医療費の高さ、養子縁組サービスへの費用、税金の少なさが指摘されています(Hoffman, 2006)。

また、イギリスでも若年出産(18 歳未満)は 2010 年で 17.8%と EU 諸国中で最も高く、社会問題とみなされています。その理由として、乳幼児死亡率が全世代の母親と比較して 30%以上高いこと(ONS, 2010)。若年母親は早産になることが多く、低出生体重児を出産するリスクが 25%高いこと(Botting, 1998)、妊娠期のケアを受ける時期が平均して妊娠 16 週と遅いこと(DH, 2007)、若年母親は妊娠前から喫煙している者が多く、妊娠中に禁煙する者が少ないこと(Salih, 2003)、妊娠中の栄養状態も悪いことが指摘されています。

また若年母親の子ども達は、転落や異物誤嚥などの事故が多く、多動などの行動障害も見られ、こうした問題に付随するのは、若年母親の感情の不健康さが一因である(DCSf, 2007)とも言



われています。また、若年母親が出産後精神的不健康な状態にある者の率が、他の世代の母親と比較して高いこと、20歳以下で出産した父親に子どもと同居したことのない者が多いこと、義務教育を終えているものの率が低く、職業訓練や教育を受けている者も30%であること(同世代では90%)、若く(23歳以下)して子どもを持つ父親が失業する確率は2倍であることなどから、若年で出産することと母親・子どもの身体的、精神的リスクまた家族の社会的リスクの関連も指摘されています(DfES, 2006)。このように、アメリカ・イギリスでは母親や子どもの身体的問題が、日本と比較すると顕著に見られます。こうした背景に、若年出産した母親が日本と比較して、家族関係及び経済的に不安定な状況にあることが推察されます。

### ★若年母親「問題」への反証

若年母親を社会問題化するこうした論調に対し、近年では、リスクが過大評価されているのではないかといった指摘もなされています。

Smithbattle(2007)は、若年の子育てに起因する否定的な面が過度に強調されているとし、初期の研究は、若年を早期の子育てに向かわせ、若年の発達を危険にさらす多くの背景因子(経済的に困窮した地域に住むことや、教育の欠如やひとり親であることなど)を見

逃した。ここ20年の研究において、研究者達は母親達の幼少期の不利な要因をコントロールし、彼女らの立場を理解し、若年出産がもたらすとされていた不利な要因は大幅に縮小されたか、全く見られなくなっている

(Geronimus, 1994, Holmund, 2005, Hotz, 2005)と述べています。長期的な研究においては、若年母親がその後もより良く暮らしていることが明らかにされています。Sonyaら(2002)は、若年で子どもを産んだ20～50代の母親にインタビューをし、母親達が教育を受け続けようとし、結婚生活への強い思いがあり、信心深く、ドラッグを使わず、控えめに生きている姿を描いています。

Fustenberg (1989)は、アメリカ都市部に住む黒人の若年母親300人を17年間追跡調査した結果、経済的に安定していて、高等教育を受けた親がいる人は成功しやすいこと、また、教育への意欲や態度は非常に重要であり、学校で成功を収めていたり、第1子出産の際に教育を受けることを強く希望した者は、後に成功する可能性が高いと述べています。このことから、若年母親の家族の環境や学校への親和性がその後の成功を規定していると考えられます。

このようにアメリカでは、若年の出産それ自体をリスクとする政府の考え方と、若年で出産した母親の社会的背

景に注目し、出産することが問題なのではなく、背景に問題があると指摘する 2 つの考え方が存在します。しかしどちらの立場に立っても、若年の出産は予防すべき存在であり、介入が必要とされる存在です。

イギリスにおいて若年の妊娠が問題視される背景として、Coleman(1999/2003)は、若い時期に親になることの否定的な面のみを見ているとし、10代の親問題に関する大多数の研究は、10代が親になることについて「欠陥モデル(defective model)」と呼ばれる考えを支持するとしています。また Jones ら(1992)は、若年の妊娠をモラル・パニックとする見方の一部には、若い女性が福祉の恩恵などを得るために、妊娠を利用するのではないかという懸念があるとしています。しかし、これを支持する証拠は見当たらず、他の研究でも若年母親は年長の母親より「悪い」親になるとみなす理由は見当たらないことも述べています。Phoenix(1991)も、若年母親に行った調査結果から、母親達は貧困で学歴や就業経験も乏しいという、極めて困難な環境に置かれているが、こうした困難は、若者や若年母親に限定して帰すべき困難では全くなく、母親達に向けられているモラル・パニックは不当なものであると述べています。このように、イギリスでは若年母親が実態よりも問題視されていることが指摘されています。

イギリスのチャリティ団体 Trust for the study of adolescence では、望んで出産した 41 人の若年母親、その 10 人の夫に対してインタビューし、「計画された」若年の妊娠について報告しています(Cater, 2006)。ちょうどブレア政権が教育改革を行っていた時期のことです。私はインターネットでこのような調査が行われたことを知り、ぜひ詳しい内容を知りたいと思い、イギリスに行つてこの団体のプログラム管理者 Lowe 氏に聞き取り調査を行いました。インタビューに答えたほとんどの母親は、家族を作ること以外に夢が持てなかったと言います。若年母親は出産することで社会的地位が上がり、自信が持てるようになっていました。イギリス政府は教育を受けることにより、より良い生活を目指すことを推進しているため、こうした調査結果は好ましくないだろうが、このような現実があることを認識しなければならない、ことも述べていました(大川, 2008b)。

### ★若年出産をもたらす社会的要因

日本においては、若年出産と社会的背景の関連について着目されていないため、若年出産をもたらす社会的要因については明らかにされていません。しかし、若年出産が多いアメリカやイギリスにおいては、どのような属性や

地域に居住する者が若年出産に至るか、詳細に調査されています。

アメリカでは、若年出産する人数は人種間で大きく異なります。15～19歳の出産率はラテン系アメリカ人が最も高く、次いでアフリカ系アメリカ人、アメリカンインディアンと続きます。若年出産する白人やアジア系アメリカ人は少ないです。また地域的にも差がみられ、若年妊娠が多いのはテキサス州、ニューメキシコ州、ミシシッピ州などアメリカ南部であり、アメリカ全土において10代の妊娠率は低下していますが、低下率が低いのもアメリカ南部です。また、若年の出産が多い州は、貧困率が総じて高く、18歳以下で結婚する者の割合と地域の特性の関連を調べた調査では、男性で無職の者が多く、収入が低く、貧困であり、福祉を受けている人が多い地域ほど、18歳以下で結婚する者の割合が高いです(U. S. Census Bureau)。

イギリスでは、若年妊娠率が極めて高かったことから、1999年から10代妊娠戦略(Teenage Pregnancy Strategy)が開始されました。イギリスの13～19歳の母親は33,600人で、人口千対14.9人です。そのうちひとり親が60%を占め、70%が教育も職業訓練も受けていない状態(NEET)であり、剥奪された地域(Deprived Area)<sup>7)</sup>に住んでいます(DCSf, 2007)。また、剥奪された地域10%の71%が18歳以下で妊娠します

が、最も整備されている地域10%においては18%と4倍近い開きがみられます(Offices for Deputy Prime minister, 2004)。また、最も剥奪された地域20%において、教育到達度と18歳以下の妊娠について比較すると、教育到達度が低い人ほど妊娠率が高いです(DfES, 2006)。若年母親、23歳未満の父親となる確率とリスク要因(母親が若年で出産、父親の社会階層が低い、素行の悪さ、住宅供給を受けている、読み書きが困難)との関連では、これらの全ての要因が重なるほど若年で出産する確率が高い(Centre for Longitudinal Studies, 2005)など、若年の出産と社会的背景についての関連も明らかになっています。

### ★若年妊娠・若年母親に対する取り組み

アメリカにおいては、10代妊娠を抑制するキャンペーン(The National Campaign to Prevent Teen Pregnancy)が展開され、1996年から2005年の10年間で10代の妊娠を1/3にすることを目標に、書籍の出版やイベントの実施、コミュニティで10代妊娠防止のために活動している人への技術的支援、純潔教育の推進、親や10代への啓発教育などを行っています。性行動を節制し妊娠を避けるようになったこと、また、性行動の際に避妊するようになったことにより、若年妊娠は年々減少

を続けています(AGI, 2006)。しかし先進国の中では依然として 10 代の妊娠率が高いため、キャンペーンは 10 代の妊娠を 2006 年から 2015 年の間に現状の値をさらに 1/3 にする目標を掲げて活動しています (The National Campaign to Prevent Teen and Unplanned Pregnancy, 2006)。さらにアメリカでは、Healthy People 2000 が策定され、日本でいう健康日本 21 のような、健康に関する目標値を設定した取り組みがなされているのですが、2010 年に策定された Healthy People 2020 では、青年期の健康が項目に追加され、若年及び希望しない妊娠についても取り組みの目標値が定められました。

アメリカの主な公的援助制度の中で母子を対象とする制度は、TANF が代表的です。下夷(1999)によれば、TANF を受給する 10 代の未婚の母に対しては特別な配慮が払われており、学校に在学すること、そして自宅または責任ある成人の監督下で生活することが要請されています。TANF は、10 代未婚出産は母親本人にも子どもにも問題である、という認識を前提にして、10 代未婚母子家庭の形成を抑制し、ふたり親家庭を奨励しています。こうした婚外子出産に関する抑制的な取り組みに関しては、望まない結婚や中絶の増加を招くことが懸念されています。また、政府がこうした私的問題に介入するこ

との意味や効果についても疑問視する声があります(尾澤, 2003)。

イギリスでは、性教育などの取り組みは 20 代未満を対象に行っていますが、若年母親に対する支援は 18 歳未満に限定されています。2006 年にイギリス政府が地方公共団体や Primary Care Trust を対象に発行したパンフレット(DH, DCSf, 2007)では、10 代の妊娠率を減らすだけでなく、10 代母親の支援をしていくことが明文化されました。これは Lowe 氏によれば、非常に画期的なことだったそうです。また、社会的排除対策本部(Social Exclusion Unit: 以下 SEU)が 1999 年に発行したレポート'Teenage Pregnancy'では、2003 年末までに家族や夫と同居できない孤立した 18 歳未満の親に対し、適切な宿泊施設へと移すことを目標としました。イギリスではこうした政府や自治体の取り組みだけではなく、10 代で妊娠した女性や、子どもを持つ若年の親に対して、様々な団体が活動を行い、政府の活動を補完しています。具体的な活動として、若年母親が生んだ子どもの父親(10 代母親の夫)に対し、父性を育て、生まれた子ども達に経済的支援を行うために、養育にどのくらいの金額がかかるか計算するプログラムの実施、親としてのスキル、育児、教育、住居について相談するアドバイザーがいます(SEU, 1999)。

さらにアメリカやイギリスでは、若

年母親が出産した年齢に注目し、より若年で出産した母親に対する取り組みも行われています。イギリスでは、**Care to Learn** プログラムとして、20歳以下の男女が、教育や職業訓練を受けている間の保育料を支払う制度や、16歳以下で妊娠した母親が義務教育を修了するための様々なコースを準備しています。アメリカでも TANF 受給の際に、高校卒業の学歴をつけさせるための配慮がなされています。このように、アメリカ・イギリスでは若年妊娠を予防する政策と、若年母親を支援する政策が同時に行われています。若年妊娠予防を推し進めつつ、若年母親の社会的不利の拡大を防ぐためには、ジレンマを抱えながらも両義的な施策を同時に行っていく必要があると考えられます。この点は若年出産を「望まない妊娠」といった視点でのみ可視化し、対策を検討している日本とは異なっています。若年母親に対する支援が行われている背景に、若年妊娠による人工妊娠中絶実施率が低く、出産する女性が多いこと、ならびに宗教教義上、性教育を受けることができなかつたり、人工妊娠中絶を行うことができない女性に対しての政策的配慮があることが考えられます。

また、アメリカやイギリスでは婚外子出産の抑制や、出産後の子どもを家族から引き離すといった、政治による家族への介入が行われていました。こ

うした家族のあり方に対する政治的介入が積極的に行われることにより、両国とも若年妊娠は減少しています。しかし、こうした介入は、介入に反して出産した若年母親や婚外子に対する、地域からの社会的排除やスティグマを付与する危険性もはらんでいます。

日本では社会的排除や人種間格差といった社会的不利は、先に述べた2カ国と比較して少なく、若年母親は社会問題とはみなされていません。このため、若年母親に特化した政策もありません。この理由として、若年出産した母親の子どものリスクが諸外国と比較して少ないこと、家族との同居率が高く、若年母親支援が家族に回収され不可視化されていることが挙げられます。前者については、日本の妊産婦死亡率、周産期死亡率及び乳児死亡率が先進諸国と比較しても極めて低く(厚生統計協会, 2011)、日本の医療体制が整備されていること、そして若年母親の母数が少ないため、詳細な調査がなされていないことによるものと考えられます。後者については、日本では妻の年齢が29歳以下の世帯において、妻の親もしくは夫の親のいずれか一人と同居している割合は24.9%(国立社会保障・人口問題研究所, 2008)であり、他の世代では別居している率が年々高くなっているにもかかわらず、妻が20代の世帯のみ、同居率が上昇しています。アメリカ、イギリスでは既婚子との同居は

1%前後と、ごく少数です(内閣府, 2001)(厚生省, 1982)。このことから、日本の母親は育児支援を家族から受けている人が多いことが予想されます。また、アメリカやイギリスは、若年母親の婚姻率が日本と比べて低く、若年母親はすなわち母子家庭を意味します。しかし、日本においては、若年出産した母親の婚姻率は75.9%(2010年)であり、アメリカ21%、イギリス10%と比較して極めて高いです(UNICEF, 2001)。このため、夫の支援を受けている若年母親が多く、父母、義父母などの家族による支援も提供されているために、若年母親の持つニーズは表面化されておらず、若年母親が社会問題化されていないと言えます。

まとめると、アメリカやイギリスでは若年母親は教育、育児、経済的困難など様々な問題が挙げられています。さらに、インフォーマルサポートも乏しい状況にあります。このため、若年母親は社会問題として可視化されており、母親、父親に対し育児を支援するための様々な支援が提供されています。しかし、公的に大規模な支援が提供されることで、スティグマが付与される危険性もあります。日本では、若年母親の実態は明らかになっておらず支援が乏しいですが、その反面、アメリカやイギリスにない、インフォーマルサポートによる支援が提供されていることが大きな特徴です。

## ★若年母親の社会的要因が不可視化される理由

「若年出産層」の概念について、アメリカでは若年母親を集団(人種)問題とし、イギリスでは社会的排除問題とみなしています。イギリスは、若年母親を社会のリスクとし、その保険としての若年母親の支援ですが、アメリカでは個人的に不利な立場にある人への「代償」であるため、支援を受けないことによるペナルティが発生します。どちらも、若年母親に対して支援が行われていますが、その方向性は全く異なります。

妊娠・出産は社会的、政治的な位置付けのみにとどまらず、当事者となる夫婦それぞれの原家族を含めた、家族のライフコースのあり方を反映しています。若年出産件数の少なさ、あるいは人工妊娠中絶件数の多さは、就労、教育、家族背景、保健医療へのアクセスなどの社会的要因、結婚規範、性交、避妊などの変数に大きく影響を受けていると考えられます。

日本では事実婚状態の若者が少なく、また非嫡出子もアメリカやイギリスと比較すると極めて少ないことから、結婚という規範に則らない出産や家族は非常に少ない現状にあります。また、結婚した子どもとの同居率も高いことから、親の考えが直接子どもの妊娠・出産に反映されやすいと考えられます。このことから、若年出産に関しても日

本では原家族の影響を大きく受けていることが予測されます。こうした現状にある日本と比較して、アメリカ・イギリスは、出産前にいったん同棲といった形を経ることが多いために、妊娠・出産に対して原家族の意向よりもカップルの合意が重視されやすい状況にあります。また、事実婚や非嫡出子が多い背景には、多様な家族を許容する社会や、それを支援する制度の存在があります。

日本はアメリカ、イギリスほど若年の出産と社会的背景とが直結したものとはみなされていません。日本とアメリカ、イギリスの若年出産層の比較から、若年出産の社会的要因が注視されにくい理由として、以下の4点があると考えました。①10代で妊娠した際の人工妊娠中絶率が高いこと、②若年に出産する者の婚姻率が高く、家族としての形を成すために問題が表面化しないこと(母子家庭ではないために、支援が必要な存在であるとみなされにくい)、③結婚後も夫や原家族の支援を受けやすい環境にあること、④若年出産したことの子どもへのリスクが、他の2カ国と比較して少ないことです。

アメリカやイギリスでは、若年出産層の背景にある社会的要因を見極め、こうした要因を踏まえた公的支援が行われています。しかし、日本においては、出産後も家族からのインフォーマルサポートが受けられることから、若

年出産層に特化した支援はなく、一般的な母子保健・福祉施策による対応にとどまり、アメリカやイギリスで提供されている公的支援の役割を、家族が担っていると考えられます。

## ★おわりに

日本では、アメリカやイギリスと比較して、若年母親に対し家族の支援があることから、若年出産層の社会的要因が可視化されにくい現状にあります。次回は、日本の若年出産層に内包される社会的「問題」について、文献をもとに若年出産層の実態とその特徴を明らかにしていきたいと思います。

## 【引用文献】

- The Alan Guttmacher Institute. 2006. U.S. Teenage Pregnancy Statistics National and State Trends and Trends by Race and Ethnicity. New York, The Alan Guttmacher Institute.
- Botting B, Rosato M, and Wood R., 1998, Teenage mothers and the health of their children population Trends 93, pp19-28.
- Brien, M.J., and Willis, R.J., 1996, Costs and consequences for the Fathers. In R.A., Maynard(ed.), Kids Having Kids: Economic costs and Social Consequence of Teenage Pregnancy, Washington, DC, The Urban Institute Press.
- Cater, S. C., 2006, 'Planned' teenage Pregnancy Perspectives of young parents from disadvantaged backgrounds, The Policy Press.
- Centers for Disease Control and Prevention, 2012, National Vital Statistics Reports, 60(7).
- Centre for Longitudinal Studies, 2005, CLS Cohort Studies Data Note4.Contraception, and fatherhood: Data on Men and Women From Cycle 6(20029 of the national Survey of Family Growth, U. S. Government Printing Office.
- Coleman, J., Hendry L., The Nature of adolescence (3 rd edition), 1999, Routledge, (= 2003, 白井利明他訳, 青年期の本質, ミネルヴァ書房)
- Department for Education and Skills, 2006, Teenage Pregnancy Next Steps: Guidance for Local Authorities and Primary Care Trusts in Effective Delivery of Local Strategies, DfEs Publications.
- Department of Health, 2007, Unpublished analysis of hospital episode statistics first ante-natal visit data.
- Department of Health, Department for children, schools and families, 2007, Teenage Parents Next Steps: Guidance for Local Authorities and Primary Care Trusts DfEs Publications.
- Furstenberg F, F., Brooks-Gunn J., Morgan S, P., 1989, Adolescent mothers in later life Human Development in Cultural and Historical Contexts, Cambridge University Press.



- Geronimus, A. T., Korenman, S (eds.) 1994 Does young maternal age adversely affect child development. Evidence from cousin comparisons in the United States, *Population and Development Review*, 20(3), pp585-609.
- Hamilton, B.E., Martin, J.A., & Ventura, S.J. 2006, Preliminary Data for 2005. Health E-Stats. Released November 21.
- Hoffman, S.D., 2006, By the Numbers, The Public Costs of Teen Childbearing, The National Campaign to Prevent Teen Pregnancy.
- Jones, G and Wallace, C., 1992, Youth, Family and Citizenship (=2002 宮本みち子, 鈴木宏訳, 若者はなぜ大人になれないのか, 第2版, 新評論)
- 厚生省, 1982, 厚生白書(昭和57年版),  
<http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz198201/b0022.html> (最終閲覧日 2012/03/29)
- 厚生統計協会, 2011, 国民衛生の動向 2011/2012.
- Moore, K. A., Morrison, D. R., (eds.) 1993 Data on Teenage Childbearing in the United States, Child Trends, Inc.
- 内閣府, 2001, 平成12年度高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果の概要,  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h12\\_kiso/html/0-1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h12_kiso/html/0-1.html) (最終閲覧日 2012/03/29)
- Office for National Statistics, 2010, Infant and perinatal mortality in England and Wales by social and biological factors, 2009, (最終閲覧日 2012/07/28)
- 大川聡子, 2008b, 若年父親・母親の社会的背景と支援のあり方—イギリスの事例を通して—, 大阪府立大学看護学部紀要, pp51-56.
- 尾澤恵, 2003. 米国における96年福祉改革とその後, レファレンス, pp72-87.
- Phoenix Ann, 1991, Young mothers?, Polity Press.
- Salihu H, Aliyu M, Pierre-Louis B Alexander G, 2003, Levels of excess infant deaths attributable to maternal smoking during pregnancy in the United States. *Journal of Maternity and Child Health*; 7, pp219-227.
- Sawhill, I.V., Analysis of the 1999 Current Population Survey.
- 下夷美幸, 1999, アメリカにおける母子家族と福祉改革—AFDCからTANFの移行—, 社会福祉, pp37-57.
- SmithBattle L., 2007, Legacies of Advantage and Disadvantage: The Case of Teen Mothers, *Public Health Nursing*, 24(5), pp409-420.
- Social Exclusion Unit, 1999, Teenage Pregnancy, London; The Stationery Office.

- Sonya, R., Durdin, F., 2002 Teenage mothers becoming successful adults,  
Dissertation Abstracts International Section A: Humanities & Social  
Sciences; 63(3-A), p1142.
- Steir, D. M., Levelthal, J.M.,(eds.) 1993 Are Children Born to Younger Mother  
at Increased risk of Maltreatment? Pediatrics, 91(3), pp642-648.
- UNICEF, 2001, A league table of teenage birth in rich nations, Innocenti report  
card Issue No.3.

## 10代の母という生き方③

大川 聡子

### ★まえがき

今回は、日本ではアメリカやイギリスと比較して、若年母親の家族の支援があることから、若年出産層の社会的要因が可視化されにくい現状にあることをお示ししました。今回は、日本の若年出産層に内包される社会的「問題」について、文献をもとに明らかにしていきたいと思います。

### ★若年出産層に内包される社会的問題

日本においては、これまで若年出産層の固有の社会的背景については注視されていませんでした。これは、若年妊娠・出産については「望まない妊娠」や「性教育」などの文脈で語られ、医学の分野で主にアプローチが行われてきたことによるものと考えられます。若年出産の身体的問題については、低出生体重児の出産率の高さ、低栄養状態による貧血の発生率の高さが指摘されています(加藤,2006)<sup>1)2)</sup>。この理由として、初診時期の遅延(望月,2005)や、妊婦健診や母親教室の受診率が低く、出産前に必要な知識や情報が十分でなく、胎児の栄養面などの問題に早めに対応するのが難しいこと(田中,2006)が挙げられています。しかし、こうした報告は医療機関ごとに集計されたものが多く、全体の傾向をつかむことは困難です。若年であっても、結婚して、通常の産科管理を受けてさえいれば、産科的異常が増加する傾向は認められない(片

桐,2001, 久保,2000)とする見方もあります。日本において若年出産層が問題視されるのは、身体的問題よりもむしろ社会的問題です。

若年出産をもたらす「社会的要因」について、アメリカやイギリスにおいては、貧困率や人種、家族背景との関連が指摘されていますが、日本においては出産前の社会的背景は注視されず、調査も乏しい状況にあります。若年母親の研究の多くは、出産したことによる社会的問題を主眼としています。若年母親は青年期に子育てをするという、ライフサイクルの交錯を生じる存在であり、教育、就労、育児支援など多様なニーズを持っていることから、出産後のニーズの方がより可視化されやすいからであると推測されます。

今回は、若年出産に関連するこれまでの研究から、若年で出産した後に生じる問題について、経済的問題、学業の中断、家族の問題の3つに大別して整理し、日本において若年出産層がどのようにとらえられているかを明らかにしたいと思います。

### ★経済的問題

坂本(2007)は、消費生活に関するパネル調査結果の分析から、若齢出産という行為は、生まれた子どもの成人後の Outcome(学歴・就業)に対して負の影響を与えており、かつその子ども自身も若齢出産する傾向が(相対的に)高いことから、負の影響の連鎖が

続くとしています。妊娠や出産の経験の中で感じる不安・苦労の中で最も多いのは全年齢を通して「経済的負担が大きい」ですが、24歳以下の妻ではその割合が39.5%と、他の世代の母親と比較して極めて高いです(全年齢平均26.8%)。若年層に経済的問題が多い理由として、若年母親世帯の職業に無職が1割弱を占め、経済的な問題が多いと予測されること(安達, 2006)。母親が専門的知識や技術を持たない結果、専門的職業に就くことができず、不安定就業にならざるを得ない(森田, 2004)といった、母親の雇用の不安定に起因する問題が挙げられています。厚生労働省が実施している賃金構造基本統計調査によれば、賃金は最終学歴と密接に関連することから、10代で出産した母親は学業を中断することにより、不安定就労に陥りやすいと考えられます。また、10代で婚姻した妻の夫の約半数は24歳未満であり(厚生労働省, 2006)、妻の年齢が24歳以下の場合、夫の年収は、400万円未満が69.3%と全体の約7割を占めています。また無収入の夫も7.7%おり、妻の年齢20代後半群、30代前半群と比較して多いです(国立社会保障・人口問題研究所, 2008)。このことから、夫も若年であり、就業期間が短いために収入が不安定であることが予測されます。阿部(2008)は、父親が20代前半の子どもの貧困率が全年齢中で最も高く、剥奪指標[親が子どもに与えたいが、経済的な理由で与えることができない社会的必需品(高校までの教育、本、学校行事の参加等)が欠如している数]が最も大きいのは、親の年齢が25~29歳であることを示しています。その理由として、若年層の雇用の非正規化を挙げています。若年母親の夫も多く

は若年であることから、経済的困難を抱え、社会的必需品も子どもに与えられない状況にある割合が、他の年代の母親よりも高いと考えられます。

窪田(2011)は、経済的に脆弱な若年において出産したことによる、親の一時的な貧困が子どもの就学に負の影響を与えている可能性を示唆しています。そして若年母親の子どもの就学を向上させるためには、若年出産を抑制するような政策よりも、出産後の経済的な支援が効果的であると言います。また豊かな家計においては(子どもの就学に)母親が若年出産の影響はないとされています。母親が若年出産だとしても、経済的に豊かな家庭であれば子どもの就学には影響を与えないのだとすれば、子どもの教育は若年母親の問題というより、若年母親が抱える経済的困難が問題だと考えられます。原家族が抱える経済的困難が解消されない限り、若年母親が貧困の轍から抜け出すことは困難でしょう。

ではなぜ、こうした若年層の経済的問題に関心が払われないのでしょうか。宮本(2004)は、日本では、若者を親が保護する慣行が健在で、経済基盤が弱体化していることが隠されていることを挙げています。また、大学進学率は両親の年収により大きく異なっており<sup>3)</sup>、耳塚ら(2003)によれば、フリーターとして卒業していく生徒達の出現率は、家庭の社会階層的背景と密接に結び付いていると言います。若年層の不安定雇用は、若年であり保護されているゆえに問題が不可視化されているだけでなく、原家族の階層を引き継ぎ、世代間にわたって継続している問題です。

このことから、若年母親に指摘される経済的問題は、出身階層や学歴、親からの保護、若年層の雇用の非正規化などにより、重層的に起きている問題であると言えます。

### ★高校中退による学業の中断

2010年の高等学校進学率は98.0%と前年比0.1%増加し、過去最高を記録しました。また、2009年の高等学校中途退学者は1.7%と、平成18年度をピークに年々減少しています。しかし、これは1年間みの数字であり、入学当初からの卒業率は92～3%、定時制高校においては85%前後です(平塚,2011)。学年が上がるにつれて中退率は下がるため、現在の中退者から学校全体の生徒の在籍数を計算する現在の方式では、中退率が低く計算されることとなります。また、学校を退学してサポート校に転学した生徒は中退でなく「転学」となりますが、高校を退学して通信制などに入った学生の卒業率が低いことも指摘されています。このことから、実際に高等学校を中途退学する学生は一割近くいると推察されます。

高等学校を中途退学する理由で最も多いものは「学校生活・学業不適応」が39.3%、次いで「進路変更」が32.8%と7割を超えており、「学業不振」や「問題行動」での退学者は年々減少しています。経済的理由で退学した学生は2.9%です。内閣府が2009年に高校中退者を対象に実施した調査でも、中途退学の理由は「高校の生活が合わなかった」が49.4%と最も多く、次いで「人間関係がうまく保てなかった」「勉強が嫌いだった」と続き、妊娠、出産は中

途退学の理由には挙がっていません(内閣府, 2011)。北村(1995)は、若年妊娠層の14.8%が高校中退者であったことを示していますが、妊娠して高校を退学したのではなく、高校を退学してから妊娠した人が多いと考えられます。

在学中に妊娠し出産を決意した場合、学業を継続することはできないのでしょうか。山中(2007)は、公立高等学校で生徒の妊娠が明らかになると多くは中途退学を選択するといいます。斉藤ら(2000)も、都内93校の公立高校に対し調査を行った結果、在学中の出産例はわずかであったと述べています。

これらの内容から、現実的には高等学校で妊娠した場合、退学して出産する、もしくは人工妊娠中絶を選択する生徒が多いと考えられます。染谷(2004)によれば、教員も、生徒に対する学習権の保障を認識していても、妊娠した生徒の学習権保障に関しては、ジレンマを感じる人が多いとしており、学校側も妊娠した生徒の受け入れ態勢が整っているとは言い難い状況です。上野(2007)が全国の通信制高校115校にアンケートを取った結果、97%の高校に学齢期前の子どもを持つ生徒がいましたが、託児室のある高校は14校(12%)でした。子どもを持つ生徒が多いにもかかわらず、託児室を設置している学校が少ないことから、上野(同)は、修学は家族の協力に依存しているとし、一人ひとりの学習権の保障はなされていないと指摘しています。さらに、山中(同)は、中途退学した後は、学校は生活実態を把握することができておらず、子育て支援機関は、学校と連絡を取ることがほとんどないといいます。これまで深く関

わってきた学校での情報が子育て支援機関にもたらされることはなく、学校とも関係が途切れてしまうため、若年で出産した母親達が必要な支援を受けられているのか把握しにくい状況にあります。また出産後通信制高校で学ぼうとしても、託児施設のある学校は少なく、家族の協力がなければ修学は困難です。若年で出産することにより経済的問題を抱えることは明白ですが、それを克服するための修学さえもままならない状況にあります。

### ★家族の問題

修学のための支援も十分でなく、家族の支援を頼りにしている日本の若年母親ですが、若年母親の家族は、修学を支援しうる存在なののでしょうか。若年母親の家族の「問題」として、出産した子どもに非嫡出子の割合が多く、配偶関係が不安定であること(安達, 2006)が指摘されています。先に述べたように、結婚期間が妊娠期間より短い出生数及び、嫡出第1子出生に占める割合(厚生労働省, 2010)によると、結婚期間が妊娠期間より短い出生数が嫡出第1子に占める割合は25.3%(2009年)ですが、15～19歳では81.5%です。このため、若年母親の大多数は婚姻前の妊娠であることが分かります。さらに日本の非嫡出子の割合は2.1%(2009年)であり、各国と比較して極めて少ないですが、10代に限ると24.1%(同)となり、他の世代と比較すると特出して高いです。母親が10代で出産した子どもは、婚姻している夫婦の元に生まれた子どもがおよそ75%です<sup>4)</sup>。10代で出産した子どもに非嫡出子が多いのは、婚姻関係がなく出産した母親、いわゆる「未婚の母」

が多いことが挙げられますが、日本の婚姻年齢が男性18歳、女性16歳であり、男性が18歳に満たないために婚姻することができないことも理由として挙げられます<sup>5)</sup>。婚姻前の妊娠であっても、多くは妊娠中に婚姻しており、非嫡出子となる子どもは婚姻前の妊娠件数と比較すると数少ない状況です。このことから、婚姻関係にない10代の女性が妊娠した場合、婚姻して出産する経過をたどることが多く、妊娠が婚姻のきっかけになっている者が多いと考えられます。また婚姻しても、妻が19歳以下の場合の有配偶者に対する離婚率は69.65%であり、全年齢総数5.9%と比較して極めて高く、婚姻状況は不安定です。

若年母親の夫については、収入や周囲のサポートが十分でないことが多い(前川, 2001)ことが指摘されています。さらに、子の父親が十分に夫としての役割を果たす余地がなかったり、子の父親としての役割を果たすことができにくい状況にある(森田, 2004)ことなど、夫の収入や父親としての資質に関しても問題とされています。しかし、夫も若年であり、学業の継続や不安定就業といった母親と同様の社会的背景を持っていることから、母親を十分にサポートする状況にないことも考えられます。

さらに、若年出産は家庭的背景、状況よりDV(ドメスティックバイオレンス)の誘因、乳幼児虐待のリスク要因となる(貞永, 2006)とされています。DVに関しては、妊産婦は一般女性と比較して受けている率は1/3と低いですが、10代の妊産婦に限定すると一般女性と比較して高く、夫が避妊に協力しない、胎児に関心を示さないなど、若年夫婦の親となることへの精神面の準備

不足が推測されています(中澤, 2008)。若年母親は妊娠を機に婚姻することが多いため、父親となるための準備期間が短いことが影響していると考えられます。また、経済的脆弱性と10代妊産婦におけるDV被害との関連性(中澤, 2008)も指摘されています。DVと若年妊娠の関連については、若年妊娠する女性のパートナーが男性役割を重視する家庭もしくは職場環境にあったり、葛藤のある家族もしくは児童養護施設で育ったり、経済的に困難を抱えていたりなど、若年での出産が原因ではなく、若年母親のパートナーの社会的背景に交絡因子があると考えられます。これらの要因が、若年母親をよりリスクを抱える対象ととらえることにつながっています。

また若年母親は、実の母親との関係が強い傾向が見られます。母親と毎日話している妻は、年齢が24歳以下で最も多くなっています(国立社会保障・人口問題研究所, 2008)。森田(2008)は、自分の母親との関わりが若年母親の出産と子育てに大きな影響を与えるゆえに、父親が夫としての役割を果たすことができないことを指摘しています。女性同士のつながりの深さが、育児において父親を蚊帳の外に置いてしまう可能性もあります。

若年母親の夫は、出産までの準備期間の短さや経済的不安定により、父親役割が果たしにくく、さらに若年母親自身の母親の影響が大きいことが、家族における問題に何らかの影響を及ぼしていると考えられます。

父親の収入が不安定であることにも起因してか、父母または義父母と同居している若年母親は他の世代と比較して多いです。

拡大家族の占める割合は賀数ら(2009)の調査で一般母親は8%ですが、若年母親では33%、平尾ら(2005)の調査では一般母親は7.2%、若年母親は22.2%であったと報告されています。また24歳以下の妻は、父母との同居率は高くないですが、夫父母との同居率が20代後半、30代前半の母親と比較して高いです(国立社会保障・人口問題研究所, 2008)。このため、若年母親においても夫父母と同居している率が高いと推察されます。こうした若年出産家族を含む拡大家族にも問題が指摘されています。賀数ら(2009)は、家庭でのしつけの方針に、他の人(母親以外の家族)と食い違いがあり、一貫性のない養育行動が推測されると指摘しています。さらに、貧困層にある黒人系アメリカ人若年母親家庭において、10代でも年少の母親にとって自分の母親との同居は有益であるが、年長の母親達にとってはあまり有益ではない(Chase-Lansdale, 1994)という報告もあります。日本では、こうした年齢間差については明らかになっていません。祖父母や兄弟と同居することにより、育児のサポートが受けられたり、収入面が安定するというメリットはありますが、家族構成員が増えればそれぞれの生活リズムも異なるでしょうし、父母と祖父母間でしつけに対する考え方の違いも生じてくるでしょう。同居した場合、母親は家族間の葛藤を抱えながら育児を行わざるを得ない状況にあります。

## ★構築される若年母親問題へのバイアス

アメリカやイギリスにおいて、若年母親のリスクが過大評価されているという指摘

があることは前回お示ししました。Coleman(1999/2003)は10代の親問題に関する大多数の研究は10代が親になることについて「欠陥モデル(defective model)」と呼ばれる考えを支持するといっています。日本においても、若年出産の「欠陥」を強調する研究はこれまで多くありました。

医学系領域では、10代での妊娠の多くは「望まない妊娠」と解釈され、10代で出産することのリスクを主に取り上げ、そうした10代の妊娠をいかにサポートするかといった展開で論じられています。リウ真田(1998)も「日本における10代、思春期妊娠に関する文献は、ほとんど若年妊娠の抱える問題に集中している」「(10代母親は)現実には、扱いづらい存在として放任されている」と述べており、医療従事者側からも、10代で出産した母親は受け入れ難い存在となっているということがわかります。

また、片桐(2001)は、若年母親について「どこに相談すれば良いのか、その辺りのことが少しもわかっていない、そういう症例が多い」「適当な相談相手が得られない場合が多く、本人とその親は、妊娠に関して、学校の先生に相談することはまれである」と述べつつも、「中学生の分娩は、分娩後の復学のことも考えて、できることならば秘密保持のために入院・分娩は、なるべく遠隔地の、小規模の産婦人科施設で行うように配慮することが望ましい。また、秘密保持のために、妊娠中に本籍・現住所ともに移動してしまい、新住所に出生届を提出、別の学校に転校・復学させることも検討して欲しい」など、誰に相談したらよいのかも分からない妊娠した中学生を、今まで関わってきた親や教師や友人から遠ざけ、出

産後に未知の人々との関係を作らせようとするなど、無謀とも思えるような提案をしています。また、「若年妊娠は、『人工妊娠中絶を行えば、それで終わり。それで解決』という問題ではない。しかし、産婦人科初診の時期が遅すぎて、人工妊娠中絶が可能な時期を逸してしまい、『希望しなくても分娩』という、お気の毒な、悲劇の症例が今日でも少なくなっていない。希望しない若年分娩、それをなくすることが当面の課題である」と、若年出産は「悲劇の症例」と決めつけ、かつ、妊娠しても人工妊娠中絶を行えばよいとし、出産を希望する10代女性への配慮はうかがえません。

合阪(2002)は、若年妊娠について「分娩時も周りの言うことを聞かず、狂乱分娩となる可能性もあり注意が必要である」「アメリカなど諸外国では、経済的な理由により分娩直後に退院(もしくは病院脱走)することがあり、社会問題化している。このようなケースでは、育児拒否、児童虐待、再妊娠、性病の感染など、その患者の一生に関わる重大な問題を発生するリスク要因となりうるので注意しなければならない」と、リスクの強調と「狂乱」「脱走」という言葉を用いることで、10代での出産の特殊性をさらに印象付けています。さらに、赤枝(2003)は、若年女性にとって、妊娠、そして出産は堂々と怠けていられる逃げ場であるとし、「不健全ながら出産を希望した中高生の妊娠については、将来幼児虐待や育児放棄といった不幸な事態を予防するために、プレネイタルビジットの精神を活用し、安心出産、安心育児のためのケアに努めなければならない」としています。若年母親に対しては、親としての責任・自覚の欠如、



自己同一性の未確立などの人間的未熟(前川, 2001)も指摘されており、若年出産は児童虐待のハイリスクであり養育支援が必要なケース(厚生労働省, 虐待死亡事例の分析),(佐藤, 2005)とされています。

しかし、児童虐待死亡事例のうち、母親が10代で出産した子どもは7.9%(児童虐待等要保護児童の検証に関する専門委員会, 2010)であり、20代、30代で出産した母親が多くを占めています<sup>6)</sup>。専門委員会報告書(第6次報告)では、「20歳未満での妊娠である若年妊娠については、望まない妊娠や計画外の妊娠、養育能力の低さ、経済的問題、学業の中断による社会からの孤立等の問題が指摘されており、虐待の予防の観点からも、例えば、学校教育における性教育などの充実や妊娠判明時に妊婦が相談しやすい体制の整備などの積極的な支援が求められる」と結論付けています。この内容からも、若年母親の出産後の社会的リスクのみが可視化され、出産に至るまでの母親の社会的背景には関心が払われていないことがわかります。さらに、若年妊娠に対しては「性教育の充実や妊娠判明時に妊婦が相談しやすい体制の整備」として、出産を「予防」する取り組みの強化に向かっており、養育能力の不足や経済的問題、学業の中断など多くの社会的リスクを認識しているにもかかわらず、これらのリスクに対する支援は検討されず、「産んでしまった」母親の支援は棚上げされている状況にあります。このことから、日本においても、医療従事者や若年母親に関わる人々が必要以上に若年母親の「欠陥」を指摘し、妊娠の予防に向けた取り組みが進められていることがわかります。若年母親を「問題」とみなすこ

とが、若年母親への偏見を生み、育児をより困難にしているのではないのでしょうか。

こうした論調は2000年代前半に多発していますが、若年層の人工妊娠中絶実施率の増加に呼応したものと考えられます。近年では若年母親が「意図せずとも原家族の力動を変え、子育てを通して親との出会い直し・家族の再構築をもたらす」(伊藤, 2009)といった、若年出産が家族にもたらす肯定的な影響も報告されています。さらに、医療従事者側の視点も多様化し、「頭ごなしに若年者の妊娠、出産、育児を否定するのではなく、共感、尊重する姿勢をもって対応することが必要である」(村越, 2011)といった、若年母親に肯定的な見方を示す論調もみられるようになりました。

Breheeny(2010)は、若年母親は公衆衛生の文脈では「疾病(disease)」としてとらえられているとし、行動や発達の基準を乱す個人に、より一層適応されていること、そしてこうした文脈を用いることは、貧弱な社会状況を人々の行動の結果であると理解し、貧困と不利が健康に悪影響を及ぼしていることを考慮していないと述べています。若年出産を「疾病」とみなし、出産前の社会的背景を不可視化し、出産後の社会的な不利を個人に帰すのではなく、若年母親のライフスタイルを尊重し、出産後に教育や就労訓練を受けられるように、貧弱な社会資源を整備していくことこそが必要ではないかと思います。

### ★日本の若年出産層の特徴

若年母親は、家族に支援され表面化し難い経済的問題、出産に伴う学業の中断、夫との関係構築の困難さ、祖父母との同居に

伴う困難、「若年母親」として問題視される等、多くの問題を抱えています。これらは、個別のリスクカテゴリーではなく、相互に影響を与えあい、結果的に若年母親を社会的に不利な状況に導いていると言えます。

若年母親は、出産に至るまでの社会的背景には注視されることなく、児童虐待など育児において何らかの困難が生じた場合にリスク要因として可視化されていました。こうしたリスクを「予防」するために、「望まない妊娠」対策が行われており、出産した若年母親に対する支援は家族に回収されています。このため、より実態が把握しにくい現状にあります。

アメリカやイギリスでは若年妊娠を予防する政策と、若年母親を支援する政策といった両義的な政策が同一の機関において行われています。日本では、「望まない妊娠」対策による若年妊娠を予防する政策のみ実施されており、出産した若年母親に対する支援は乏しい状況です。こうした背景に、ジェンダーの問題があると考えます。

若年妊娠による人工妊娠中絶実施率は60.4%(2010年)であり、アメリカが15～44歳で23.8%、イギリスの48%と比較して高く、若年妊娠の帰結を人工妊娠中絶とする者が他国と比較して多いです。日本において人工妊娠中絶が合法化されたのは1949年と、アメリカ、イギリスと比較して極めて早く、政府は人口政策の主たる手段に中絶を採用した(田間, 2006)とされています。また女性が自分の意思で避妊を実行できるピルの認可は1999年と極めて遅れています。このように、日本では女性が性を自己決定できる環境が整い難く、若年母親に対

するスティグマがあることが、支援の乏しさにつながっていると考えられます。

さらに、根強い年齢による出産規範の存在や「望まない妊娠」を「10代の妊娠」と理解する「子ども／大人」パラダイムの固執(斎藤, 2007)も若年母親支援が乏しい理由として挙げられます。子どもとみなされる10代で出産することは(身体的に問題はないが)社会的問題を多く抱えるとみなされています。

若年母親の支援をすることは、若年母親を推奨することにつながります。「望まない妊娠」すなわち「10代の妊娠」を減少させるという政治的含意があるために、若年出産は表立って支援する対象には成り得ません。日本では宗教教義上、人工妊娠中絶をすることができない女性も少ないために、若年妊娠した女性は、人工妊娠中絶へと無意識のうちに方向づけられています。アメリカ、イギリスで行われていた生に対する政治的介入が、日本においても行われていると言えます。このように、生は常に政治的介入を受けており、「問題」とされる若年妊娠をし、「予防」の取り組みが行われているにもかかわらず出産した若年母親に対しては、「社会的リスク」(経済的な不安定、配偶関係の不安定、家族と疎遠、母親としての未熟性等)が指摘され(定月, 2009)、リスク管理あるいは指導(佐藤, 2005)が行われています。しかし、若年母親本人は、そうした「リスク」をリスクとしてとらえているのでしょうか。また「リスク」があるといわれている中で、若年母親が出産を選択する背景、及び若年母親を取り巻く社会的背景には、どのようなものがあつたのでしょうか。

今回は、若年母親の生態を明らかにするために、若年母親に対するインタビュー調査の内容から、出産に至るまでの経過と周囲の関わりについて明らかにし、その内容から、若年母親の社会的特徴について考察したいと思います。

### おわりに

若年母親は、経済的問題、学業の中断、

家族の問題、そして若年で子どもを持つことによるスティグマの付与等、多くの課題を持っていました。しかし日本では、「望まない妊娠」とみなされ「予防」に向けた対策のみが行われており、出産した若年母親への支援は乏しい状況にあります。次回からは、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親の家族と社会的特徴について明らかにしたいと思います。

### 注

- 1) 80～90年代に10代で出産した母親の低出生体重児率の高さが報告されたことがあるが、現在は改善されており他の世代と同様である。
- 2) 10代で出産した母親の子どもの医学的リスクが少ない理由については、日本の医療体制が整備されていることや、10代で出産した母親の母数が少ないために、詳細な調査が行われていないことも理由にあると考える。
- 3) 大学経営・政策研究センター、高校生の進路追跡調査第1次報告書によれば、両親の年収が400万円以下の子どもの大学進学率は31.4%であるが、両親の年収が1000万を超える子どもは62.4%と大きく開きがあった。
- 4) 沖縄県では、若年母親の未婚率は46%(2002年、県調査)であり、地域差も大きい。
- 5) この差異について日本弁護士連合会(1997)は、男女の年齢差を設けた根底には、男性は仕事、女性は家庭という役割分担思想があることを指摘している。
- 6) 専門委員会報告書(第6次報告)では、10代で出産した子どもが7.9%であることに對し、「平成19年の人口動態統計によれば、母の年齢別出生割合は「15歳未満」が0.0%、「15～19歳」で1.4%、「20～24歳」で11.6%であることから、心中以外の事例では、年齢の低い実母は、一般同世代人口に対する(子ども虐待死亡事例の)割合が大きいといえる」としている。しかし、年齢別出生割合は第2子以降を出産した母親も合わせて算出されるため、「虐待死亡事例の母親の年齢」と「母の年齢別出生割合」を単純に比較することはできない。

### 【引用文献】

- 阿部彩, 2008, 子どもの貧困ー日本の不公平を考える, 岩波新書.
- 安達久美子, 2006, 統計からみた10代の女性の出産, 思春期学, 24(2), pp407-414.
- 合阪幸三, 2002, 若年者の妊娠に多い不利な合併症, 周産期医学, 32(2), pp201-203.

- 赤枝恒夫, 2003, 思春期の子どもたちを守りたいー夜の六本木で無料カウンセリングに取り組むー, 助産雑誌, 57(3), pp236-241.
- Breheny M., Stephens C., 2010, Youth or disadvantage? The construction of teenage mothers in medical journals, *Culture, Health & Sexuality*, 12(3), pp307-322.
- Chase-Lansdale, 1994, Young African-American multigenerational families in poverty: Quality of mothering or groundmothering, *child development*, 65, pp373-393.
- Coleman, J., Hendry L., *The Nature of adolescence* (3rd edition), 1999, Routledge, (= 2003, 白井利明他訳, 青年期の本質, ミネルヴァ書房)
- 伊藤悠子, 2009, 10代の出産と子育て・子育てー貧困からのダメージを乗り越える力, 子どもの貧困白書編集委員会編, 子どもの貧困白書, Chapter4, テーマで考える子どもの貧困, 性・10代の出産, 08, pp247-249, 明石書店.
- 賀数いずみ, 前田和子, 上田礼子, 安田由美, 仲宗根美佐子, 2009, 沖縄県離島における若年母親の養育行動ー一般母親との比較ー, 沖縄県立看護大学紀要, 10, pp15-23.
- 平尾恭子, 上野昌江, 2005, 10代で出産した母親の母親行動とソーシャルサポートとの関連, 小児保健研究, 64(3), pp417-424.
- 平塚眞樹, 2011, 「一人ひとりを包摂する社会」特命チームヒアリング資料, 教育上の不利な立場(educational disadvantage)と社会的排除  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/housetusyakai/dai5/hiratsuka1.pdf> (最終閲覧日 2012/03/23)
- 加藤曜子, 2006, 10代の親の支援ー虐待ハイリスク予防の視点からー, 母性衛生, 46(4), pp484-486.
- 片桐清一, 2001, 若年妊娠の社会的背景とその支援, 周産期医学, 31(6), pp745-748.
- 北村邦夫, 1995, 十代の望まない妊娠防止対策に関する研究 1. 世界各国の十代妊娠、中絶、流産、避妊等に関する現状調査, pp148-159, 2. 日本十代女性の性、妊娠、避妊、出産に関する現状調査, 平成7年度厚生省心身障害研究 望まない妊娠の防止等に関する研究報告書, pp160-179.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2008, 2008年社会保障・人口問題基本調査, 第4回全国家庭動向調査 結果の概要, [http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ4/NSFJ4\\_gaiyo.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ4/NSFJ4_gaiyo.pdf)
- 厚生労働省, 2010, 平成22年度「出生に関する統計」の概況, 人口動態統計特殊報告, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syussyo06/index.html> (最終閲覧日 2012/03/29)
- 厚生労働省 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会, 2010, 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第6次報告)  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv37/dl/6-11.pdf> (最終閲覧日 2012/03/23)
- 久保武士, 2000, 若年女性に対する周産期母子保健指導, 周産期医学, 30(2), pp159-161.

- 窪田康平, 2011, 母親の若年出産が子どもの修学に与える影響—出産年齢が本当に問題なのか, 大阪大学社会経済研究所 Discussion paper, No811.
- 前川喜平, 2001, 養育機能不全(親準備性の不足)と子育て支援, 周産期医学, 31(6), pp817-825.
- 耳塚寛明, 2003, 誰がフリーターになるのか, 世界, 710, pp107-112.
- 宮本みち子, 2004, 社会的排除と若年無業—イギリス・スウェーデンの対応, 日本労働研究雑誌, pp17-26.
- 森田明美, 2004, 10代で出産した母親達の子育て～実態調査から学ぶこと～, 月刊福祉, 4, pp42-45.
- 森田明美, 2008, 若年出産・子育ての現状と福祉的支援の課題, 思春期学, 26(1), pp134-139.
- 望月善子, 2005, 10代妊娠の現状と問題点, 産婦人科治療, 91(5), pp496-501.
- 村越友紀, 望月善子, 渡辺博, 稲葉憲之, 2011, 10代出産女性の現状と課題—10代出産女性のアンケート調査からの検討, 独協医科大学紀要, 38, pp87-94.
- 内閣府, 2011, 若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)報告書(資料版)<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/shiryo.html>, (最終閲覧日 2012/03/29)
- 中澤直子, 2008, 10代の妊産婦とドメスティック・バイオレンス, こころの科学, 141, pp75-82.
- リウ真田知子, 1998, 若年出産者への保健指導, ペリネイタルケア 新春増刊, pp197-208.
- 貞永明美, 2006, 大分県の現状と取り組み, 産婦人科の世界, 58(1), pp13-25.
- 定月みゆき, 2009, 若年妊娠・出産・育児への対応, 母子保健情報, pp53-58.
- 坂本和靖, 2007, 親の行動・家庭環境がその後の子どもの成長に与える影響, IPSS Discussion Paper Series, 国立社会保障, 人口問題研究所, 2007-J01, pp1-40.
- 斉藤益子他, 2000, 高校生の性行動の実態と校長の意識—都内公立高校の調査から—, 思春期学, 18(3), pp257-263.
- 斎藤真緒, 2007, セクシュアルヘルスプロモーションの射程—新しいアジェンダとしての若者のセクシャルヘルスを中心に, 立命館人間科学研究, 14, pp167-181.
- 佐藤郁夫, 2005, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究, 厚生労働科学研究研究費補助金子ども家庭総合研究事業, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究 平成16年度総合研究報告書, pp1-14.
- 染谷泰代, 2004, 若年出産と学業継続, 教育福祉研究, 10(1), pp91-100.
- 田間泰子, 2006, 近代家族とボディ・ポリティクス, 世界思想社.
- 上野昌之, 2007, 通信制高校の託児室と学習権の保障—全通研加盟校へのアンケート調査を中心に, 埼玉学園大学紀要, 7, pp193-204.

山中冴子, 2007, 埼玉県における若年妊娠者への支援, 埼玉大学総合研究機構研究成果研究  
プロジェクト報告書, 5, pp343-344.

## 10代の母という生き方④

大川 聡子

### ★まえがき

前回の連載では国内の文献検討を通して、若年母親には、経済的問題、学業の中断、家族の問題、そして若年で子どもを持つことによるスティグマの付与等、多くの課題があることをお示ししました。しかし現状において、若年母親に対しては「予防」に向けた対策のみが行われており、出産した母親への支援は乏しい状況にあります。そこで今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析したいと思います。

### ★研究背景

10代で妊娠した女性のうち、約6割と半数以上が人工妊娠中絶を選択し、出産を選択するのは約4割です（マガジン11号）。出産した母親に対しては様々な問題が指摘されており、若年で妊娠した多くの女性は中絶を選択しています。こうした中、若年母親はどのように出産を決意したのでしょうか。さらに、これまでの若年母親の研究の多くは、出産したことによる社会的問題を主眼としています。このため、出産前の社会的特徴についての調査はなされていません。今回は、若年母親に対するインタビューを基に、若年母親が主体的に出産を選択していく過程と周囲の関わりについて明らかにし、その内容から、若年母親の社会的特徴に

ついて考察します。

### ★対象者の概要とインタビュー方法

研究対象は、既婚・未婚を問わず10代で出産して子どもが乳幼児である方としました。対象者は筆者の友人からの紹介や、インターネット上での協力依頼、また2市町村に協力依頼を行ないました。

面接が可能であった方10名に対して、半構成的面接を行いました。母親の年齢は14歳から22歳であり、平均は19.3歳でした。出産時の年齢は13歳から20歳であり、平均は17.3歳でした。また、夫の現在の年齢は17歳から32歳であり、平均は22.8歳でした。なお今回、Lさんが出産時に誕生日を過ぎ20歳になっていましたが、妊娠時は10代であり、10代で出産した母親と共通の要素が見られ、実質的な影響はないと考えデータに含めました。

内容は家族構成、学生時代の思い出、夫と交際したきっかけ、避妊の有無、出産を決意した過程、出産時の状況、母親になって変化したこと、周囲の関わり、育児の不安、社会サービスについて等です。面接することができなかった方2名については、Eメールにてデータを収集しました。データについては、対象者のホームページに書かれていた内容についても、本人から同意を得られたため、データとして用いました。また2市町村の対象者においては、担当職員から受けた申し送りについてもデータに

含めています。

面接は 200\*年 5 月から 9 月にかけて行いました。インタビューに応じた 12 名のうち、夫が同席されたのは 2 名、夫の母親が同席された方、本人の妹が同席された方がそれぞれ 1 名ずつでした。また、紹介者が同席された方が 4 名、市職員が同席された方が 1 名でした。全ての対象者について録音の可否を尋ねましたが、お 1 人は録音を拒否されたため、インタビュー中に記録した文章を基にインタビュー記録を作成しています。

同席者が多かった理由として、1 つ目はケースを紹介した紹介者に会いたいという母親側からの希望があり、紹介者と共にインタビューを行った事、2 つ目に市職員が同席した母親については、職員の同席を前提として母親を紹介していただいた事があります。3 つ目に、夫や夫の母親など家族が同席したケースについては、面接当日夫や夫の母親も面接体制を整えており、席を外していただくことで、インタビューに答えていただくための信頼関係が築けなくなることを危惧し、面接にそのまま同席していただきました。母親の一人は「(筆者が)どのような人か分からなかったので、旦那についてきてもらった」と語っています。こうした同席者が多いことは、同席者の意向に左右され本人の率直な思いが引き出せないことも考えられ、インタビューの方法論としては正確なものではないでしょう。しかし、同席者との相互作用により、若年母親の生育歴や家族関係などを詳細に話していただくことが可能となったことも事実です。

面接所要時間は一人あたり 40 分から 151

分でした。面接場所は対象者の母校の保健室や対象者の自宅の近所の喫茶店、対象者の自宅等です。

分析方法は質的記述的研究とし、インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリ別に類型化しました。

対象者については、対象者の出産年齢順に事例 1 から A、その後 B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L とし、C のみ夫の母が同席したため、C の夫の母を CM としました。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリの整合性については、第 3 者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、加筆修正をしています。

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しています。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮しました。

## ★インタビュー結果

分析した結果、1.若年母親の出産前の社会的特徴、2.生きづらさの自覚、3.行き渡らない支援、4.母親になるための努力、の 4 つのカテゴリが導き出されました。抽出された内容をカテゴリ別に記します。以下、サブカテゴリを【 】、コードを《 》または〈 〉で示します。



## 1. 若年母親の出産前の社会的特徴

### (1) 【出生から妊娠までの経過】

#### ① 《妊娠前の社会的特徴》

〈家族との葛藤と思慕〉

若年母親の中には、両親の離婚あるいは別居に伴い施設で育った人や、里親の元で育った人もいました。家族のしつけが厳しかったり、母親から暴力的なしつけ、虐待を受けてきた人もいます。その一方で、良好な関係を築いていた家族も複数あります。

Fさんは、小学校3年生で両親が離婚しました。とても辛い経験をしたために、嫌だったと言うことしか覚えていないと言います。その後児童養護施設から児童自立支援施設に入所したため、父親と同居していた期間はとても短いものでした。このため、父親とは親子という雰囲気ではなく、今でも敬語を使って話す間柄だそうです。離別期間が長かったために、実の父親にも娘として甘えることが出来ないといった、複雑な思いがうかがえました。

Fさん お父さんね、Fとお父さんね、F施設入ったりとか、関係微妙じゃなか。それでお父さん女の人つくってるじゃなか。じゃけ、お互いそういう、親子っていう雰囲気じゃなくてね、お互い遠慮感がすごいいあるけんね。お父さん、F意識しとるけんね、あんまりしゃべらん。Fも敬語でしゃべる。

〈短い修学年数〉

対象者の学歴は中学在学中、中学卒業、高校中退、高校卒業、小学校・中学校から施設入所など様々でした。今回の調査対象者に、大学に入学された方はいませんでした。

彼女達の学生時代の過ごし方も様々です。楽しかった思い出を語る人が多かったのですが、小学生時代にいじめにあっていたり、小・中学校で家庭内の問題や暴走行為などで施設に入所していた人もいました。

Dさんは中学校に通ったのは1年だけで、その後は鑑別所、矯正施設、少年院を転々としています。こうした経験を「自分にはいい経験やった」ととらえています。

Dさん まあ、世間からしたら恥ずかしいけど、全然自分にはいい経験やから言うけど、中学校は1年生まで入ったけど、中学校1年生までなんです、行ってんのは。なんでか言うたら、まず1回目、いろいろ悪いことして(矯正施設から)鑑別所入ってたんですよ。

筆者 その時の悪いことってどういう？

Dさん 暴走とかじゃない？

〈進路に向き合えない家族〉

インタビューした母親の中には、高校を退学している人が複数いました。高校退学の理由にあたっては、専門的な勉強をしたかったのに、親に言われるまま普通科に進学した等、自分の希望する進路を選択できなかったことが原因で中退に至る人が目立ちました。そこから、家族間の葛藤も読みとれます。

筆者 高校の時、辞めるにしろ何にしろお母さんにけっこう言われたりとか

Jさん 言われた。辞めるな辞めるなって言われた。もともと専門学校行きたかったから一、それで、反対されて無理やり入ったって感じだから、余計にとくに辞めたいって。

Eさんは、中学生の時から休みがちであり、高校進学にも関心が持てなかったと言います。しかし、親が家業で忙しく相談できず、何となく「周りに流されて」高校に進学したそうです。高校に入学はしたものの、校則違反により高校1年の1学期に退学することになります。Eさんは、(中)学校に行かなかったことを「できちゃった結婚の代表的なパターン」とであると認識していました。

Eさん できちゃった結婚の一番代表的なパターンやと思うんですけど、学校には行っていない。中学校はろくに、3年生くらいから全然行っていない。で、高校一応入ったけど、その入ったのもね、みんなが高校入るって言うと思ったのに、うちは別に入りたいとも入りたくないとも分からなかったのに、親に相談した時も、親が、ちょっと引っ越しして、店経営でしたんですよ。それでちょっと忙しかった時期やから、受験のことで相談っていうのが一切できへんくて。自分がどうしたいのかも分からんまんま、周りに流されて一人だけ就職するとかがイヤやからっていうので、高校決めたみたいな感じやった。まあ案の定、辞めて、退学で。はは(笑)。

#### 〈不安定な就労〉

若年母親は学校卒業もしくは中退後、勤務経験のある人が多いです。その職種は飲食業、衣料品店員、コンビニエンスストア店員、パチンコ店員、子ども服販売員、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、派遣社員、自宅での内職等です。出産後に全員が退職されています。

Dさんは、妊娠中に色々な内職をしてい

ましたが、内職で収入を得るのは困難だったと言います。現在は乳児の子どもに細かい道具が散らかされることを恐れ、内職をすることもできません。

筆者 内職とかって、お金になりますかね？

Dさん 全然。もう、ほとんどただ働き状態。3000個くらいやっても、5000円いかないね。1円10銭とかそんなかな。

### ②《若年母親が語る夫の社会的特徴》

〈母子を養うことができる夫〉

若年母親の夫は、母親と出会った時には中学や高校を卒業し、働いていた人が多いです。職種は内装業、左官業、とび職、建設業、公設市場勤務、パチンコ店店員、荷物運搬業、家業手伝い、アルバイトなどでした。

〈身近な場やツールでの出会い〉

夫と知り合った場合は、中学、高校、妹や弟の紹介、職場・バイト先等でした。また、共通の場はなくとも、道で声をかけられたり、出会いを目的としたインターネットサイト等を通じて知り合っている人もいました。交際から入籍までの期間は1年未満の人が多いです。

### ③《妊娠した理由》

〈結婚するための妊娠〉

交際が進む過程でお互いに結婚したいと思っても、若過ぎる等の理由で親に反対されると感じ、親を説得するため、自立するために計画的に妊娠した人もいました。彼女達は、結婚願望がとても強かったと言い

ます。

Hさんは当時「何もすることがなかった」ので早く結婚しようと思い、避妊せず妊娠を希望したと答えています。

Hさん（子ども）できてみたかった。早く結婚して、私は早く結婚したかったし。

Kさん できたらこっちのもんや一、言うてたもんな。

Hさん 別に何もすることなかったし、結婚しよ一思って。

Dさんは、排卵検査薬を購入し排卵日に合わせて性行為をし、計画的に妊娠していました。Dさんは小学校の時から「お嫁さんになりたい」と言い、周囲の人々や親に結婚を伝えても、「もう結婚したん？」という反応ではなく、「夢がかなって良かったね」と言われるそうです。

筆者 もう、じゃあ、妊娠されたって分かった時は、やった！って感じ？

Dさん うん。計画通り！

筆者 検査薬とか買ったりして？

Dさん うん。やったかな。検査薬とあと、排卵日の検査できるやつ。排卵を狙ったから。一発でできた。

〈子どもが欲しかった〉

Bさんは妊娠時、中学を卒業しラーメン店でアルバイトをしていましたが、3～4ヵ月で退職して、その後は家にいる毎日でした。夫は旧知の知り合いで、家族と別離し一人暮らしをしていました。Bさん夫婦は、結婚する前から子どもが欲しいと考え、あえて避妊せず子どもを「作った」と答えて

います。

Bさん おろすって言うのは絶対したくなかったんで。2人が欲しいから作ったから、責任もって育てようっていうことで。

〈友人の影響〉

Lさんの周りには子どもを持つ同年代の友達が多かったため、Lさんは妊娠前から子どもが欲しかったと言います。妊娠して出産を決意する際も、その友人達が出産への決意に大きな影響を及ぼしていました。出産後も同じ年の子どもを持つ友人がたくさんおり、一緒に遊ぶこともあるそうです。

Lさん 周りが産んではったから、友達が。友達の子どもとか見ててもすごいかわい  
いし、うわ、子ども欲しいな一っ。でもすごい大変やで一っ言われたけど、大変なん承知で。うん。産もうかなって。周りの影響もあるかもしれん。(略)周りがそういう環境やったし、たぶん周りが子ども産んでへんかって、私一人が妊娠してて子ども産むか産まへんかってなったら、まあちょっと迷うかもしれへんけど、産んでると思うけど、やっぱり周りの影響も大きかった。すごい。

〈避妊をしなかった〉

若年母親は、計画的に妊娠を考えていた人以外、ほとんどの人が避妊していませんでした。避妊していたとしても膣外射精など避妊効果が不確実なものであり、さらにその効果を過剰に期待する傾向が見られました。避妊をしなかった理由については、

「なにも考えてなかった」、「大丈夫だと思っていた」、「妊娠してもいいと思っていた」と語っています。母親たちは学校で性教育を学んではいましたが、実際の間では生かされなかったようです。

K さん 避妊は、めんどくさくてしてなかった。

H さん 私らの周り、してる人いんの？

このように K さんは、「めんどくさくて」避妊をしていなかったと言い、H さんも、自分の周りで避妊している人など誰もいなかったのかのように認識していました。

#### ④《出産への決意》

〈困難は承知で子どもを産みたい〉

妊娠した時は嬉しいと思う反面、戸惑いを感じた人もいました。しかし、戸惑いを感じても、妊娠したら「産むもの」だと考え、中絶することに抵抗を感じています。また中絶することへの恐怖感もあり、出産を選択しています。

筆者 妊娠したって分かった時は、産もうと思いました？

F さん うん。若かったけか知らんけど、おろすってことは考えれんくて、もう、もし困っても、何しても、赤ちゃんおろしたらいいけん。なんか、産むもんじゃないですか、おろすって簡単なもんじゃないですよ、どんだけ大変かわからんけど、とにかく産まんじゃあ、って思っ

また、妊娠した時期にちょうど進路の選択を迫られた時期にあり、周囲が進路や就

職を考えるのと同様、出産して母親になるという選択をした人もいました。

〈中絶は二度としたくない〉

K さん、J さんは 1 度中絶経験があり、あのような経験は 2 度としたくない、と出産を強く望んでいました。K さんは、高校在学中に当時交際していた恋人との間にできた児を妊娠 5 ヶ月で中絶しています。K さん自身は出産を希望していたのですが、恋人や母親に反対され、中絶せざるを得ませんでした。その時の様子を「産むより痛かった」と語っています。

K さん おろした赤ちゃん、ほんま見たらあかんやって、おろしたら、お母さんは。でも見してもらって、見るともつとなんかすごい、なんかもう、だって、人間の形になってるし、もう大っきいし。だからその結婚した時に、おろそうかな一って思ったけど、またあんななるのもイヤやしな一と思って。すっごい痛かったんです。おろす時、なんか知らんけど、産むより痛かった。

〈高卒後の進路としての母親〉

G さんは、高校 3 年生の 10 月頃に妊娠が判明し、進路を決めるのが「面倒」になり、子どもを産もうと決意し、出産しています。出産前はアパレル関係のプレスや管理部門への就職を希望していたそうです。

G さん とりあえず、もうおろすのが嫌やって、怖そう。でなんか、高 3 やって、10 月か 11 月にその妊娠してるのが分かって、進路とかのこと決めなあかんかった時で、なんかもうめんどくさくなって、じゃあ子ども産も

うかなくなって、私は産もうと思った。

## (2)【妊娠から出産までの経過】

### ①《出産を容認する周囲の人々》

〈父親になることを決意する夫〉

母親が出産することをすぐに決意していたのに対し、計画出産を考えていた人以外は、夫の反応は様々でした。妊娠を喜び、すぐに出産の準備を整えた夫もいれば、「嬉しそうじゃなかった」など戸惑いを感じる夫、また(妻には)無理だと中絶を勧めたり、中絶可能な日の直前まで悩んだ夫もいます。しかし最終的には全員が妻の希望に応え、妊娠を継続し父親になることを決意しています。一度は中絶を考えた夫も、本人や妻や子どもの将来を考え熟慮した結果、妊娠の継続を選択しています。

Eさん 段々段々病院代とか、出産費用どうしようとか言う話になってきたら、もう現実が見えてきて、初めダンナさんおろそうって。5ヵ月でおろせって言われた。もうほんまに、自信がないからって(略)。じゃあもうおろすわ一って、病院も決めて明日が手術ってなった時に、なんか、目先のことばっか考えて、自分が遊ばれへんっていうのばっか考えて、(夫は)おろせって言ったけど、ほんまにおろしていいんかなって思って。手術の当日にいきなりやっぱなしって。やっぱ産んでくれて。

また、夫自身の育ってきた環境が複雑であったことから、子どもに父親としてどう関わって良いかわからず、親になることに不安を持った夫もありました。

〈出産を後押しする家族〉

妊娠を知った家族の反応は様々ですが、妊娠前に結婚していた人以外は、すぐに出産を認めた家族は少ないです。しかし、家族の中でも出産を賛成してくれた人がいて、その人が他の家族を説得したりなど、家族の中で本人の決意を支えてくれた人がいることが多いです。妻方の父親は断固出産に反対していたり、また出産に賛成し反対する母親を逆に説得したり、全く意見を言わなかったりなど、対応には個別性が高くみられます。

妻方の母親は、妊娠に驚き中絶を勧めたり、暗に中絶をほのめかすような示唆をしたり、母親として出産の厳しさを教えたり、これからどうしたいのか前向きに話を進めるなどの対応をしていました。しかし、出産することを決めてから、積極的に本人をサポートしているのは妻方の母親であることが多いです。

夫方の両親は、出産に反対しないことが多いです。妻方の両親に出産するよう説得した夫方の母親もいます。Cさんの夫方の母親は、妊娠が分かった時の思いをこう語っています。

CMさん 子ども達は今から楽しまなきゃいけないっていう、親としてのあれはあったけど、親が犠牲になってもいい、育児に協力しようと。そうでなきゃできないでしょ。

夫方の両親の場合、施設で育った、また今回の結婚以前に婚姻歴がある等の理由で親との関係が浅かった人もいます。妊娠時の家族の反応については、個別性が高く見られました。

〈学校側の配慮と支援〉

妊娠時、在学中だった 2 人は教師に妊娠した事を告げ、その後の経過を教師がフォローしています。学校に伝えた人については、始業式で校長から全校生徒に伝えたりなど、妊娠を教員だけでなく学校全体でサポートされていました。一方で一部の教師のみに伝え、学校に内密にしていた人については、体育などの授業も休まず参加していました。

## ②《マイナートラブルの発生》

妊娠中の異常については、貧血があった人が最も多かったです。その他蛋白尿、尿糖などがありました。事情があり実家を離れ夫と 2 人で暮らしていた F さんは、妊娠 9 ヶ月ごろに祖母に妊娠したことを伝えても、喜んでもらえなかったそうです。F さんは、故郷から離れ知り合いもおらず、夫が不在がちなこともあり、自分は一人ぼっちだと感じ、精神的に不安定になった時期もあったと言います。

F さん なんか一番悲しかったって考えたのは、子ども産んだら誰が祝ってくれるんだろうと思って。誰かが、なんか、祝って欲しくて、子ども産まれたのを。でもみんな喜んでないし、F は知り合いおらんし、誰も、親身になって喜んでくれる人おらんあ、って思ったら悲しくなってきたね。旦那も仕事でおらんしなと思って、したら淋しくなってきた。もうどうしよう、ぼーっと、もうなんか、一人ぼっちみたいな感じになってね。

## ③《出産を重大事とは考えない》

出産時の状況では、体重 2500g 以下の低出生体重児が 4 人、正規出生体重児が 7 名、在胎週数が 36 週以前の早期産であった人が 2 人、正規産であった人が 9 人でした。また、産後の子どもの経過としては、低体重であったために保育器に入ったり、心疾患のため出生後すぐ手術した人もいました。出産時に病院に行く際も、一人でタクシーに乗った、自転車で行ったなど、出産という大きな出来事にも、他人の手を借りずに母親一人で対処しようとしています。分娩経過については陣痛が 3~4 日続いた人もいますが、全体的には安産だった人が多いです。

筆者 帝王切開は大変じゃなかったですか？

J さん 全然大変じゃない。ほんとケロっとしてたんだよね。初めだけだよ。終わってすぐ。歩くまでは痛かったんだけど、歩いたらもう何てことない。

また、治療が必要な合併症があっても、経済的理由から薬を買うことができずにいた人もいましたが、周囲の勧めにより薬を買い服薬し、症状を改善させていました。

## (3)【出産後の経過】

### ①《家族の転機》

〈子どもを迎えるための家族の変化〉

出産は、家族や周囲の人々にも影響を与えます。夫については、ギャンブルに行かなくなった、外泊を全くしなくなった、などの変化が挙げられました。要介護認定を受けている祖母と同居している L さんは、

子どもが産まれてから祖母が食欲旺盛になったと言います。

〈入籍できない父と母〉

夫が18歳に満たないために、出産しても入籍できないケースも見られました。夫が17歳の時に出産したCさんは、夫が18歳になった際に入籍すると言います。

〈離婚後の元夫との関係〉

出産後に離婚し、新しい人生を歩んでいる母親もいます。少し距離を置くことで、元夫の付き合い方も変化しているようで、「別れてからのほうが仲がいいかもしれない」という語りもありました。

(次号へ続く)

# 10 代の母という 生き方 ⑤

大川 聡子

## ★まえがき

前号（マガジン 14 号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましては前号をご参照ください。今号では、出産後の母親たちがどのような状況におかれていたかを中心に、若年母親のインタビューを分析していきます。

## 2. 生きづらさの自覚

### (1) 【社会的不利の顕在化】

#### ① 《困難な生活実態》

##### 〈経済的困難〉

出産後、妻は仕事を辞め専業主婦となったため、夫の収入で家計を捻出しています。夫も就労につながる資格を持っていないこともあり、収入は高くはありません。貯金ができないために父親は資格取得ができず、母親は乳幼児を抱えて働くこともできず、貯金ができないという悪循環に陥っています。

B さんの夫は荷物運搬業に従事していますが、自動車運転免許がないために運転手になれず、収入が少ない状況にありました。運転免許を取得することも金銭的に難しく、生後 2 ヶ月の子どもを抱え、B さん自身が働くことも難しい状況にあります。B さんは必要な支援として、金銭的支援と保育サービスを希望していました。



Bさん (必要な支援は)お金の補助ですかね。主人も車の免許もってないんで、だから収入も11万くらいしか。月11万でやりくりしてるんでね。この子産まれたから、余計にちょっとお金かかるし、ちょっとねえ。まあ児童手当入ってくるんでね、5000(円)は入ってくるんですけど、そんなんしとったら、貯金もできないしね、車の免許も取る、取ろうとしても取れないしね、貯めれないんでね。だから、私も働きたいんですけど、この子まだ早いじゃないですか、保育園とか入れるの。だから、ねえ。お金の補助と、あと(子ども)みてくれるっていうのがねえ、あったらちょっと助かるかなあっていう感じですかね。

### 〈住環境の不備〉

経済的な問題から、住居面においても4階に住んでいてエレベーターがなかったり、風呂が屋内にないなど、子育てをしていく上では困難な構造の家に住んでいる人もいました。また子どもができたため、これまでの住居から引っ越しをせざるを得なくなった人もいます。

### 〈選べない仕事〉

夫は、ほとんどが出産後も出産前と同じ仕事をしていました。妻も経済的な理由から仕事をしようとするのですが、乳幼児がいることで、アルバイトさえもままならない状況です。現在仕事をしている人の内訳は、アルコール販売を主とした飲食店の接客業、家業手伝い、保険外交員です。現在は保育所等の空きがないため仕事はできないが、いずれしたいと答えた人も多くいました。

Kさんは、乳幼児を抱える母親は、病気の際の急な欠勤が危惧されるため、アルバイトでも採用されることは少ないと言います。家計に貢献したいと働きたい意欲はあるのに、採用されないことに対して不満を持っていました。

Kさん 子どもがいるおかげでバイトできひんかったりするのが、ムカつく。(子どもが)まだちっさいし、とかいって言うて。断わられるし(略)。バイトもないよなあ。めっちゃ落ちた、面接。

Hさん 私もめっちゃ落ちた。

妊娠する前に持っていたデザイナーや美容師になりたいなどの夢は、今でもなりたいたいと思っている人もいれば、もう無理だろうと考えている人もいました。仕事については生活を支えるためのものと割り切って考えている人が多かったです。

Eさんは、妊娠前に美容室に勤めていて、スタイリストにあこがれていましたが、美容学校を出ていないため難しいと考えていました。子どもが大きくなってからも、自分の興味の近い仕事というよりは、「パチンコ屋」等、Eさん自身が考える、採用される可能性が高

い仕事に就きたいと考えています。

Eさん 美容学っていうか、スタイリストっていうのには(なりたかった)。美容室1回1年間くらい勤めとって、ヘアメイクさんになりたいと。人のお化粧したり、髪の毛やったりするのにはやりたいなっていうのはあった。で、子ども産まれたきり学校も出てないから、今からはちょっと無理かなって思うけど、もし学校出てたら、子ども産んどっても子どもがある程度大きくなったら美容師さんやってたかなあと。

筆者 今後、お仕事されるんだったら美容師さんとか、コーディネート系に近い所に行こうかなと思います？

Eさん うーん。この子が大きくなって仕事するとしても、パチンコ屋とか。

## (1)【若年母親特有の生きづらさ】

### ①《後悔》

#### 〈若者らしい生活ができない〉

若くして結婚したゆえに、もう恋愛できなくなってしまった、と残念に思う声も聞かれました。また、他の友人は親に保護され自由にふるまえる年齢であるのに、自分は家族に縛られ、遊べないことを淋しく思う声もありました。それでも遊びたいという気持ちを抑えて、母親たちは日々育児をしています。

Fさん (F)なんかまだ周りに友達おらんけ、あれだと思わんけど、ちょっとなんかやっぱ自由になりたいなっていうのは。(F)はもうダンナとかおるけど、なんかもっと？家庭じゃなくて外で、遊びたかったなとかって思う。

### ②《子育てへのプレッシャー》

#### 〈子どもとの関わり方がわからない〉

家族から虐待を受けた、または親と十分に関われなかった人は、自分のような思いを子どもにはさせまい、と親とは違った方法で育児を行うよう努力しています。その反面、自分がそのような育児方法で育ち、母親として適切な関わり方が分からないため、自分もいつかそうした思いを子どもにさせるのではないかという危機感も併せ持っていました。

Eさん この子産む時に、正直うちは小さい時にけっこうお母さんに殴られたりとかして育てるから、もしかして自分も殴るんちゃうかなって不安はすごいあったけど、でも、今のところそんなんは、叩いたりとかいっても手とか足とか。もういい加減にしいやって言って、あんまりにも聞かへん時とか、危ないもんさわったりとかした時は叩くけど、それ以外で別に、こんなちっちゃい赤ちゃんに言ったってわからんやろ、みた

いな。

### 〈世代間連鎖からの離脱〉

若年母親達は、母親として子どもに様々な期待をしており、「いい子に育てて欲しい」、「子どもは早く産ませない」と言い、若年出産の世代間連鎖から離脱させたいと考えている母親が多くみられました。

Eさんは、父母が離婚し父方に引き取られました。その後父親が再婚し、継母と父と生活することとなりますが、継母による身体的虐待を受けます。継母により母子手帳や幼少時の写真も捨てられたことから、自分の子どもにはそのような思いをさせたくない、妊娠中の様子をノートに記録し、その時の思いも詳細に記載しています。その記録を、子どもが妊娠した時に見せてあげたいと語っていました。

Eさん (子ども)が子ども妊娠した時、見せてあげようと思って。うちね、育てのお母さんが産みのお母さんからもらった母子手帳、うちのやつ、破って捨てたんですよ、怒って。だから、うちが妊娠した時、母子手帳自分のやつ見たかったのに、見られへんかったのがすごいイヤやったから、で、うちのちっちゃい時の写真もないんですよ。お母さんと写ってるやつ全部捨てたから。ないから、そんなんがすごいイヤやから。

Gさんは、月々の保育料以上の金額を子ども向け英会話教室に費やしており、3歳の子どもが英語を話す姿を見るのがとても楽しいと言います。Gさんは、Gさんと夫の修学年数が短いことにより、子どもが「やっぱり」頭が悪いと他人から思われる事を恐れ、子どもの教育に大変熱意を持っていました。また、若年出産しても子どもに不自由ない生活をさせるために、大学に行かせるまで仕事を続けるという決意も語っていました。

同席者 子どもを、英語とか習わせようとか、そんな思うのはやっぱり、自分のちっちゃい時の経験とかも関係あるか？あんまりそんなの関係ないか？

Gさん ああ、あたし高卒出やん、夫、高中退やん、中卒やん。  
だから、その子どもを、もうそういう、頭悪かったりとかしてたら、やっぱりこの子らの子どもやなあって思われるのがイヤやねん。だから、頭良くさせて、しょうかなーって。

### ③《周囲との軋轢》

#### 〈若年母親同士の反発〉

若年母親の中でもその背景は様々であり、置かれている環境も違うことから、同世代というのみで誰とでも親しい交流をもつのではなく、自分と違う点を見つけて反発し合うこともあります。

筆者 同じような年の人が集まったらまだ？

Fさん いけるけどー、そういうところ行ってもね、言ったら悪いけんね、なんか、バカそうな子が多いけんね。なんか、けっこう。じゃけ、ちょっとなかなか合う子おらんなんて思ってるね。

また、同世代でも育児を親任せにしている母親に対しては、非難する声が多く聞かれました。さらに、自分自身よりも年下で妊娠した女性に対しては非常に興味を持つのですが、「絶対無理、分かってないなー」、「いかにも遊んでるって感じ」など、否定的な発言も聞かれました。

#### 〈年長の母親集団からの孤立〉

多くの人が述べていたのが、年長の母親集団からの孤立でした。若年母親達は、初めは母親同士の仲間づくりを考え、保健センター等で行われている様々な教室に参加していますが、参加者のほとんどは年上で、他の参加者から話しかけられることはなかったと言います。

Eさん マタニティスクールってあるじゃないですか、産む前の。あれに行ったんですけど、年令がすごい高いんですよ。市役所とかそういうの。で18ってうちしかおらんくて。周りみんな26とかそんなんばっかりやって。仲良くなって言うか、話しかけてもけえへんし、話しかけづらいし、って感じ。

Dさんも、年上の母親達の中で、その輪の中に入っていくことを「気まずい」と感じ、母親学級に行っても、講義を聴くことなく途中退席したことが何度かあったと言います。Dさんは、年上の母親達は若い母親に対して「抵抗」を持っていると感じていました。

Dさん 保健センターでお腹でかい時、母子教室行ったけど、全然仲良くなれへんかって、途中で帰った。気まずいから。

筆者 どうなのですか？

Dさん 料理とか。妊娠中の料理。あん時とか行ったけど、全然私知らん人で、みんな何回か来てはるから、友達で固まって喋ってはってんけど、私だけ気まずかったから、授業も聞かずに「帰ります」って、帰って来たことは何回かあった。

筆者 周り、友達同士で結構固まっちゃって？

Dさん なんかやっぱり、若い…見た感じ若いっていうのがあって、なんかちょっと抵抗があるみたいで。その人達にとって。

### 〈10代での出産は早くない〉

Fさんは、自分自身は19歳での出産を「若い」とは思っておらず、19歳で出産するのは「普通」のことであると認識していました。しかし15歳未満は難しいと感じており、自分自身は、夫の年齢が10歳以上離れていて、なおかつ夫がカバーしてくれるから関係を続けることができていると認識していました。

Fさん いや、若いって自分で思わないですもん。19だし。19っていったらけっこう普通でしょ？19っていったらもう普通じゃけん、若いお母さんって自分で思わないですもん。

### 〈アウトサイダーであるという自己認識〉

若年母親は、マスコミなどに作られた若年母親像に反発しながらも、自分達は他の母親とは違う存在である、という思いを持っているということが言葉の端々から感じられました。他の若年母親の家族構成を聞く時に「片親ですか？」と聞いたり、学校に行かなくなったことを「できちゃった結婚の一番代表的なパターン」と言ったり、「うちらだって、ふつうに育ててる人達だって」と同世代の母親とそれ以外の母親を区別し、自らは「普通の母親」ではないといった自己認識を持っていました。

## ④《問題視される若年母親》

### 〈児童虐待問題と関連付けられる〉

若年で出産したことに対し、周囲は母親に対して憶測も含めた意見を述べる場合があります。例えば、「子どもが子どもを産んだ」や、子どもが熱を出して仕事を休んだ時に、「これだから若いお母さんはあかんねや」と言われたり、「XXちゃん(本人)にしてはおもちゃみたいなもんやなあ」、「おままごとちゃうぞ」、「絶対無理や」等周囲から言われています。こうしたこともあって、若年出産と児童虐待を絡めて自発的に発言するなど、作られた若年母親像に対して、母親達は強く反発しています。

Jさん なんか死なせちゃった？とか言う事件出てきてるけどー、それもたまたま、その人10代だったとか、20代だったって言うだけで、それで結構みんな若い人は、じゃあそういうことするんじゃないかとか思われるから。うちらだって、普通に育ててる人達だって、そんなの見れば、何て言うんだろう、あー、何で殺しちゃったんだろうとか、思うのみんな同じだし、知ってる人だって考え方みんな同じだから、決めつけないで欲しいなっていうの思うし。

### 〈トラブルが若年母親特有の問題とみなされる〉

Kさんは子どもの急な発熱で欠勤した時に、若い母親だから子どもの管理ができていないと言われたそうです。子どもの急な発熱など、やむを得ない理由で欠勤せざるを得ないことはどの母親にでも起こりうるのですが、若年母親の場合、若い故に「自己管理ができていない」とされ、批判の対象となってしまいます。

Kさん 仕事やったら、子どもが熱出て、急に休みますとか言ったら、なんか、それでもやっぱ、子どもいはらへん人ってわからないじゃないですか、そういうのが、だから、いつもの自己管理ができてへんからって、やっぱりそれで、若いお母さんはそれやし、あかねやみたいな言われた時はむかついた。

### 〈妊娠したから結婚したとみなされる〉

Fさんは、夫は結婚しようと言っていたのですが、本人にもともと結婚する気はなく、出産をきっかけに結婚することになりました。Fさんは、別に結婚しなくても相手と一緒にいればそれで良かった、と述べています。

Fさん できちゃった結婚とかって言われるのやだなー、なんか。そうなんじゃけどー、別に、Fはねー、結婚はせんでいいって思ってて、なんか、そうじゃないですか、結婚って紙でしょただの。でもし、けんかして別れたら、離婚って言うのがつくでしょ、別に結婚せんでも、もう一度結婚したいって、一緒におったらそれで良くないですか？

## 第3項 行き渡らない支援

### (1)【受けられる支援に生じる個人差】

#### ① 《インフォーマルサポートの有無》

#### 〈子どもに関わる父親、関われない父親〉

夫の多くが育児に協力的でした。夫の育児分担は、子どもの入浴、保育園の送迎、休日の育児などです。夫が育児に協力しやすい背景としては、交代勤務、日勤中に休憩がある、休日は出勤する必要がないなど、職場の環境要因も大きいようです。子どもと3人の暮らしには、夫婦2人とは違った楽しみがあると答え、妻以上に出産を喜んでいる父親もいました。母親達は父親であり一家の中心となり支えている夫に対し、感謝の思いを持っていました。

Jさん ダンナはもう、影で頑張ってくださいって感じ。ほんとによくやってくれると思ってから。そんな口に出しては言わないけど。言えないけど恥ずかしくて。でもほんとに頑張ってくれてると思う。ダンナも。よく面倒見てくれるし、不満はない。

原家族において親像を築けず育児を不安に思っていたのは、母親だけでなく父親である夫も同様です。Eさんの夫は、原家族における父親不在から、義家族との関係構築に困難な面がみられました。しかし、育児は積極的に取り組もうと努力している様子が見ええます。

Eさん ダンナさん自身は正直、父親って言うのんがね、高校生くらいからおらんくなったら、そっからの父親との付き合いが分からんから、うちのお父さんに会った時はすごい戸惑って、なんて接したらいいの分からへんみたい。だから、甘え方も分からんって感じ。だから、もっと甘えていいんやでって言ったら、その甘えるの意味が分からんくて、言うたら利用するみたいな感じに考えたりとか。ややこしかった。こんなんで親になれるのかなって、自分自身そういう不安はあったみたい。それが子どもなんか育てられるのかなあみたい。でもすごい、かわいがってくれてる。

しかし、育児に協力的な夫ばかりではありません。Kさんの夫は、Kさんに対し殴る蹴るの暴力がひどく、夫婦喧嘩で家に穴が多数空いていたと言います。Kさん自身も尾てい骨を骨折し、救急車で病院に運ばれたことがあります。あまりの暴力のひどさに警察に通報し、夫が拘置所に収容されたこともあったそうです。Kさんは夫のこうした暴力を、一緒に生活することで治したいという思いを持っていたのですが、親の強い勧めにより離婚することになりました。Kさんの夫は家にいることはほとんどなく、同居中に子どもをみることはなかったと言います。

Kさん 夫は(子ども)みることもなかった。

筆者 小さい時にお風呂入れてくれたりとか、そんなんもない？

Kさん なーい。別れてからのほうが、(子ども)は一とか言ってきたり。

#### 〈家族の誰かが支える育児〉

若年母親の育児には両親の役割も大きいです。出産に賛成していたか反対していたかは関係なく、経済的にも育児の面でも彼女達を援助しています。そのため妻方の実家の近くに住んでいる人が多くみられました。また両親の離婚により母親と離別している場合も、出産時は実の母親が大きく関わっています。

GさんとKさんは実家が近く、保育所の送り迎えや食事の支度などの支援を頻繁に受けています。Gさんはこうした状況を「楽」とであると語っていました。

Gさん お母さんいる時はお母さんみてくれるし、弟がけっこうみてくれて、遊んでくれる

し、で、保育所の、G が送り迎えとか行けへん時で、ダンナも行けへん時は、おばあちゃんとかも行ってくれるし、なんかみんな、みてくれて、楽。ご飯、夜ご飯つくるのめんどかったら、ダンナが子ども連れて、自分の実家行って、ご飯食べに行ってくれるし、私むっちゃ楽。

Eさんは、両親が離婚したため実母と離れて生活していましたが、出産後は、実の親が生活用品や育児用品を買ってくれるなどの支援をしてくれたそうです。

Eさん もう病院代がなくて、その病院代ないからって言うんでお父さんに何回か借りたことはあるけど。それ以外でお父さんにお金もらったりとかは一切なくて、産みのお母さんはたまに会った時に子ども用品、赤ちゃんのほ乳瓶とか。あんなんをいっぱい買ってくれたりとか、家に、引っ越して来た時に何もなかったから、コンロと、布団とーとか、そういうの買ってもらったりとか。すごい助かったみたいな感じで。

また、故郷から遠く離れ、両親とはほとんど連絡を取っていない Fさんは、父方のおばが面倒を見てくれていると言います。他にも、一度故郷に帰った時は兄がベビーカーやベビーベッドをレンタルして用意してくれていたそうです。このように、親と離別していても出産を機会に支援を提供してもらったり、親との関係が希薄な場合、親族や兄弟が支援を提供していることがあります。

### 〈友人の応援〉

同世代の友人も、若年母親の育児を応援しています。Bさんは既に子どもがいる友人に勇気づけられ、出産を決意しています。それ以外にも、育児の情報交換や、子どもを連れてバーベキューや海に出かけたりなど、友人達と子どもを含めた付き合いをしていました。子どもがいない友人も、彼女達の立場を応援し、妊娠中に本人を励まし、出産時に子どもの洋服などをプレゼントしています。

Dさん 一番仲いい子は、あのその、手術終わって出てきて速攻に、「生まれたでっ」で電話したらすぐ学校飛び出して、定時制の学校さぼって、お見舞いにきてくれて、ほんでベビー服プレゼントしてくれて。で、今度もう一人の友達は、なかなか接触…仲はよかったけど、遊ぶ接触がなかったけど、子ども生まれたって聞いて家に来て、退院してから家に来て、でまあ、よだれかけとベビー服とプレゼントしてくれた。

## ②《社会的支援とのつながりと断絶》

### 〈信頼できる専門職との出会い〉

若年母親の多くは保健所・保健センターで行われる健診等は受診しており、健診時に行



われる指導も、自分の興味がある部分は聞いて守っています。また保育園で入園前の子ども達に園庭を開放し、様々な遊びを母親と一緒に言う園庭開放にも積極的に参加し、その様子で保育園入園を決意する人もいました。

妊娠、出産を通じて専門職との関わりが深い人は、出産後も専門職をとて頼りにしています。妊娠を「誰も喜んでくれなかった」という F さんは、妊娠後期になっても出産できる病院が見つからずに困っていました。そこで母子手帳を取りに行くことを思い付き、保健センターに母子手帳を取りに行きます。その時に会った Z さんに病院を紹介してもらい、無事出産することができました。Z さんは地域の産科病院についての情報を多く持っており、この病院であれば、妊娠 8 ヶ月まで未受診だった F さんを受け入れてもらえるだろうといった目星をつけて、病院と交渉していました。

筆者 出産の時に一番いろいろやってくれた人って、

F さん (同席者 Z さんを指さす) ほんま。

Z さん 私何にもしてないよ。先生(産婦人科医)のところ連れて行っただけやがな。

F さん ほんま、F 赤ちゃんね、産むとどここも紹介してもらえんってか、断られて。(妊娠)8 ヶ月まで病院行ってなくて。4 ヶ月の時 1 回妊娠してますって行って確認してもらっただけで、あと全然行ってなくて病院。やっぱ親おらんけ、産ませてくれんから、保護者おらんとだめですって言って、その時 Z さんとこ、母子手帳とりあえず取りに行かないといけんと思って、母子手帳取りに行ったら Z さんおって、色々相談して、したら産婦人科教えてくれて、一緒に病院までついてきてくれた。で病院行って、お腹大きかったけ、女の子とかもその日に分かって、でちゃんとしてもらった。

Z さん 先生親切にしてくれたな。

F さん うん。良かった。

#### 〈初対面では心を開けない〉

若年母親は、どんな支援でも積極的に受け入れるというわけではありません。H さんは、病院で体重を測った直後に訪問した保健師に対して訪問を拒否しており、自分にとって必要でないと考える支援は受け入れていません。また J さんは、子どもが乳幼児健診で発達の経過観察が必要であると判断され、保健師が家庭訪問を行っています。その際に夫の暴力により開いていた壁の穴に対して、保健師は状況のみを聞いて「すぐ帰った」と語っていました。

筆者 産んだ時、保健婦さんが訪問来てくれたりとかありました？

H さん 来た、1 回だけ。私もういらんって言った、病院で(体重)測ってから来はるんやもん、いつも。

J さん 積み木何個積めるかとか、そんなんを。それがいけへんかったんかなあ。私。で、来

はった。

筆者 その時に何か相談に乗ってくれたりとか、ありました？

Ｊさん 相談できる人はいますかーとか、そんなん聞いてはって。んで、家が、家の壁すっごい穴開いてたから、どうしたんですかーとか聞かれて。でもすぐ帰らはった。なんか書いたりして。

### 〈保育所に預けることへの抵抗〉

８ヵ月の子どもを育てているＬさんは、育児を負担に感じ「毎日しんどい」と話していました。同居の祖母が子どもをみてることもあるのですが、ほとんどの育児や家事はＬさんが行っています。家計のやりくりが難しいことから、子どもを保育所に入れて働きたいと思ったことありますが、保育所の空きがないと言います。Ｌさん自身も、６ヵ月の乳児を保育所に預けて働くことには抵抗を持っています。

Ｌさん ああー。家で子育てしてる方が大変。仕事に行きたい(笑)。

筆者 仕事してる方が楽だった？

Ｌさん 男の人は家にいてるだけでぼけーとしてるだけでいいねえって思うかもしれへんけど、そんな甘いものじゃない。子育てはそんなしんどいもんかと思わへんかったしねえ。もっと楽できるかと思ったけどもう、全然。自分の時間がないし、もう全部子ども中心になるし。もうグロッキー。もうしんどい。毎日毎日。

### 〈職場の理解〉

Gさんは出産後パン屋でバイトを始めたのですが、子どもが病気の際の欠勤が重なり、１ヵ月で解雇されました。その後保育所の母親３人と同時期に保険外交員を始めます。保険のノルマを達成するのは大変で、仕事を初めて１年４ヵ月で、同時期に始めた母親２人は辞めてしまいました。一方Gさんは、自由な時間が作れ子どもの病気のための欠勤があっても周囲の人が協力してくれるために、仕事を続けることができていると語っていました。

Gさん (前職の)パン屋辞めたんが、なんか(子どもが)４回くらい入院して、ちっちゃい時に。いっぱい休まなアカんくなって、辞めさせられて、で、保険の外交は、こんな(自由な)時間作れるから、(仕事)してからも２回くらい入院したんやけど、営業やから、辞めささらへん、ちゃんと。周りの人も、ちっちゃい子おるの知ってはって、Gを誘わはったから、協力してくれはる。だからそういう時は、仕事いいからついといてあげ、とかそういうのがあったから、続けられて。

\*プライバシー保護のため、データを一部改変しています

# 10代の母という 生き方 ⑥

大川 聡子

## ★まえがき

前々号（マガジン 14 号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が出産を主体的に選択していく過程と、その背景にある社会的特徴について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましてはマガジン 14 号をご参照ください。本号においても、出産後の母親たちがおかれていた状況を中心に記述し、その内容から若年出産の背景について考察していきます。

## 第 4 項 母親になるための努力

### (1) 【母親自身の努力】

#### ① 《活発な性格》

若年母親達は活発な性格であることが多く、問題に直面した場合にも一人で悩むのではなく、その時に応じて様々な人を頼り、また自分でもネットワークを広げて同年代の母親とつながる力を持っていました。

#### 〈横のつながりを作り出す力〉

若年母親は様々な場所で同世代の母親を見つけ、友人になります。このような同世代母親同士のつながりの広さは特徴的であり、母親たちの活発な性格に起因するところが大きいと感じました。また、周囲に同世代の母親が少なく、友人が欲しいと感じた若年母親は、ホームページやサークルを作り、運営することで友人の輪を広げていました。

Jさん 私ほんとにもう周りに友達がなくて、妊婦の。友達が欲しくて？でそういうママ友が欲しくて作ったみたいなのこあるし、他の人にも、私のホームページ 10代の人から 20 代前半の人のやつなんですけど、若いママ達が集まって友達作ったり一、お話できたりするようなところ作りたいな一とか思って、作った。

## ②《旺盛な自立心》

### 〈必要以上に他人を頼らない〉

若年母親は自立心が強く、育児においても必要以上に他人を頼らず、自分で何でもしようという傾向が強くみられました。母親たちは年齢相応の遊びを我慢しても、母親役割を全うしようとしていました。

Eさん うちはこの子産んでから 1 回もこの子と離れたことがない。(略)自分が産みたくて産んでんねんから、そんなよっぽどの用事じゃない限り、普通預けて遊びに行くってことはないやろうって思う。遊びたいっていう考え自体が、じゃあ子ども産むなよってなっちゃうでしょ。

## (2)【母親となることでの社会化】

### ①《生活設計を構築する試み》

#### 〈生活習慣を変える〉

若年母親は、母親となったことであらゆる面で変化したと言います。「規則正しい生活を送るようになった」、「しっかりするようになった」、また夫から、「(本人が)しっかりしてきた」という意見や、夫の母親から、「子どもを産むことによって大人になった」という意見もありました。このように子どもを産み母となることで、生活習慣や生活態度を若年母親自身が考える、母親として適切なものに改めようと努力しています。

#### 〈生活設計を立てる〉

母親となったことで長期的な視点を持ち、自分の生活設計を計画的に組み立てている人もいました。

Gさん 不自由なく生活させてやんのが私の目標やねん。不自由なく。(略)大学まで出して・・・頑張らなあかんねん私。あと 20 年くらい。

### ②《母親としての自分を評価する》

#### 〈母親として生きること自信を持つ〉

若年母親は子どもの成長とともに母親として成長し、子どもの成長が母親としての自信につながっています。「初めは育児が大変だったけど、(ある程度大きくなって)もうそれが

ふつうになってきたので楽」といった発言や、また、夫の母親からは「子どもが笑うようになってから(Cさんは)変わった、楽しそうになった」という発言がありました。子どもを育てた自信から、金銭的余裕があればもっと子どもを産みたいと言う人もいました。

仕事を持ち、父母双方の実家の支援を受けている Gさんは、大学に行くよりも子育てをしている現在の人生の方が向いていると言い、大学に行った同級生が話す内容を子どものように感じると言います。

Gさん だから私向いてるって、子育てに。向いてるって、今の人生のほうが。

筆者 大学行ったりするより？

Gさん 無意味やったと思う、私が大学行ったら。で、今度みんなが産むころになったら私楽やん。なんかもう。こう、高見の見物したろかなあって。遊びまくったろかなーと思って、私。(略)

筆者 (同級生は)大学4年生くらいでしょ？

Gさん うん。それ見てたら、あー私楽やなあって。勉強もテストもないし楽やなあ。みんな言ってることがお子ちゃまに聞こえんねんもん。若いなあーって。話も含わへんし、(略)ナンパとかそんなんばっかして、女の話ばっか。今だに結構遊ぶねんか、そんな時になんか、ちゃらけとんなーって。

#### 〈母親であり続けることの努力を評価する〉

周囲から「若いのによく頑張った」と言われることにより、改めて自分自身の努力を見つめなおしている人もいました。また、「自分だけでなく、どのお母さんも頑張った」と周囲の母親に対して評価する発言もありました。

### 第3節 考察

若年出産は「望まない妊娠」問題として構築されていますが、佐藤(2005)が、意図的に若年出産する女性が増えつつあることを指摘しているように、本調査でも、〈子どもが欲しかった〉と考え、出産を自らの意思で主体的に選択する母親がみられました。また、若いゆえに親達から結婚を許されないと予想しており、〈結婚するための妊娠〉をしている母親もいました。Montgomery (2002)の調査では、若年母親が出産した理由について「責任感を持ち、より成長するため」「ボーイフレンドと新たな関係を築くため」を挙げています。こうした理由による妊娠は、いわゆる「望まない妊娠」には当てはまらないでしょう。避妊を実行しなかったことにより妊娠した人も多いのですが、この理由として Hさんは、〈結婚するための妊娠〉において「何もすることなかったし、結婚しよう」と話しています。就学や就労している年齢にある10代の女性達がなぜ、「何もすることがない」という思いを持ったのでしょうか。

〈短い修学年数〉で示したように、若年母親の多くは高校を中退していますが、妊娠を

機に退学をしたのではなく、妊娠前から高校に進学して勉強することにそれほど関心を持っていませんでした。家族も高校進学に迷う子どもの進路に向き合う余裕がありません。高校中退後就労した仕事も、接客業や内職等〈不安定な就労〉であり、産後もキャリアを継続することは難しい状況です。Willis(1985)は、「職業の意識的な選択ということ自体が、本質において、非常に中産階級的な発想なのだ」といいます。妊娠前の若年母親達も仕事を選べる状況になく、できる仕事をせざるを得ず、そこでやりがいや生きがいを見つけることは難しいです。こうした状況の下、〈母子を養うことができる夫〉と知り合い交際を始めます。交際している中で、避妊をせず妊娠したとしても、夫と新しい家族を作ることに希望を持ち、母親になることを消極的に「選択」しているとも考えられるでしょう。

こうした、消極的にあるいは積極的に母親になることを希望している若年女性に対して性教育を推し進めても、若年出産が減少することはないでしょう。それよりも、若年母親が出産前に持つ社会的不利な特徴の一つ一つを取り除くことの方が必要ではないでしょうか。

出産後の母親は、妊娠前と比較してさらに【社会的不利の顕在化】が進んでいきます。出産後就労希望を持っていても、昨今の保育所待機児童数の増加から、就労を希望しているという段階で子どもを保育所に入れることは難しく、乳幼児を育てながら職業訓練を受けることはさらに困難な状況です。〈選べない仕事〉で示したように、乳幼児がいることでアルバイトでさえも採用されないという現状もあります。夫である父親も収入が高いとは言えず、若年出産家族は〈経済的困難〉を抱え、〈住環境の不備〉の中で生活をせざるを得ません。さらに、〈子どもとの関わり方がわからない〉といった不安や、〈世代間連鎖からの離脱〉といった《子育てへのプレッシャー》を抱えながら育児をしていくことになります。

〈世代間連鎖からの離脱〉について、Lipper (2003)は、若年母親の中に、母親自身の挫折した願いや夢や野心を子どもに投影する者もいたといえます。本章においても、子どもに自分の果たせなかった学歴や母親との信頼関係の構築などを求め、子どもとの関わりの中で、母親としての育ち直しを行なおうとしている様子が見られました。しかし、子ども自身はこうした母親からの期待をどのように受け止めて成長していくのか、母親自身が現状と子どもへの期待をどのように折り合いをつけていくのかは、今後の課題として残ります。

周囲の人々は若年出産した母親達の実態を知ることなく、〈トラブルを若年母親特有の問題とみなし〉、〈児童虐待問題と関連付けられる〉、といった《周囲との軋轢》も抱えることになります。SmithBattle(2007)は、社会の若年母親に対する蔑視は、幼少期の不利な状況の遺物からもたらされた負の結果であるという根拠があるにもかかわらず、尾を引いているといえます。日本においても、若年母親の社会的不利な背景には注視されず、若年母親であることそのものが「問題」とであると認識され、偏見の対象となっていることがうかがえます。

また若年母親は、〈アウトサイダーであるという自己認識〉を持ち、自らを一般的な母親という枠に入れない別種の母親であると感じ、若年母親であることを再認識していました。栗岡(2001)は、「主体があるカテゴリーに自らを位置付けているとすれば、そこには彼の状況に対する全体的な認識が現れている」といいます。若年母親は自らがアウトサイダーで

あることを自覚し、若年母親とそれ以外の母親を意識的に区別し、その輪の中に入ること  
を躊躇しています。それが〈年長の母親集団からの孤立〉につながっていました。

《インフォーマルサポートの有無》では、こうした母親達をサポートする、家族、親戚、  
友人などの支援が示されました。夫の多くは育児に積極的に参加し、父親としての役割を  
果たそうとしています。しかし、自分自身の父親の存在が希薄なために、父親の役割をイ  
メージしにくく、子どもが成長するにしたがって、父親としての役割を果たし難くなるこ  
とが危惧される夫や、子どもに全く関心を示さず育児にも関わらない夫もありました。夫以  
外では〈家族の誰かが支える育児〉から、家族のうち誰かが母親を支援し、母親達は金銭  
的支援や家事のサポートなどを受けて生活している様子が語られました。このように、イ  
ンフォーマルサポートの授受には個人差が大きく、育児の負担感、母親の家族構成や父  
親の育児参加の度合いにより大きく異なっています。若年母親に対する支援が家族に回収  
されているために、支援を受けられない若年母親は困難な状況で育児せざるを得ません。  
その一例として、周囲が出産を望まなかった F さんは、妊娠中に不安定になった時期があ  
ったといいます。本来ならば喜ばしいことである妊娠、出産を隠さなければならないこと、  
家族を含め周囲に必ずしも祝福してもらえないことは、母親の心に大きな傷を残し、その  
後の育児にも影響を及ぼす危険性があります。F さんは信頼できる専門職と出会い、必要な  
社会資源につながることもできたのですが、こうした家族に回収し得ない若年母親の育児  
リスクは、わが国では調査が十分なされていないために、実態が明らかでなく、支援が乏  
しい中で育児を行っている若年母親が潜在している可能性も否定できません。

インフォーマルサポートには個人差がありましたが、社会的支援の授受にも個人差があり  
ます。〈信頼できる専門職との出会い〉で示したように、専門職と出産や育児を通して深く関  
わり、社会的支援を受けることができた母親もいます。しかし〈初対面では心を開けない〉  
では、若年母親は自分が希望しない時期に訪問に来た保健師を拒否し、また夫の家庭内暴力  
を確認しながらも保健師は「すぐ帰った」と認識されています。若年母親は《妊娠前の社会  
的特徴》から読み取れるように、これまで家族や学校での対人関係の葛藤を多かれ少なかれ  
抱えているために、支援者に対しても初対面で自分の悩みや生育歴を打ち明けられるわけ  
ではありません。そして〈保育所に預けることへの抵抗〉や〈必要以上に他人を頼らない〉と  
いったカテゴリーからも、若年母親がなるべく人の手を借りずに、自分自身で子育てをした  
いという思いが読み取れます。子育てを自立して行いたいという意欲は評価されるべきで  
すが、こうした意欲は、ともすると支援の入りにくさにつながる可能性があります。

若年母親に関わってきた支援者は、継続した深い関わりと、母親の子育てを認めることで信  
頼関係を築くことができていました。若年母親達は「保健センター」にではなく、「保健センタ  
ーの Z さん」だからこそ心を開くのです。もし支援者が、若年母親特有の文化を理解しようと  
する姿勢を持たず、案件により何人もの支援者と入れ替わり対応するようなことが重なれば、  
若年母親と関係を構築することはますます困難になるでしょう。個人対個人では関係が構築し  
にくいといった特徴を持つ若年母親に対しては、母親が心を開いた支援者とともに訪問したり、

夫や祖父母が同席できる時間に訪問したり、個別だけでなく集団での支援を取り入れるなど、まず集団や家族として関わることで関係を構築し、個別支援につなげていく必要があります。

出産後の社会的不利な状況に対峙するのは、インフォーマルサポート、社会的支援と若年母親自身の努力でした。若年母親達にとって、妊娠はこれまでの生活を一変させる機会となっています。〈若者らしい生活ができない〉ことへの後悔はありますが、子どもの将来を考えることにより、〈生活習慣を変える〉ことや、〈生活設計を立てる〉ことができるようになります。さらに〈母親として生きることに自信を持つ〉ことや〈母親であり続けることの努力を評価〉できる母親もいました。若年母親達は出産し、母親となることで社会性を高め、周囲の人々との関係性を再構築することができていました。

若年母親を生む背景には、独特の環境や文化があります。母親達にとっては、先輩や友人など身近な人の多くが10代で母親になっているため、若年出産は決して特別なことではなくごく自然なことであり、〈10代での出産は早くない〉ととらえている母親もいました。

ほとんどの若年母親達は、友人とのつながりがあり、近隣の若年母親についてよく把握しています。さらに、インターネットなどのメディアを通して積極的に交友関係を広げ〈横のつながりを作り出す力〉を持っています。出産後の社会的不利が顕在化する中で、若年母親同士のピアサポートは、若者らしく母親としていられる場を地域で作ることができ、母親として友人関係を構築していくことができる場となっています。そして、ピアサポートとつながることにより自身の世界を広げ、様々な人々と関わるきっかけとなっていました。

本研究では、子どもの月齢が低く、育児サークル等に参加していた母親が少なかったため、若年母親同士の横のつながりやサークルの意義について十分に検討することができませんでした。その内容については、次号以降で記述していきたいと思います。

## インタビューデータの限定

本稿でインタビューした事例は、積極的にインタビューに参加し、自分の意見が役に立つなら、と語ってくれた方達です。そのため、若年母親の中でも積極性があり、出産するという選択を前向きにとらえている人が対象となっていることは否めません。しかし、若年母親が主体的に出産を選択し、夫や家族を巻き込み出産への意志を貫いている過程と、その背景にある社会的に不利な状況について記述することができたと考えます。

## おわりに

本号では、若年出産の背景について考察しました。次号では、若年母親同士のピアサポートが育児にどのような影響を及ぼしているのか、若年母親グループにおけるインタビュー内容から考察していきたいと思います。

\*プライバシー保護のため、データを一部改変しています。



# 10代の母という 生き方 ⑦

大川 聡子

## 出産後の社会的不利との対峙

### －気の置けない仲間と関係性を再構築する過程－

#### ★問題と目的

若年母親は青年期でありながら、子どもを生み育てるという生殖期の課題に直面します。そのため、青年期の課題であるアイデンティティ形成に困難が生じると考えられます。

田間(2001)は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい。その結果として、逸脱を自己の責任とし、統制を主体的に受け入れやすいと述べています。若年出産した母親達においても、統制を受け入れて母性を内面化し、自らの生活や行動を、母親としてあるべきものに変容させたのでしょうか。若年母親となることを選択する行動力を持つ彼女達が母親として行動する理由は、統制を受けたこと以外にもあるのではないかと考えました。

若年母親は、「予防」すべきものであるとされ、児童虐待などのリスクと見られていることから、他者からの承認を得ることは容易なことではありません。若年母親は青年期にあることで、母親としての自己認識を形成する上での困難だけでなく、地域社会からの承認を受けることへの困難という、二重の困難に直面します。若年母親が持つ出産前、出産後の社会的に不利な状況については前号に書きましたが、これらの社会的に不利な状況に、

若年母親はどのように対峙しているのでしょうか、また若年母親のピアサポートはどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

今号からは、若年母親グループにおけるインタビューから、出産後に顕在化する社会的に不利な状況に対峙するための、ピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について明らかにしたいと思います。

## ★対象と方法

研究協力者は、A市において若年出産した母親を対象に行われているグループ「B」の参加者です。筆者はこのグループにおいて、200×年5月、8月に参加者15名(延べ20名)を2グループに分け、半構成的質問紙を用いてグループインタビューを行いました。内容は、妊娠から出産までの周囲の関わり、母親になったことでの変化、サービスの活用、支援の有無等です。グループインタビューは筆者とグループ「B」のスタッフである助産師、保育士と保健師経験のある大学教員の4名が各2名ずつグループに入り、司会進行を行いました。母子分離できる子どもたちは別室で「B」スタッフが保育を行いました。

分析方法は、質的記述的研究とし、インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリー別に類型化を行いました。作成されたカテゴリーを1. 若年の出産に至る背景要因、2. 母親としての心理社会的課題の表面化、3. 母親としての自己認識形成と社会行動の変化、の3項目に着目し分析を進めました。インタビューの対象者は、出産時の年齢順に事例1からA、その後B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、Oとしました。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については、第3者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、加筆修正を行ないました。

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しています。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮した。本稿は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得ました。

## ★インタビュー結果

分析した結果を、カテゴリー別に記す。以下、サブカテゴリーを【 】、コードを《 》または〈 〉で表す。

## 1. 出産後の社会的不利の誘因

### (1)【学校からの離脱】

インタビューに回答した若年母親の中で、中学校に「行ってへん」と答えた人が複数いました。中学卒業後は普通高校や定時制高校などに入学しますが、退学した人は、夏休み明けなど1年生で中退している人が多いです。中退した理由としては「遊びたかったから」、また校則違反により「辞めさせられた」と答えた方や、妊娠を機に退学を選択した方もいます。

#### 〈友達とつるむ方が楽しい〉

Gさんは、中学校時代はあまり学校に行かず、友人と家でゲームをして遊んでいることが多かったと言います。

Gさん 中学校の時？遊びまくってた(笑)。

司 会 何して遊ぶの？

Gさん えー、別に何することもなく、友達といっただけやけど。

Iさん つるんでんのが楽しいねんな？

Gさん そう。中学校の時はそれが楽しいから。よく、朝とか起きてんのは起きてんねんけど、学校に行かんと、友達でゲームしてたりとか。ずっと毎日そんなん。

こうした状況から、Gさんの母親が学校に呼び出されたこともあったのですが、親からは「学校に行け」とは言われなかったそうです。教師も学校に何度も誘ったが、Hさんが言うことを聞かなかったため、最後には「(教師も)もう諦めとった」と話していました。

#### 〈レベルの低いクラスメイトと合わない〉

Kさんは、高校に進学する意欲が乏しく、友人が行くからという理由で進学を決意したものの、周囲のクラスメイトと合わず、授業を受けて帰る、というだけの高校生活だったと言います。グループにおけるKさんは、積極的に発言し、人とコミュニケーションをとることが苦手な様子はみられませんでした。

Kさん 高校な、なんかあの、行っても行かんくてもどっちでもよかったから、めっちゃ簡単に卒業したかったから、あほな学校行ってんやん。もうめっちゃ一番低いレベルの。なんかとりあえず友達行くから、みたいな感じで行ったら、周りがアホすぎておもんなかってんやん。何て言うんやろ。頭飛んでるやつが多かった。

### 〈妊娠したことによる退学〉

中学校の時は家に帰らず、学校にもあまり通っていなかったという Bさんは、高校に進学してから家に帰り、学校に通うようになりました。その後は朝から夕方まで働き、夜は定時制高校に通い、高校が終わったら遊びに行く、という生活を繰り返していたと言います。しかし妊娠のため、半年で高校を退学せざるを得ない状況になりました。

Bさん 高校の時は真面目やったで。

司 会 学校とかも毎日？

Bさん うん。定時やん。朝から働いて、夕方まで働いて、ほんでから、学校来てしてたで。

Cさん 若いからできたんやて。

Bさん そやな。今なんて、Bんち 10時就寝やからな。(学校)半年で辞めたけど。チビできたから。

### (2)【金銭的自立を迫られる】

若年母親達の中には、高校生のころからアルバイトで長時間働き、得たお金を家計に入れたり、自分の学費に充てている人が多かったです。このことから、若年出産した母親の両親の雇用が不安定であったことが読み取れます。家計に入れる以外のお金は、免許取得や遊興費に使っています。

### 〈アルバイトで家計を助ける〉

Dさん お父さんが仕事辞めたから、その分、自分で払う分は全部自分で払って、っていうのがあったから。払わなあかんかったから。

司 会 家計にっていうか？

Dさん そうそう。そっちにやって。で、残りは全部遊んで(笑)。でも、車の免許取るために貯めたりはしとったけど、(子ども)ができて、まあ、何かいろいろと使った。

### 〈学費は自分で賄う〉

Gさんは、高校の学費を自分で賄うよう親に言われたため、アルバイトで賄おうとします。しかし、学校自体に興味を持てなかったため、学費を賄う意味を感じられず、高校を中退しています。

Gさん 高校行ってた時は、親に「高校行きたかったら自分で学費出し」って言われとったから。バイトしながら学費出して。「おもんないのに何で学費払わあかんねん」ってなって。で、辞めて。お金なんか、全然、貯金とか考えてなかった。(略) 10万円以上稼いでも、余る月とかなかった。あるだけ使って。

(3) 【夫の同意が得られない出産】

〈夫が同意しなくとも子どもは産む〉

妊娠した10代の女性達がすぐに出産を決意しても、同意する夫ばかりではありませんでした。しかし、夫が同意しなかったとしても、彼女達は一人が出産したいという思いを持っています。

Bさん どうせ一緒に住む気やってんから、「まあえっか」言うて。でも、旦那はびっくりしてたから、嫌がってたけどな。だから、「別に、覚悟決まらんのやったらいいらん」って言ったもん。

Cさん 同じこと(私も)言った。

Bさん 「別にいいよ。どっちでも」って。

Cさん 「迷ってんのやったら、ええ」って。「1人で産むから」って。

Mさんは、当時交際していた男性と別れてから妊娠が発覚しました。男性に妊娠を報告すると、墮胎するように言われたそうです。そのためMさんは、墮胎するために病院を受診したのですが、胎児のエコー写真を見て、「これはもう、おろしたくない」と思い、出産を決意しています。男性からは墮胎するよう勧められましたが、Mさんはそれに従いませんでした。このことから、夫との関係よりも、自分の体の中に子どもがいるという身体感覚を優先し、出産を選択していることが分かります。

司 会 最初妊娠分かった時に、すぐ産みたいってなった？

Mさん 思ったけど。彼氏と別れてから発覚したから。言ったら、もう「おろせ」って言われとって。で、おろすつもりやって。病院行って、エコー見た瞬間、もうこれはもうおろしたくないと思って、産んだ。

司 会 旦那さんも、もうその時は産んでくれって？

Mさん 産んでくれっていうか、「おろしてくれ」の一点張りやった。

Lさん 勝手に産んでんな？(笑)

司 会 でも、説得したっていうか。

Mさん 説得したっていうか、もうなんて言うか、もう産まれへんちゃう、おろされへん状態になっとったから。「勝手に産むわ」みたいな。で、もう一切。

## 第2項 出産を動機づける原家族との距離感

### (1)【出産の動機付けとなった原家族の様相】

#### ①《親からの自立》

Kさんは夫との交際をきっかけに何ヵ月か家出をした後、夫と共に生きていくことを決め、実家を離れ夫との生活を始めました。Kさんにとっては、夫との交際や妊娠が、親から自立するきっかけとなっています。

Kさん もう（家に）帰らへんわって自分でわかったから、家出、ただの家出じゃないなあって自分で思ったから、（親に）言って、「もう帰れへんから、この人やと思うから」。それで、旦那の地元に来て、今に至る。

司 会 一緒にいたかったから、家に帰らなくなった？

Kさん だから、仲良くなってから結婚までがめっちゃ早かった。だから1年半くらい？2年くらいか？知り合ってから。

#### ②《出産を後押しする家族》

若年出産する母親の家族は、一度は出産に反対しても、最終的に本人の意思を尊重し、積極的に支援する家族が多かったです。

#### 〈経済的に支援する親〉

Bさんは父と再婚した継母の下で育ち、継母とは不仲だったため、父親と母親がいる家庭に憧れていたと言います。別居していた母親も、家出して4ヵ月たってもBさんと連絡を取っておらず「ほったらかし」だったそうです。ですが、Bさんの妊娠に最初に気づき、受診を勧めたのは父親でした。妊娠を父親に告げた時、Bさん自身は「一人でも産む」つもりでしたが、父親が経済的に援助することを約束してくれました。そのことにより、夫に楽な気持ちで妊娠したことを話すことができたと言っていました。

Bさん すごい、お父さんとお母さんがいててとかって、家庭にはすごい憧れてて、でももしそれが、旦那が「もう、無理や」って言うんであれば、「一人でも産む」って、父親に言った時に「そうか」って普通に言われて、「いいよ」って、「俺が働いたる」って。それから「おまえは別に育ててたらそれでかまへん」って言われて。でよかったと思って、すごい楽な気持ちで旦那に(妊娠した)話はできた。

#### 〈母親の願いを叶えるための出産〉

Nさんの母親は癌と診断された際に「孫の顔が見たい」と言い、そのことでNさんは出産を決意したと言います。父親も当初は出産に反対したのですが、出産後は子どもを可愛がってくれているそうです。

Nさん 自分の親がなんか、癌とかなって。ほんで「孫の顔見たい」って言われたから。もし、その死んだ時って言われたから、「ああ、しゃあない」と思って産んでしまった(笑)。

司 会 もう親のために。

Nさん そう。ほんで今も生きてるから「おい」みたいな(笑)。

Dさん 反対されへんかったん？

Nさん おかんは、もう。だから、おかんがその病気なあって。おとんはもう多少反対はしたけど。産まれたらこっちのもんかな、みたいな。今はべったり。

### 〈親の若年出産〉

また、出産する母親の家族自身も早婚である場合もあります。Gさんの場合は、親が早婚であり、Gさんが交際中から「孫が見たい」と言っていたそうです。友人も妊娠後の結婚が多かったことから、妊娠後の結婚に抵抗が少なかったと言います。Dさんも同様に、Dさんの母親の出産年齢が若かったことを語っていました。

Gさん 妊娠する前から、両方の親が「早く孫見たい、見たい」言ってる。だから別に、子どもできて結婚する人もおったし。子どもできたら籍入れたらいいや、そんな感じだったから。子どもできて籍入れて、両方の親は「できた」って言った時も、めっちゃ喜んでたし。

司 会 お母さんとかって、その時まだ若かったんじゃないですか？

Gさん お母さんは、自分の親が40で、相手の親も42くらい。若いおばあちゃん。ずっと「孫見たい、見たい」って。

Iさん 珍しいよな。でも。反対せえへんって。

Gさん 両方の親が若い時に。10代とか20代とかに産んでるから。

複 数 ああー。(略)

Dさん うち、お姉ちゃん生まれたん(母親が)20歳とかそんなもんやもん。

## (2)【妥協できない母親役割】

### ①《家族に頼れない子育てのプレッシャー》

両親が離婚後、主に祖母に育てられ、母親との関わりが少なかったというIさんは、双子の弟妹がおり「甘えることを知らへんから」と幼少時から母親に甘えることが少なかったと言います。母親については「親だけど親じゃない」と語り、育児をしていく上での不安を相談したこともありませんでした。そうした不安は夫にも理解されず、Iさんは、育児の相談相手が誰もいない状況でした。また、周囲から「若い(母親だ)からできないだろう」と言われることに反発し、さらに母親としてのプレッシャーも感じ、自分1人で育児をこな

そうと努力していました。その結果、自分のような思いはさせたくない、余計に子どもに手をかけてしまう状況にありました。

Iさん なんか、若くして結婚してて、周りも誰もおれへんやんか。そんで言える人もおれへんし。やっぱり「若いからできひんやろ」って言われるのがすごいイヤやった。  
(略)もう自分のプライドと、なんか責任感の。なんて言うん、重いやんか。子どもが産まれたら。そういうので、もうめっちゃ必死やった。

## ②《原家族における母親役割を踏襲する》

Kさんは、原家族における母親像に自分を近づけようと努力し、夫に自らの父親を投影し、自分の母親と同じように振る舞うことで家庭を維持しようとしていました。

Kさん うちの実家が、めっちゃ、ご飯ちゃんとせなお父さんがうるさかったから。旦那もそう思ってるかなって。

Kさんの夫自身は、食事についての要望があるわけではありません。しかし、Kさん自身が食事を気にかけ、料理に時間をかけていました。その結果、生後2ヵ月の子どもを抱えたKさんは、睡眠不足となり、疲れをためていました。若年出産したことのプレッシャーと、実母に近づかなければならないというプレッシャー、さらに日々の育児がKさんを追い詰めている様子が見られました。  
〈つづく〉

\*プライバシー保護のため、データを一部改変しています



# 10代の母という 生き方 ⑧

大川 聡子

## ★まえがき

前号（マガジン 17 号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親のもつ社会的不利な状況と、それに対峙するためのピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましては、マガジン 17 号をご参照ください。本号では、若年母親が出産後に抱える課題について記述していきます。

## 第3項 母親としての心理社会的課題の表面化

### (1) 【若年母親になることによって起きる摩擦】

#### ① 《夫との摩擦》

##### 〈子どもと関わろうとしない夫〉

母親達は若年で子どもを産んだことで「若い母親だから」と言われないために、育児に奮闘しています。しかし、父親はそこまで積極的に子どもに関わろうとはしません。そうした父親に対し、「父性がまだ育っていないから」、「男の人だから」と半ばあきらめているような発言がたびたび聞かれました。Iさんは夫への思いを自分の中に溜め、鬱状態になっていたこともあったといいます。

Iさん だから旦那も、子どもと遊んだこともないし、全然子どものこと知らなかったと思う。私も、あまり言うタイプじゃないから、ガーって言わんかってんけど。ふとした時に、1歳くらいになった時に、「何してんねやろ、私」みたいな感じでちょっとなってもうて。もう、鬱やってん。ずっと。なっててんけど、誰も言われへんかって、それを。

#### 〈友人と一緒に遊びたい夫〉

Dさんの夫は、友人達と一緒に女性と遊びたいという思いを持っていました。Dさん自身は、夫に「むちゃくちゃな遊び方はされたくない」という思いはあるのですが、夫のストレスも解消させてあげたいと言う思いもあり、友人達と遊びに行くことを止めた方が良いのか、黙認すべきか迷っていました。

Dさん だから、友達がまだ子どもとか、みんないてなくて、大学生とかそんなんやから。周りの友達とか遊んでるやん？大学の。それがうらやましいみたいで、一緒になって遊ぶから。なんか、しょうもないところでお金使ってきたりとか。なんか、みんな友達とか、女関係とかも激しいし。それに巻き込まれて、そういうしょうもないことされたらイヤやし。で、そういうので心配やから行かしたくないねんけど、でもどうやってストレス発散させてあげよかなって考えても、そんなん、友達しかないやんか？だから、どうしたらいいか分からんし。

#### 〈実母の子育てを理想とする夫〉

前号《原家族における母親役割を踏襲する》でも述べたように、原家族における母親に近づこうとするのは母親だけではありません。Cさんの夫も、自らの母親を理想とし、同じような母親になってほしいと妻に要望することで、夫婦間の葛藤が起こっていました。

Cさん (夫は)完璧求める人で。だから、自分の母親、マザコンじゃないと思うんだけど、自分の母親が理想像なわけ。家事をしながら3人兄弟おって、家事をしながら子育てをしてというのを見てたから。「それが理想や」って言ってきたから。「へえ」って。だから「私は私やから」って。「最終、なれたらええやろ？」って言って、文句言ったで、めっちゃ。

#### 〈完璧な家事を求める夫〉

Eさんの夫は、夕方6時には仕事を終え家に帰ってくるのですが、その時に家が少しでも散らかっていると機嫌が悪くなるため、1歳9ヵ月の子どもを抱えるEさんは、育児だけでなく家事にも追われていました。

Eさん 初めちょっと頑張りすぎたんかもしれへんけど。気合入れて。なんか初めらへんは仕事5時ぐらいに、5時にいつも終わってんやんか。絶対。ほんで、帰ってきたら6時とかやのに、それまでに風呂ちゃんとためて、部屋も全部ちゃんと片付けて。

Kさん ちょっと早いよな。しんどいな。

Eさん それで、むしろ完璧にできとって、みたいな求めてきたな。ほんで、部屋に3つなんか物が落ちとって、もう汚たって旦那の中ではなんねんやん。「この部屋は汚いんや」ってなって、めっちゃ機嫌悪い。

一方、夫の帰りが遅い F さんは夫の帰宅に合わせて家事をするため、就寝時間は夜の 2～3 時です。仕事をしており子どもを保育園に預けているため、朝も 7 時に起きなければならず、睡眠時間が極端に短くなっていました。F さんや E さんは、子どもだけでなく夫の生活リズムにも合わせなければならず、疲労が溜まりやすい生活を送っています。

## ②《義父母との摩擦》

### 〈若年出産は恥ずかしいと考える義母〉

若年母親は、家族からも問題視される場合もあります。問題視する側は義理の父母など、夫の家族である場合が多いです。B さんの場合、髪を茶色に染め、ノースリーブの服を着て、丈の短いスカートを穿くことも、姑からは「母親らしくない」と非難の対象になっていました。しかし、そのことで B さんが自身のスタイルを変えることはありませんでした。B さんは、夫の家族から、若くしての妊娠・出産が恥ずかしいものにとらえられていることを知っており、また、そう言った考えを持つことも当然であるかのように受け止めていました。

司 会 (姑さんは)何でそんなこと(嫁のことをよその子、と)言うんでしょうね？

B さん 恥ずかしいんやわ。「若いし、結婚して子どもなんか産んで、そんなんな、すぐ離婚して親に預けて遊びまわんねん」って、もともとと言われてて。もう結婚するって決まって、親とも話して全部決まって、もう結婚して臨月入った時に「あの時、おろしてくれたら良かったのに」ってもともとと言われてて。(略)結構、だからうるさい。向こうの親は、ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ。「髪の毛も茶色いし、もうそんなに茶色いし」とか、「ほっといて」みたいな。「そんな短いスカート穿いて」とか。

## ③《年長の母親との摩擦》

### 〈合わせなければならない年長の母親〉

子どもが保育所や幼稚園に通うようになった時、親として若年母親達が関わるのは、年上の母親であることが多く、「若い人はいない」といいます。そのため、「付き合うのがちょっとしんどい」という意見もありました。しかし、年上の母親と付き合い中で、少数派である自分達が「合わせなければならない存在」であると感じ、「しんどい」と感じながらも、臨機応変に対処しようとしています。

D さん 幼稚園とか行くやんか、子どもが仲良くなっても、親の歳が全然違うやんか。それでも、仲良くやっていけるんかな、みたいな。子ども同士は仲良くなっても、親同士が仲悪かって、仲悪いってというか、そんな歳全然違うやんか？ それってどうなんのやろな、みたいな。

複 数 ああー。

N さん それって、頑張らなあかんとこやな。

I さん うちらが合わせなあかんからな。絶対に。

#### ④《周囲との摩擦》

##### 〈根拠なく子どもを虐待していると思われる〉

母親たちは、若くして出産したことにより、周囲から「どうせ虐待しているんでしょ」、「子どもが子どもを産んでどうする」等、様々な偏見の視線を向けられています。Cさんはこうした中傷に、その場で反論し対処していました。

Cさん 「どうせ虐待してるんでしょ」、これは妊娠中じゃないけど、産まれてから言われた。

司 会 そうするのはだれが言う？

Cさん (子ども)とどっかで買い物してる時に言われた。知らんおばちゃんに。どついてもやろうかな思った。ほんまに。「何であんたに言われなあかんの?」とか思った。「どこをどう見てそういう風に言ってるんですか」って言うたったもん。「背中とか見ますか?」って言ったもんな。「全身見ていいですよ」って。

こうした中傷は後を絶ちません。さらに、周囲の人だけでなく、医療従事者も問題視する側になることもあります。

Bさんは受診の際、産婦人科医に「流産しやすいから気をつけて」と言われました。なぜかとBさんが問い直すと、夜遊びをしていると言ったわけでもないのに「夜遊び」と言われ、憤りを感じたそうです。Bさんはその医師を避けるようになり、そのことを同病院の助産師や看護師に話したところ、皆でその医師の診察を避けるよう配慮してくれたといいます。Bさんの場合は、他職種によりフォローすることができましたが、援助者が対象者を問題視することで、支援を受けにくい状況を作ってしまうことも考えられます。

##### 〈偏見視されることへの抵抗と諦め〉

Cさん こんなん(インタビュー)でさ、なんか10代で子ども産んだ人達に対する偏見な目とかなくなってくれたらええよな。

Bさん なくならへんて。

Cさん 無理やけど。でも、少しさあ、和らいでくれたらええと思うわ。やっぱ偏見な目で見るとか多いやんか。なんであんな人がとかさ。「やっぱり」って言われるのが一番悔しいもんな。(略)一部しか見てないんやと思うけど、一部でそういう風に悪いことがあるから、全てがそうって思われるからな。それが消えない限り。

Bさん 最近なんか慣れてきた。そういう目で見られることに。

Cさんは、このような若年母親に対する偏見を「なくなればいい」と考えていましたが、Bさんは「なくなるしない」ものであるという認識を持っており、偏見にも「慣れてきて」いました。またそういった偏見を持つ人々を、そんな見方しかできないのかと諦めており、反論や対抗することもしなくなっていました。

\*プライバシー保護のため、データを一部改変しています。

# 10代の母という 生き方 ⑨

大川 聡子

## ★まえがき

前々号（マガジン 17 号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴と、ピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について分析しています。対象者の概要・研究の背景につきましては、マガジン 17 号をご参照ください。本号では、若年母親が出産後に抱える課題にどう対峙していったのかを記述します。

## 第 4 項 母親としての自己認識形成と社会行動の変化

### (1) 【摩擦を解消するための戦略】

#### ① 《夫との摩擦を解消するための戦略》

若年母親は、主に家事や育児の分担を通じて夫との摩擦を起こしていますが、こうした摩擦を解消しようと、妻側から夫に働きかけることで、夫との関係を構築していました。同様の語りは多くみられ、妊娠中から出産後にかけて様々な時期において、お互いを理解し合い、夫との関係を深めていく過程がみられました。

〈夫の立場を推し量る〉

「さん 旦那に対して、「お前何もせん、何で何にもせえへん、何で分かってくれへんの、私の気持ち」って思ってる時点で、もう自分、自分やから。でも、それって結局自分がしんどいねん。相手の事思えてないから、それは。旦那の方が仕事大変やねんでって、やっぱり思うことは必要やな。思いやり。旦那の方が仕事も大変、遊んでるけど仕事大変やねんでって。」

Iさんは、結婚当初は自分の気持ちを分かってもらえない夫に腹を立てていたのですが、仕事をしている夫の立場を理解し、遊ぶことも仕方がない事と考え、夫に対する思いやりを持つことが必要であると考えていました。

〈手伝ってくれたことを褒める〉

Bさんは、自分だけでは家事も育児も全部できないと主張し、夫と2年間話し合いを続けました。そのことにより、自分のできる範囲を夫に理解してもらうことができ、部屋が散らかっていても、夫は何も言わずに片付けるようになったと言います。夫のする「片付け」が十分なものでなかったとしても、その姿を見るだけでBさんは気が楽になっており、夫を褒めることで、夫自身も喜んでいる様子が垣間見えます。このように、Bさんは夫を褒めたり、自分自身ができる範囲を主張することで、夫と家族内の役割を調整していました。

Bさん 「そんなんな、家のことにしてもそやし、そんなん全部私でけへん」っていうのを2年くらい言い続けて、「手伝ってくれなできひん」ってことも言い続けたら、なんか理解してくれたみたいで、あんまり何にも言われへんのやんか。家がぐっちゃぐちゃになってても、何にも言ってけえへんし。なんか、(夫が)ちょっと片付けてみたり。でも、旦那の片付け方は、その場所は片付いてんねんけど、その周りが汚れていくねんけど。でも、そんなん見てても「あ、やってくれてるんや」って思うだけで、気、楽になるし。(略)男の人って単純やなって思う。何かやった時に、「いやー、めっちゃきれいになった。ありがとう」って言うただけで。

Nさん めっちゃ喜ぶ。

Bさん めっちゃうれしそうな顔して(笑)。

## ②《義父母との摩擦を解消するための戦略》

〈夫に気づかれないように関係を調整する〉

Bさんは、義母宅に行く時は夫に同伴してもらい、夫から義母に意見してもらうように仕向けていました。夫は、妻がこうした調整役を果たしていることには気づいておらず、気づかない方が本人も楽だろう、とBさんはとらえていました。

Bさん 旦那がおる時に(義母宅に)「一緒に顔出しに行こう」っていうふうに言った。旦那がおったら、絶対何も言ってけえへん。旦那が怒るから。(略)。

司 会 ご主人が防波堤になってくれてる？

Bさん うん。でも、分かってない。あんまり。事の重大さっていうか。(略)旦那には気づかせないように、そうなってもらおうって思ってるのもあるし。気づいてしま

ったら、間に挟まれてるって言うんで、すごくしんどくなると思うから。気づかんうちにそうしておけば、Bも楽やし、旦那も楽だなんて思う。

また、Cさんも義母との折り合いの悪さについてこう語っていました。

Cさん（義父の）一周忌の時に、「恥ずかしいから来るな」言われた。私。（略）一周忌がお盆にあって、その時に私の姉貴とおかんは来てもいいけど、私は「腹がでかいから、恥ずかしいから来ないで」って言われた。

Cさんはこの件に関して憤慨し、結局義父の一周忌にCさんの家族はだれも参加することとはなかったそうです。こうした、若年出産することをめぐる夫の家族との葛藤が、家族間の関係にも溝を作っています。

### ③《年長の母親との摩擦を解消するための戦略》

〈保育所の役員を買って出る〉

Nさんは、「自分達が(年上の親達に)合わせなければならない」ことを認識しており、その解決策として「(保育所の)役員になること」を挙げていました。役員として参加することで保育所の母親と関係を構築し、「若い母親」でない、自分自身を分かってもらおうと努力していました。

Nさん（保育所の）役員とかやってたら、結構強い。（略）私、なめられたらイヤやから、結構参加するようにはしてんのやんか。仕事終わって連れていっても、「お母さん、すいません」とか、普通に言ってくれるから。「若いのに頑張ってるねんな」みたいな感じで言ってくれるから。極力参加はする。そういう、行事ごとみたいな。参加せえへんかったら「やっぱ、若いから」って言われるし。（略）役員は強い。ほんで、役員真面目にしてたら、結構良く思ってくれる。

Dさん しっかりしてる。

また、DさんはNさんのこれらの発言に対し、とても感心したとインタビュー後にスタッフに伝えていました。グループはこのように、若年母親としての生き方を学ぶ場にもなっていました。

### (2)【将来を見越した生活設計】

出産したことにより「生活が180度変わった」と述べていたメンバーがいるように、夜型から昼型の生活になった、子どもがいない友人と遊ばなくなった等、母親たちの生活リズムは著しく変化しています。「今までやってきたことが恥ずかしいこととか、分かって

きた」と言い、自転車に乗りながら煙草を吸わなくなったことや、「子ども連れてたまっとったら痛い」と言い、コンビニエンスストアの前で座って話をしなくなったことなど、行動面の変化を挙げている人もいました。また、お金の大事さや常識を学んだなど、価値観の変化を挙げている人もいます。さらに、「今の生活では2人目は考えられない」と言い、将来を見据えた家族計画を行っている母親もいました。子どもを出産し、母親となったことが、こうした行動面の変化をもたらしたと考えられます。

### ①《社会性を身につける》

〈家事ができるようになった〉

それまでは全く家事をしなかったIさんは、出産を機に料理をするようになったといいます。

Iさん 母親になって変わったと思うこと。料理ができた。

司 会 それまではあんまりやらなかった？

Iさん 全く家事せえへんかった。

〈お金の大事さが分かる〉

出産後は無駄遣いをしなくなったという母親が複数いました。

〈生活リズムを整える〉

出産前は丸一日寝ていたが、睡眠時間が減ったと述べている母親もいました。

### ②《生活基盤を整える》

インタビューにおいて、ホームヘルパーの資格を取りたいという声が複数聞かれました。専門職の中でも比較的取得が容易なこと、身近にホームヘルパーの有資格者が多いことが、関心の高さにつながっていると考えられました。

〈ホームヘルパーへの高い関心〉

司 会 今後こんな資格が欲しいとか。

Lさん ああ、ヘルパー。

Bさん ヘルパー取んのやったら、介護福祉士まで取ったほうが絶対いいと思う。

Cさん でも、ヘルパー持ってたら、とりあえず働けるしな。で、とってくれる。けど、持ってる人が今多いから。



〈利用できる公的支援を駆使する〉

Bさんは、公的支援を自分で全て事前に調べてから窓口に行き、公的支援を有効に利用できるように交渉していました。

〈保証がないための生活設計〉

Bさんは、夫の仕事に保障がないことから、若い時の生活設計は必須であると考えていました。現在は賃貸住宅に住んでいますが、今後は家を購入することを考えています。Bさんは、家を購入するまでにお金の掛かることは先にすませてしまいたいと考え、実行していました。

Bさん 若いうちに(生活設計)やっとかんと、旦那の仕事が何にも保障がないから。家とか買っとかんと。(略)やっぱ家ぐらいあったら固定資産税だけで済むから。後々ローン払い終わったら。固定資産税も年間大体12万ぐらいやから、月1万って考えたら、やっぱどの家借りるよりも結局は安いしとか思って。だから考えるけど、難しい。

司 会 すごい堅実ですね。

Bさん 考えな、やっていかれへんし。

### (3)【母親役割を重視した友人との関わり】

グループにおける若年母親は、新しく来たメンバーに積極的に声をかけ、友人関係を築こうとしています。新しいメンバーも、初めは若年母親特有の派手な髪形や服装に圧倒されるようですが、何度か会ううちにうちとけ、グループ外でも交流を持つようになっていきます。

#### ①《友人の条件》

〈家族のペースを崩さず付き合える人〉

母親達は、交友関係についてしっかりと自身の判断基準を持っており、「世間知らずな子」や「常識のない子」とは付き合えないと言います。母親達は、夫と子どものいる家庭を重視しており、家族のペースを崩すまでの交友関係は求めません。そして母親達の中でも、同じような生活リズムを持つ母親と親しくなる傾向があります。

Bさんは、グループの中でもCさんなど気が合う友人と、トラブルの際に助け合うなど深く交流していました。

司 会 友達とかは？

Bさん 幅広く作るのめんどくさいし。人の好き嫌いが元々激しいのもあるけど。あかんって思ったらあかんし。友達増やしたら、その分合わせなあかんところって

あるやん。それが自分の生活基準の中で合わせれるんならいい。生活崩してまで合わせなあかん時って出てきそうで嫌や。自分の生活は自分で崩したくないし、Bが崩すってことは、子どもやったり旦那やったり、やっぱり迷惑かかるから。

〈社会性のない友人との決別〉

出産を経て多くの母親達が「独身の友人は常識(社会性)がない」ことを指摘し、独身の友人達とは考え方が変わったといいます。Gさんは、「まだ怒ってキレル」周りの友人に対し、我慢がないと評していました。

Iさん 普通の独身の子らの考えが、なんか…。

Dさん やっぱり、ちょっと違うな。

司 会 どんなところが違うと思います？

Nさん お金のこととか、社会的なこと。

Nさん、Iさん 常識。

司 会 常識がないなあと思う？

Nさん 思うことは多々ある。

Gさん すぐまだ、怒ってキレたりする。しょうもないことでも。我慢がないっていう。周りの友達。

また、生活時間帯の変化についての語りも多くみられました。母親たちは「独身の友人とは時間帯が合わない」、「夜型の子ばかりで、ついて行かれない」と言います。独身の友人達側も気遣っている様子が見られますが、生活形態が異なってしまったため距離を置かざるを得ない状況になっています。

②《グループ初参加の印象》

〈一見入りにくい気さくなメンバー〉

新しく入ったメンバーは、グループ参加当初は、若者らしい髪形や服装のメンバーに圧倒された様子でした。しかし、メンバーは新メンバーに積極的に声をかけ連絡先を聞いたり、グループ終了後にメンバーが行くファストフード店やカラオケボックスに誘ったりしています。こうしたつながりを通して、新メンバーも徐々にグループになじんでいき、グループ外でも相談し合える仲間作りができていました。

Kさん なんか、(メンバーは)自分の思ってるお母さんっていうイメージと全然違うかったから。

Eさん しかも、そんな若いおかんを集団で見ることもとかないもん。あんまり。

Kさん 見たことない。だから、「え、なんでこんなみんな普通やん」と思って。

Fさん あと、みんなグループみたいになって何か入りづらかった。みんな「おう」みたいな感じで。(笑)

Kさん そうそう。そうそう。そんなんやった。

Aさん でも、気さくや。

### ③《仲間が支える母親としての成長》

〈友達の輪が広がる〉

NさんとIさんは中学校の時に同じ運動部に所属しており、出産前から友人関係にありました。NさんとIさん以外にも、グループに来る前から知り合いだったり、夫同士が同級生や兄弟であったりと、地縁によるつながりが深く、友人も容易に作る事ができている人が多い様子でした。さらに、グループ「B」に参加することで、母親同士の友人の輪をさらに広げることができていました。

Nさん 産んだ時に、(Iさんとは)仲良かったから、中学の時から。だから、言うたら1人は絶対協力っていうか、Iが協力してくれたから。安心はできて。3ヵ月の時点でここ(グループ)に呼んでもらってたから、そこでママ友達がバって広がったから。それが、すごい助かったかな。ママ友がすぐできた。

〈親でなく友達に相談する〉

グループ内外でも友人の多いAさんは、親に本音や嫌なことは相談したくないと言い、相談する相手は友人と決めています。このことから、トラブルがあれば親よりも友人を頼りにしている様子がうかがえました。

Aさん 精神的しんどい時は友達。なんか、親には本音っていうか、嫌なこととか言われへんくない？(略)自分が悩み抱えていることとかは、親には言いたくない。そういうのは友達。だから、自分の中で使い分けてる。それは。

〈育児は自己流で行う〉

母親達は育児に困難を感じても、育児書には頼らず、自分の親に聞くこともありません。まず友人達に聞くか、自分自身で解決しようと努力します。こうした対応をとる背景に、親との関係が希薄であったことも一因としてあるのですが、若い母親同士の横のつながりが深く、気軽に相談できる友達が周囲にいることも、理由の一つと考えられました。

Bさん とりあえず(育児は)自己流やもん、みんな常に。

Cさん 本当に分かんなかったら、周りに聞くやろ。親に聞いても、親のころとやっぱり考え方は違うし。

Bさん 子ども一人一人バラバラやから、あんまり資料とか見たところで、それのとおりにならへんかったら、逆に不安になったり、ムカついたりするから。とりあえず自分なりにやってみる。

Cさん 分からなかったら。

Bさん とりあえずあきらめる。無理やったら。「もう、いいわ。どうにかなるやろ」って思うから。

〈自分らしい母親像を構築する〉

司 会 こんなグループあったら、友達とかは誘う？

Kさん 最初、妊娠分かった時って、「しっかりせな」って思うやんか。「大人にならな」って、「お母さんになるんやし」と思って、親とか話聞いたり、勉強したりしたら、「こんなんではあかんのや」って、「自分の今までのんじゃあかんのや」と思って、改正しようかなって思っていた時にここ(グループ「B」)に来たから。「こんなんでも大丈夫」やっていう余裕。親を見てるから。親みたいにならなあかんと思ってるから。でも、大丈夫やった。

Kさんの場合、自らの母親を理想像とし「しっかりした」母親になろうと話を聞き、「勉強」していました。しかし、グループにおいて、若年出産した母親の接し方を見ることで、完璧に家事や育児をこなす母親の理想像を目指すのではなく、これまでの生活の延長線上で、徐々に自分らしく母親になっていけばよいことを学んでいました。このように、グループにおいて他の母親の姿を見ることが、自分らしい母親像を構築する機会となっていました。

#### (4)【子育てを通じた自己評価の向上】

若年出産した母親は、母親として日々を送っていくことや、友人達との関わりを通して、母親であることに自信を持つことができていました。

〈母として子どもを守るべき存在〉

Bさんは、出産したことで意識が変わり、自分の楽しみよりも子どもを中心に考え、母親として子どもを守ろうという意識が芽生えていました。

Bさん 若いころは、自分がよかったらそれでいいとか、今が楽しければそれでいいとか、そんなん思って無茶とかしとったけど、母親になって実際この子が産まれて、やっぱり守らなきゃっていう意識が出てくるから。

〈逃げ出せない育児を経験して強くなる〉

Nさん、Iさんは子どもを産んだことで、人生が変わったと言い、「しんどいこと」に向き合うことができるようになったと言います。子どもを育てるという経験が、母親たちの姿勢を変える契機となったと言えるでしょう。

司 会 (育児は)投げ出されへんもんね。誰も受け止めてくれへん。親代わりしてくれる人いないもんね。

Nさん そやな。だから、しんどいことから、すぐ逃げてたけど。

Iさん 逃げられへんくなった。

Nさん 逃げられへんから。もう苦しんでも。育てていかなあかんていう。だから強くなれるんかもしれへんけどな。

〈自らの生活基盤を整えたことに自信を持つ〉

Bさんは、自分なりの生活基盤を持つことで、子育てに自信を持つことができ、若年出産したことに対する、周囲の様々な反応に慣れてきたと言います。

Bさん 今、子どもが2人になって、まともに生活やってきてるって。別に誰かにお金借りてるわけでもないし、助けてもらってやってきてるわけでもない。そら、こちょこちょ助けてもらったりしてる部分はあるけど、自分らで生活の基礎つくって、自分らなりの子育てしてやっていってんねんから、別に恥ずかしいことしてないっていう、自分らに自信でできたから。

〈母親になることで自己肯定できた〉

Bさんは、出産するまで自分のことは「どうでもよかった」と言いますが、出産し母親となる中で、自分自身を大事にしなければ育児ができないと考え、自分自身を大事にしようと思うようになったそうです。Bさんにとって母親になることは、自分を肯定する機会となっていました。

Bさん 自分のことがすごい大事になった。B自身が。昔は別にどうってことってなかったんけど。自分のことなんかどうでもいいって思ってたけど、そういうわけにはいかんくなってきたし。なんか、自分自身大事にしないと、子どものことも見られへんと思うから。すごい自分が大事やなって思えるようになったのは子ども産んでからやし、この子らのおかげかなって思う。

司 会 それまではあんまり自分のこと、まあ、「自分なんて」みたいな？

Bさん うん。どうでもよかったもん。別に。

\*プライバシー保護のため、データを一部改変しています。

# 10代の母という 生き方 ⑩

大川 聡子

## ★まえがき

マガジン 17～19号で、若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴と、ピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について分析しています。対象者の概要・研究の背景につきましては、マガジン 17号をご参照ください。本号では、インタビューデータを基にした考察について記述します。

本調査における若年母親達は〈友達とつるむ方が楽しい〉ことや〈レベルの低いクラスメイトと合わない〉こと、さらに〈妊娠したことによる退学〉をしているため、教育到達度が低い人が多くみられました。また原家族の経済状態が不安定であるため、〈アルバイトで家計を助け〉たり、〈学費は自分で賄う〉など、10代にして【金銭的自立を迫られる】状況にある母親達もいました。【学校からの離脱】は、本人が学校に通う意義を見出せなかったことだけでなく、原家族の就業状態の不安定さから、子どもの教育に重きを置かない、あるいは置くことができない環境にあるといった2つの要因により起こっていると考えられます。

若年出産することの問題点として、「母親としての自覚に欠けている」ことを指摘する論文は多数見られます(片桐,2001 前川, 2001)。しかし実際は、若年母親は【妥協できない母親役割】を感じ、《家族に頼れない子育てのプレッシャー》や《原家族における母親役割を踏襲する》ことにより、母親としてあるべき姿を目指して、日々の育児を行っていました。

【若年母親になることによって起きる摩擦】では、周囲の人々だけでなく、夫や義父母との摩擦についても語られました。〈子どもと関わろうとしない夫〉、〈友人と一緒に遊びたい夫〉では、父親役割を受け入れられず、子どもがいなかった頃の生活形態を維持しようとする夫の思惑が読み取れます。夫は原家族の母親役割を理想とし、性別役割分業意識も強く、家事や育児を分担する父親は多くありませんでした。こうした夫に対し、若年

母親達は《夫との摩擦を解消するための戦略》である、〈夫の立場を推し量る〉ことや、〈手伝ってくれたことを褒める〉ことで、家事や育児を少しでも分担できるよう調整していました。《義父母との摩擦》では、出産に必ずしも同意していなかった義父母と、出産後も関係構築がとりにくい様子が見えられました。それでも〈夫に気付かれないように関係を調整する〉ことを通して、母親自身は関係がうまく取れなくとも、それが夫や子ども達に波及することがないように配慮していました。小川(2009)は、産後1～4ヵ月の17～18歳の若年母親のインタビューから、パートナーや義母との食い違いに「鬱積した感情を発散する」方略パターンをとっているとしています。今回のインタビューでは若年母親が夫や義父母との関係を調整しようとする努力をしていることがわかりました。このことから、子どもの成長や母親としての経験を積み重ねることで、母親の他者への関係構築の方法が変化していることが読み取れます。また、年長の母親に対しては〈合わせなければならない〉と感じていますが、〈保育所の役員を買って出る〉ことで、他の母親に承認され、いわゆる「若年母親」ではなく、一人の母親として他者との関係構築をしていることが示されました。このように、10代で出産することにより若年母親は様々な葛藤を抱えますが、関係を調整したり、理解してもらうための努力をすることで、母親として家族や地域社会の人々と関係を再構築する事に成功していました。周囲の反応も〈根拠なく子どもを虐待していると思われる〉から「若いのに頑張ってるねん」という評価に変わっていました。

出産前の社会的不利な要因を少しでも緩和するために、若年母親は《社会性を身につけ》、《生活基盤を整え》ていました。〈保証がないための生活設計〉にあるように、夫の雇用が不安定なため、将来を見越してより出費を少なく抑えるための生活設計を構築している母親もいました。一般的なライフサイクルでは、社会性を身につけ、生活基盤を整えてから結婚・出産となりますが、若年母親はこうしたライフサイクルと順序が異なります。しかし母親となったことで、子どもの成長という時間軸に合わせて、母親自身も成長している様子が見えられました。田間(2001)は、母性を内面化することにより、統制を主体的に受け入れやすいと述べていますが、青年期である若年母親となった彼女達は、他者から承認されることにより母親としての自己を形成していく過程にありました。そのため、他者から母親とみなされるように責任を持って行動することで、社会化が促進されていました。母親達は、母性という統制を受けて行動を変化させたのではなく、母親として生きていくために必要な社会化を試み、成功していると考えられます。もし彼女達が母親となることを選択しなければ、生活も交友関係もこれまで通りのものだったでしょうし、自らの生活基盤を整える必要も、他者との関係調整に苦心する必要もなかったでしょう。しかし、彼女達は自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができていました。彼女達は母性という統制を、能動的に自身の社会化のために利用していると考えられました。

本調査は若年母親のピアグループ参加者を対象に実施したことから、若年母親にとってのピアグループの役割についての内容も抽出されました。若年母親は出産し母親となるこ

とで社会性を重んじた行動をとるようになり、家族を第一に考えていました。〈社会性のない友人との決別〉では、旧友達の常識のなさ、「すぐ怒ってキレたりする」といった社会性のなさを目の当たりにし、自分のこれまでの行動を省みて反省的に自己点検するようになります。そして〈家族のペースを崩さず付き合える人〉といった、生活リズムや異性関係で家族の生活を乱さない人、母親として付き合う友人にふさわしい人に交友関係を絞り、友人を取捨選択していました。このような友人関係の再構築を経て、若年母親が付き合うことが多かったのが、年齢の近い母親友達でした。

若年母親達はピアグループに参加することで〈友人の輪を広げる〉ことや、〈自分らしい母親像を構築する〉ことができていました。インタビュー場面でも、より年長の子もを持つ母親が積極的に発言し、年少の子もを持つ母親に教える場面が見られました。こうした同世代の母親同士の関わりを通して、母親としての生き方を教わり、〈自分らしい母親像を構築する〉ことができていました。母親達は、社会的不利を抱えつつも悩みを相談し、緊急時にはお互いに助け合ったり、自分の家で余った衣料品をメンバーで分け合ったりなど、互いに結び付き支え合っていました。〈家族に頼れない子育てのプレッシャー〉を抱え、〈親でなく友達に相談する〉といったように、若年母親には、原家族が支えきれないプレッシャーやしんどさを持って子育てをしている人も多くいます。そうした家族に回収しきれない育児を支えるのが、同世代の友人達でした。

グループ「B」は若年母親がお互いに助け合い、地域社会に溶け込むための社会性を促す場としての役割を果たしています。若年出産する母親は全出産数の 1.26%とごく少数であり、母親同士が集まった際に同年代の友人を作ることは非常に困難な状況です。そのため保育所等地域社会においては、自らの居場所を得るのに努力を必要としますが、グループ「B」はありのままの 10 代の姿を見られる/見せられる場となっていました。Coletta (1983) は、若年出産した母親に対し調査を行った結果、地域の社会支援を受けている人は、抑うつ症状が低い人が多かったといえます。こうした支援とつながることで、不安を解消していくことも可能となるでしょう。

このグループは現在こそ毎月 10 人前後の人数が集まり、若年母親同士やボランティアなど地域の住民との交流の場となっていますが、初めからグループ活動が軌道に乗ったわけではありません。援助者自身どう支援してよいか分からなかった時に、グループで支援することを考えたことが、成功に繋がっていると考えられます。グループにおける支援者の関わりとして、野口(2005)は、専門家はクライアントの生きる世界について「無知」であり、クライアントこそが専門家である。その世界をクライアントに教えてもらうという姿勢が、「無知の姿勢」であると述べています。グループにおいても、専門家が一方的に指導するのではなく、親同士の仲間作りを進めていったことで、彼女らが安心できる場を作り出すことができていました。こうした育児支援や同年代の友人との交流は、現在一部の病院や地域で限定的に行なわれているのみですが、同年代の母親同士が交流できる場や 10 代という世代の特性を生かした育児支援は、どの地域においても必要でしょう。



こうした【母親役割を重視した友人との関わり】や、【将来を見越した生活設計】といった若年母親自身の努力を通して、【子育てを通した自己評価の向上】が可能になっていました。Smithbattle(1998)も、責任感のある親になろうとする母親の努力がアイデンティティの意識を変容させ、未来への可能性を意識付けること、さらに、母親となることが無力感、葛藤、及び挫折感の悪化を避けることができるとしています。若年母親はこれまでの家庭生活や学校生活で培えなかった自己肯定感を、母親となることで持つことができていると考えられました。

しかし、母親にならないければ自己肯定感が得られない、自信が持てないという若年母親の社会的に不利な要因は、個人の努力で緩和できるものではなく、このような環境を作り上げた社会に投げ返される問題であると考えます。若年出産した母親は出産後も教育到達度の低さや、夫の雇用の不安定さなど社会的に不利な状況の中で育児をしていくことになります。こうした状況は、母親がどんなに生活基盤を整えるための努力をしても容易に改善できるものではありません。

若年で結婚した夫婦の離婚率は高く、離婚により、若年母親が抱える社会的に不利な状況に、父親の不在による育児の負担及び経済的困難が付加します。現状では母子世帯となった際、要件を満たせば生活保護を受けることができ、生活保護を受ける母子世帯には若年出産した母親が多い(道中,2009)とされています。しかし、生活保護受給には扶養義務調査を受けたり資産を売却する必要があるなどの要件があり(杉本ら,2006)、受給者に対するスティグマも科せられる(菊池, 2003)ことになります。何より、彼女達のニーズは生活保護で事足りるものではありません。《家族に頼れない子育てのプレッシャー》で示したように、甘えることのできない家族の下で育ち、夫と新しい家庭を築きたいと考え出産した若年母親が、夫とも関係を築くことができなかった時の孤独感は、どれほどのものでしょうか。彼女達が、母親として生きるために自分自身を変容させ、社会と関係を築くための努力をしているのであれば、社会の側も母親とつながる努力をする必要があり、こうしたつながりを構築するための「場」を設定することが必要であると考えます。

本研究の限界は、グループ「B」という「場」を持った母親達に調査対象が限定されていることです。グループ「B」は産婦人科の窓口にポスターを貼ったり、保健師の家庭訪問において周知し、参加を促しています。そのため、グループ「B」に参加する人々は、若年母親の中でも、友人を作りたいといった積極的な人が多いです。このため、インタビューを行った母親達は、友人ができず地域で孤立しているといった状況ではなく、地域で同世代の友人を作ることができ、社会サービスの知識もあり活用することができていました。しかし、こうしたグループに参加することが難しく、友人を作ることができずに孤立する母親もいると考えられます。本調査では明らかになりませんでした。こうした立場にある若年母親にも視野を広げていく必要があります。

## おわりに

本章では、若年母親の語りから出産後の社会的不利な状況に若年母親自身がどのように対峙しているかを示しました。若年母親はグループ「B」において交友関係を広げ、周囲の人々との関係性を再構築することができています。こうした「場」を求める若年母親を、地域住民はどのように認識し、どのような関わりをしているか、次号以降で記述します。

## ★引用文献

Colletta N, C., 1983, At Risk for Depression: A Study of Young Mothers, *The Journal of Genetic Psychology*, 142, pp301-310.

片桐清一, 2001, 若年妊娠の社会的背景とその支援, *周産期医学*, 31(6), pp745-748.

菊池英明, 2003, 生活保護における「母子世帯」施策の変遷—戦後補償と必要即応原則, *社会福祉学*, pp23-32.

前川喜平, 2001, 養育機能不全(親準備性の不足)と子育て支援, *周産期医学*, 31(6), pp817-825.

道中隆, 2009, 生活保護と日本型ワーキングプア 貧困の固定化と世代間継承, ミネルヴァ書房.

野口裕二, 2005, ナラティブの臨床社会学, 勁草書房.

小川久喜子, 2009, 若年妊婦のストレスフルライフイベントにおける対処法略パターンとその変化, *日本保健科学学会誌*, 12(2), pp77-90.

Smithbattle L., 1998, adolescent mothers four years later: narratives of the self and visions of the future, *Advance in Nursing Science*, 20(3), pp36-49.

杉本正, 道中隆, 2006, 生活保護制度の基礎知識, 小林出版.

田間泰子, 2001, 母性愛という制度, 勁草書房.

# 10代の母という 生き方 ⑪

大川 聡子

## ★まえがき

マガジン 14～19号で、若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。今号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしていきたいと思います。

若年母親は、どのような社会的要因の下に出産に至るのでしょうか。14～19号に掲載した若年母親に対するインタビューから、Bongaarts(1982)の図を参考に、若年母親が出産に至るまでの社会的要因・中間要因について[図5]の通り整理しました。

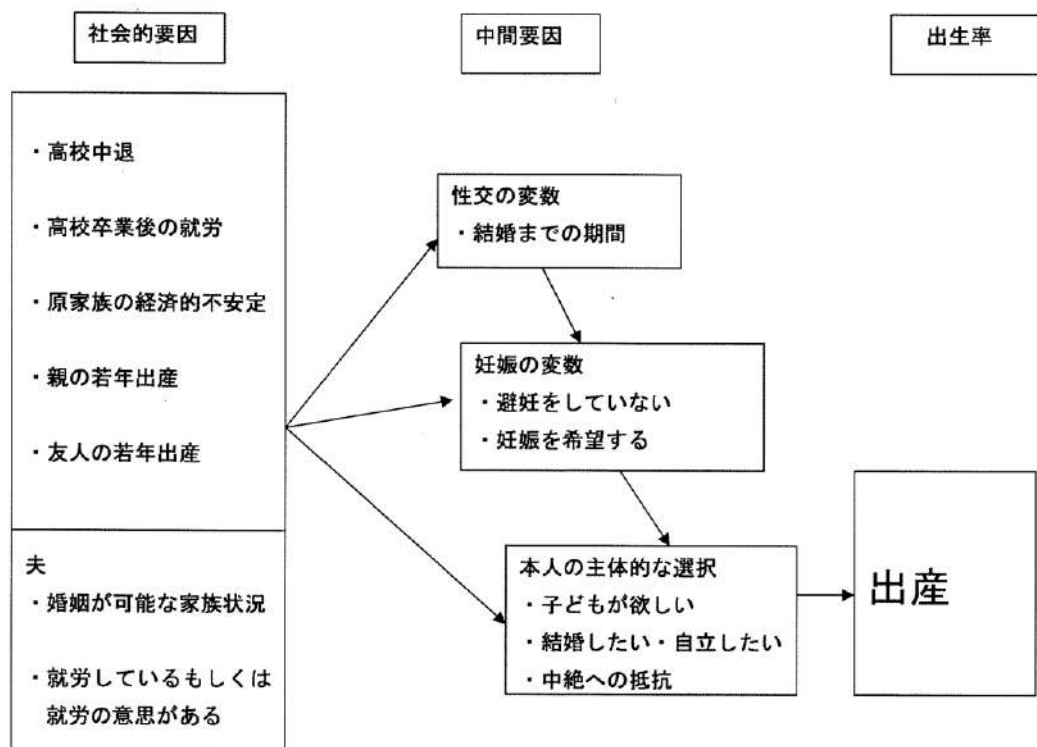


図5 出生率に影響を与える要因

先行研究から、若年母親は経済的問題、教育の中断、夫との関係構築の困難さ、祖父母との同居に伴う問題など、多くの問題を抱えていました。インタビュー結果から、高校中退や経済的に不安定な家庭環境により、中学・高校在学時、もしくは進学せず早期に労働市場に参入していること、また親や友人等の身近な人が若年出産している事が、出産への選択に影響を及ぼしていると考えられます。さらに、夫自身が婚姻可能な家族環境である事、就労している、もしくは就労する意欲があり金銭的に自立をしている事も、出産の選択に影響を及ぼしていると考えられます。妊娠については、避妊しなかった事、または妊娠を希望する事が影響していると考えられます。今回インタビューの内容から「本人の主体的な選択」と名付けた項目を新たに付け加えました。この内容として、子どもが欲しいという思い、結婚したい、または自立したいという思い、中絶への抵抗があると考えました。これらの要因が、若年母親が出産に至る過程において複層的に影響し合っています。

インタビューに答えた若年母親のうち、高校中退もしくは中学卒業の学歴を持つ人は、24名中19人であり、7割を超えています。小川(2009)の調査では10人中7人が中学卒業もしくは高校中退であったため、ほぼ同じ割合です。学齢期の妊娠であっても、母親は出産と学業の継続に葛藤することなく、強い意志を持って出産を選択していました。こうした背景に原家族の貧困状況が垣間見られます。高校の学費も自分で納め、学生時代からアルバイトを通して家計を支えている母親もいました。こうした状況の下では、強い学習への意欲を持たなければ高校に在学し続けることは困難であったでしょう。一方で、高校生でありながらも金銭的に自立した環境におかれていたことは、出産を実現しやすい環境を作っていたとも考えられます。

高校中退に至るまでの教師の関わり方も様々で、学校に来ず友人と遊んでいる生徒に何度も学校に誘う教師もいれば、本人が在学したいと願っても校則違反のためあっさりと退学を宣告されていることもありました。小・中学校での学業達成が困難であった様子も見受けられます。中学までの基礎学力がなければ、高校へ行く意欲を見出せなくなることは必然です。荻谷(2001)が高校生を対象に行なった調査によれば、「意欲」は社会階層によって差が見られ、意欲や、意欲の源泉とされる興味・関心は、各人を取り巻く生育環境やその変化によって影響を受けるといいます。さらに、「相対的に低い階層出身者達にとって、将来のことを考えることをやめ、あくせく勉強しても仕方がないと思うことで高められた〈自信〉は、勉強からの離脱という実際の行動に基づいている。そして勉強から〈降りる〉ことによって自己を肯定できる低い階層の子ども達を〈降りずに〉いさせることはかえって彼らから自己の有能感を奪うことになりかねない」としています。若年母親の中には、経済的に困難な家族の下で、家計を助けるためのアルバイトに励みながら高校に通っている母親もいました。こうした中では、「勉強」は母親達の自己を肯定するものに成り得ず、勉強から〈降り〉、妊娠・出産して母親になることが、自己の有能感を高めること、すなわち自己肯定感を高めることにつながったのではないのでしょうか。

若年出産は、若者を取り巻く社会問題とも強く関連しています。1955年～2009年の人工

妊娠中絶率、出生率、高校中退率(左軸)、高卒内定者の就職率(右軸)を[図 6]に示しました。10代の人工妊娠中絶率、出生率両方とも急激に上昇した2000年は、高校卒業後の就職内定率が90%を切り、高校中退率も上昇しています。高卒者の就職内定率と10代の人工妊娠中絶率は、1990年～2005年にかけて、逆のカーブを描いているように見えます。経済状況が悪く、若者に将来への展望が見えないことも、若年妊娠・出産の要因の一因となっていると考えられます。

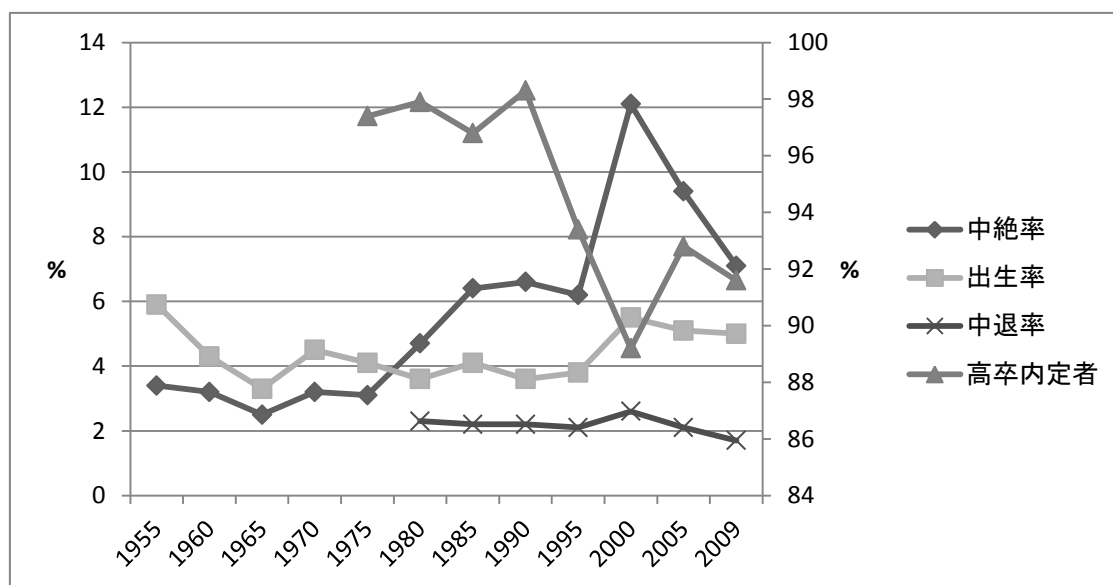


図6 10代の人工妊娠中絶実施率、出生率、高校中退率及び高卒就職内定者数の推移

他にも、高い高校進学率に押されて入学するも、学業への意欲が乏しく、クラスメイトとの関係が築きにくく高校を中退するといった高校中退問題、親世代からの貧困の連鎖、ステップファミリー問題など、若年母親は多くの社会問題が絡み合う環境の中で、「主体的」に出産を選択していました。その結果、社会的に不利な状況が再生産されています。Francesconi(2008)は、「若年母親は社会経済的不利が世代間連鎖する原因であるとし、若年母親を減少させる事により子どもの貧困を根絶させることはなく、また貧困状態にある親の下での子どもの成長に効果ももたらさない。社会的に不利な状況にある子ども達の生存戦略は、人生における機会を拡大することである」としています。若年母親の機会の平等を保障するためには、社会的不利の連鎖が断ち切れるような、貧困や住環境の不備、経済的困難を解消するための環境を整えていくことが必要です。

一方、アメリカ医学研究所(Institute of medicine)は、人々の行動は家族や友人、環境要因等、異なる範囲にある複数の要素の相互作用を受けているという、Bronfenbrenner(1979)のエコロジカルモデルを参考に広い基盤を持ったエコロジカルアプローチを、健康状態の向上のために採用するよう勧めています。本稿では、若年母親の育児に関連する要因について、このモデルを参考にし、インタビュー内容から明らかになった若年母親の育児に関

連する要因について、個人・家族・友人・環境のそれぞれの項目ごとに[図 7]にまとめました。

若年母親の育児を困難にする「個人」的要因については、修学年数の短さ、出産への後悔、子育てへのプレッシャー、支援の受け入れにくさが挙げられました。「家族」では、夫の不安定就労、父親役割の取れない夫、離婚が挙げられました。「友人」では、育児リスクとなる要因はなく、「環境」では、経済的困難、住環境の不備、選べない仕事、周囲との軋轢が挙げられました。若年母親の育児を困難にする要因は、個人や家族だけでなく、出産前から継続している社会的に不利な環境に負うところも大きいです。

一方で、中間要因として「家族」では親の若年出産、「友人」では、友人の若年出産が挙げられました。育児を肯定する要因として、「個人」では、活発な性格、旺盛な自立心、将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上が挙げられました。「家族」では家族の支援、「友人」では社会性のない友人との決別、友人の応援、ピアグループ、「環境」では職場の理解、若年母親を理解し継続的に関わる支援者が挙げられました。若年母親は「個人」や「環境」に「育児リスクとなる要因」を多数持っています、「個人」において、活発な性格や将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上など「育児を肯定的にする要因」を多く持っています。また「友人」からも育児を肯定する要因を多く得られています。こうした若年母親の長所を生かして、育児リスクとなる要因を排除し、育児を行ないやすい環境を作るための社会資源の整備について検討していく必要があるでしょう。

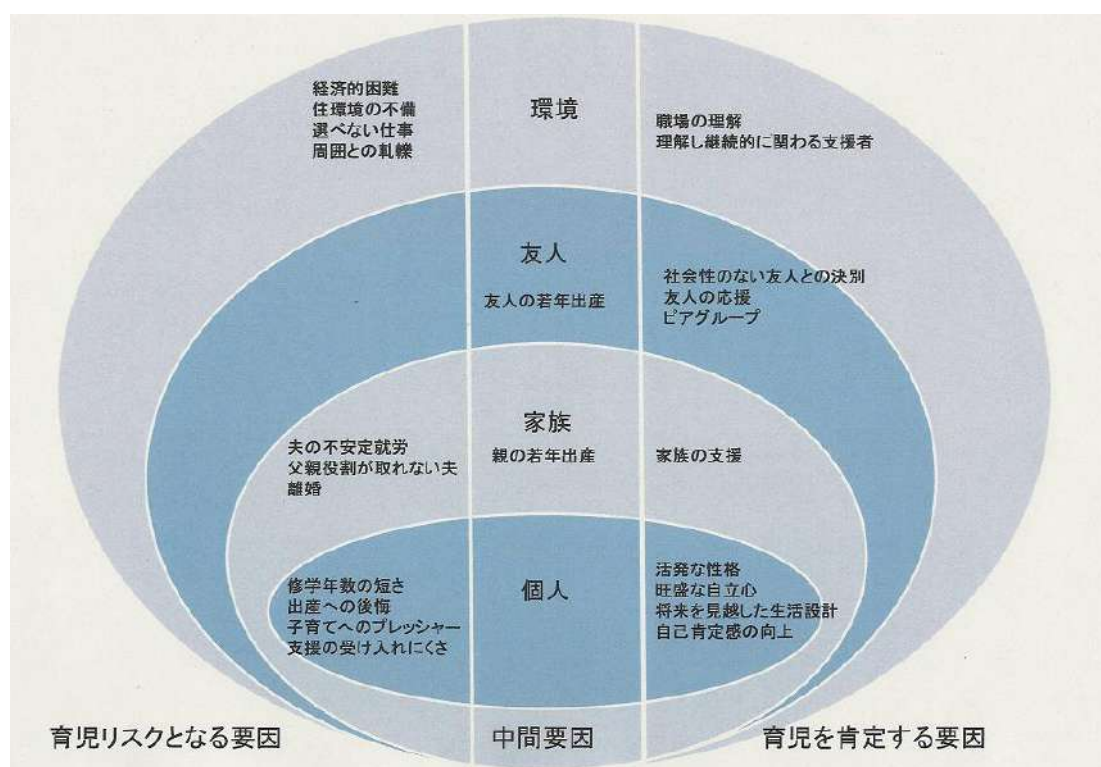


図 7 若年母親の育児に関連するエコロジカルモデル

ここまで、若年出産をもたらす社会的要因について述べました。西田(2009)は社会的不利な条件にある家庭の多い地域での調査において、「世間の狭さ」、「モデルの限定」から、排除の連関としての大人への移行過程が進んでいることを指摘しています。若年出産という「選択」は、これまでの生育暦や周囲の文化に影響を受けた轍をたどっているのに過ぎないのでしょうか。若年母親は「育児を肯定する要因」を多く持っており、インタビューでは、〈子どもが欲しかった〉と若年での出産を主体的に選択している母親もいました。彼女たちの出産したいという思いを支持したものは何だったのでしょうか。次号、若年母親が出産に至る径路を見ることで明らかにしていきます。

### ★引用文献

- Bongaarts J., 1982, Proximate determinants, In Ross J.A.ed International Encyclopedia of population, Free Press.
- Brofenbrenner, U., 1979, The Ecology of Human Development-Experiments by Nature and Design, (=1996, 磯貝芳郎, 福富護訳, 人間発達の生態学, 川島書店)
- Francesconi M., 2008, Adult outcomes for children of teenage mothers, The Scandinavian Journal of Economics, 110(1), pp93-117.
- Institute of Medicine, 2002, The future of the public's Health in the 21st century, National Academy Press.
- 荻谷剛彦, 2001, 階層化社会と教育危機ー不平等再生産から意欲格差社会へ, 有信堂高文社.
- 西田芳正, 2009, 自己責任論とアンダークラス論を乗り越えるためにー若者と貧困に関する実証研究の課題, 貧困研究, 2, pp72-79.
- 小川久喜子, 2009, 若年妊婦のストレスフルライフイベントにおける対処法略パターンとその変化, 日本保健科学学会誌, 12(2), pp77-90.

# 10 代の母という 生き方 ⑫

大川 聡子

## ★まえがき

マガジン 14～19 号で若年母親へのインタビューを基に、母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。21 号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしています。

今号では、地域において若年母親がどのようなインフォーマルもしくはソーシャルサポートを受けていたのかを分析します。Borkowski(2007)は、母親としての適応、父親の関わり、社会サービス、子どもの学校での体験や学級での調整の 4 つの要素に焦点を当て、若年母親の子育てと回復モデルを作成しました。その中で、子育ての質に影響を与えるのは、父親の関わりや、家族や地域などのソーシャルサポート、母親としての適応等、母親を保護する要因であるとしています。本稿の対象者は、子どもが乳幼児であったため子ども自身の体験については明らかになりませんでした。若年母親が母親としての適応(本稿では“若年母親として自己肯定感を高める”と定義)を成し得ていく上で重要な要素をインタビューデータから抽出し、[図 6]にまとめました。



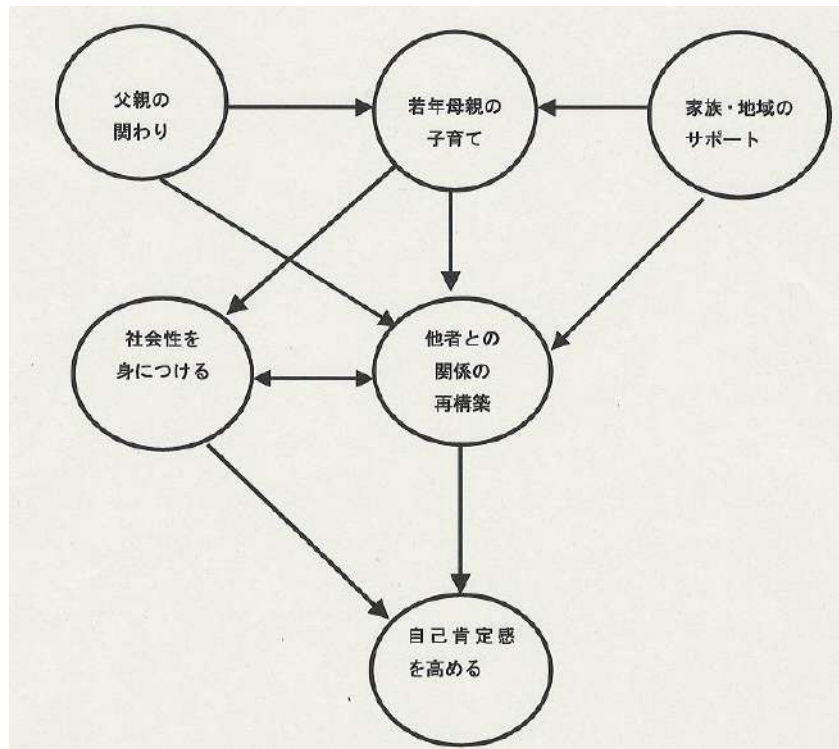


図6 若年母親の発達とソーシャルサポートの関連

本研究では、母親が自己肯定感を高めるために重要な要素を、家族・地域のサポート、父親の関わり、社会性を身につける、他者との関係の再構築の4つとしました。

母親は、父親の関わりや、家族・地域のサポートを受け育児を行なっています。若年母親はライフサイクルが交錯する存在であることから、夫、義父母、年上の母親や周囲の人々等、多くの人々との間に摩擦を起こしますが、これらの人々とうまく折り合いをつけ、母親として関係を再構築しようとしています。また、生活習慣の変化や将来の生活設計を立てることから、社会性を高めることもできるようになっています。こうした、他者との関係の再構築や社会性を高めることが、若年母親としての自己肯定感を高めることに寄与していると考えられます。

また、若年母親は出生地と現在の居住地が近く、地域の同年代の母親を一人も知らないという人はおらず、地域での若年母親ネットワークを形成しやすい状況にありました。このことから、若年母親は周囲の人との絆を感じやすい状況にあると言えます。

こうした背景に、日本の若年母親に対する社会資源の貧弱さが垣間見えます。出産した母親に対して復学や就労支援などの社会的サービスが乏しいために、彼女達は、家族のために自らの時間やエネルギーを使わざるを得ない状況にあります。このため若年母親は、個人としてでなく母親として自らの時間やエネルギーを使い、母親となることで周囲との関係を構築していると考えられました。

Borkowski(2007)が述べたように、本稿でも父親の関わりや家族・地域のサポートが若年

母親の子育てに果たす役割は大きいものでした。父親は、どのケースでも育児に積極的に関わっていたわけではなく、家族のサポートを得られず育児をしているケースもありました。若年母親の支援は、父親だけでなく祖父母も含めた家族に回収せざるを得ない状況にあります。家族の力量には差が大きく、その力量により母親の育児負担は大きく変化します。

しかし、たとえ若年母親の育児を家族が支えることができていたとしても、家族による育児の抱え込みは、家族の私事化を強化させ、「コミュニティからの家族の離脱」(中村, 2001)をもたらし、〈必要以上に他人を頼らない〉、〈初対面で心を開けない〉といった特徴を持つ若年母親の他者との関係構築の機会を奪ってしまうことになるでしょう。さらに、これまで示したように、母親たちの原家族である、甘えられない、困りごとを相談できない家族を再生産していく恐れもあります。また、中根(2006)は家族による介護に「時間の限界性」を指摘しているが、育児においても長期間の身体的、精神的、経済的負担がかかることとなり、若年母親の親達がこうした長期にわたる育児を支えられる保証はどこにもありません。若年母親の育児を地域で支える道筋をつけることは、若年母親自身の社会化だけでなく、地域住民にも若年母親の理解を促進することができ、偏見の緩和につながるでしょう。また若年母親家族の育児負担を緩和することもできるため、重要な取り組みであると考えます。

今回のインタビューにおいて家族以外に若年母親を支えていたのは、地域におけるインフォーマルサポート及び社会的支援でした。地域において若年母親が社会的支援とつながり、地域住民の理解を促すためにはどのような方法があるのでしょうか。次号では、若年母親に関わる地域住民ボランティアへのインタビューを行ない、若年母親と関わることによるボランティアの認識及び関わり方の変化を明らかにし、住民との関係構築を促す方法について考察したいと思います。

#### ★引用文献

Borkowski, J. G., 2007, Risk and Resilience, adolescent mothers and their children grown up, Lawrence Erlbaum associates publishers.

中村正, 2001, ドメスティックバイオレンスと家族の病理, 作品社.

中根成寿, 2006, 知的障害者家族の臨床社会学—社会と家族でケアを分有するために, 明石書店.

# 10 代の母という 生き方 ⑬

大川 聡子

## ★はじめに

2013 年の日本の若年母親の出生数は、12,964 人（人口動態統計）であり、全出生数に占める出産割合は 1.26%と少数です。10 代での妊娠・出産はその後の生活に大きな「社会的リスク（経済的な不安定、配偶関係の不安定、家族との疎遠、母親としての未熟性を指している）」を抱えていく可能性が高い（定月、2009）とされています。

こうした状況にある若年母親の特徴を明らかにするために、筆者が若年母親に実態調査を行なった結果（詳細はマガジン 14～20 号に掲載）、他者に母親として認められることの困難さについて多くの意見が述べられました。その理由として、年上の母親達との関係づくりが困難なこと、周囲から児童虐待のリスク要因としてとらえられていることが挙げられています（大川、2010）。Marshall ら（1992）は、社会的ネットワークからのソーシャルサポートがあることが、親の効力感を高めることを明らかにしています。このことから、住民が若年母親に対する理解を深める地域づくりが、若年母親への育児支援において重要であると考えました。

海外に目を向けると、アメリカでは妊娠後期から産後 6 か月間、ボランティアが若年母親の家庭に継続訪問を実施し、訪問を受けた母親は子どもに対する理解が深まり、母子相互作用が円滑に行われていることが報告されています（Barnet et al., 2002）。イギリスでは、10 代母親自身がボランティアとして地域活動に参加している事例もみられます。ボランティア参加に関しては、時間の制約や人種差別、地域に対する外部からの差別など様々な困難があるようですが、こうした地域に根差した実践が、10 代母親の社会的包摂のための個人的、社会的、政治的な障壁をなくす可能性を生み出している（Greene, 2007）と意味づけられています。

このように、海外では若年母親にボランティアが関わることのメリットや、様々な困難の中で若年母親が地域活動を行う効果についても検討されています。筆者が 2004 年からフィールドワークを行っている若年母親のサポートグループ「Z」には、地域の更生保護女性会メンバーが保育ボランティアとして参加されていました。そこでは、ボランティアをする側—される側、という関係だけでなく、母親として同じ土俵の上に立ち、共に学びあう、ボトムアップ的な関わりがグループの中で自然に行われていました。今号および次号では、こうした場に参加するボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし、若年母親を支える地域づくりについて考察します。

## ★ 研究目的

本研究では、若年母親サポートグループ「Z」に保育ボランティアとして参加している更生保護女性会メンバーへのインタビューから、住民ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにします。その内容を基に、若年母親を支える地域づくりについて考察します。

## ★ 研究方法

### 1. グループ「Z」の概要

グループ「Z」は若年出産した母親を対象に「子育てに関する知識や技術の取得、母性を形成すること」を目的に、保健師が主体となり 200X 年に発足しました。毎月 1 回 2 時間程度、X 市保健センターで開催されています。2008 年度の参加人数は 5～14 組でした。「Z」のスタッフは、保健師、保育士、助産師、栄養士、ボランティアなどです。ボランティア、保健師、保育士は主に育児を担当し、助産師、栄養士、保健師はプログラムを担当します。毎月のプログラムはメンバーによって決められ、運動会、クリスマス会等季節の催しを重視し、内容は多岐にわたっています。終了後にはスタッフ間でミーティングを行い、情報共有しています。

### 2. グループ「Z」におけるボランティアの関わり

グループ「Z」は、子どもの保育を地域住民ボランティア団体である更生保護女性会に依頼していました。更生保護女性会は、地域社会の犯罪・非行未然防止のための啓発活動を行うとともに、青少年の健全な育成を助け、犯罪をした人や非行の少年の改善更生に協力することを目的とするボランティア団体です。更生保護女性会は地域に根付いており、若年母親と生活圏域を同じにすることから接点も多いです。母親とボランティアは、調理実習開始時に子どもを預かる時と、終了後母親に子どもを受け渡す時に関わりを持っています。ボランティアは、グループ「Z」開始当初から 2009 年 3 月まで毎月 3～5 名が参加

し、子どもの保育を担当していました。

### 3. データ収集方法

2008 年 1 月に半構造的質問紙を用いてグループインタビューを行いました。対象者の選定は、当月ボランティアに参加していた 3 名に依頼し、了解の得られた 3 名全員を対象者としました。インタビュー時間は約 60 分でした。インタビューの内容は、対象者の年齢、子育て経験の有無、育児支援の経験（年数・内容）、グループ「Z」のボランティアを始めた経緯、関わり始めた時期、グループ「Z」参加当初の母親・子どもの印象、最近の母親・子どもの印象、グループ「Z」の子ども達に関わる上で気をつけていること、10 代で出産した母親に対して必要な支援等です。グループインタビュー時は、すべての項目に対し全員が十分発言できるよう配慮しました。

### 4. 分析方法

分析方法は、質的記述的研究としました。録音した内容を基に逐語録を作成し、逐語録の内容をインタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを徐々に抽象度を上げながら、カテゴリー別に類型化しました。本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については、第 3 者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、修正を行いました。

### 5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しました。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮しました。本調査は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得ました。

## ★結果

インタビュー対象者の年齢は 50 代、60 代、70 代 それぞれ 1 名ずつでした。対象者は全員出産経験があり、子どもの数は 2～4 人、第 1 子出産年齢は 26～27 歳でした。グループ「Z」での保育ボランティア経験年数は 3～4 年間であり、他の 5 名のメンバーと交代で毎月参加されていました。「Z」以外での育児支援の経験がある人も 2 名いました。インタビューデータを基に、大カテゴリーとして 1. グループ参加当初の若年母親に対する認識、2. 関わりが深まってからの若年母親に対する認識、3. 若年母親に関わることの難しさ、4. 居心地のいい場づくりのための支援、5. 関係を構築する、の 5 項目が抽出されました。分析した結果をカテゴリー別に記します。以下、大カテゴリーは数字表記、カテゴリー

ーを【 】，サブカテゴリーを《 》，コードを〈 〉で表します。

## 1. グループ参加当初の若年母親に対する認識

### (1) 《関わるきっかけ》

#### ① 〈若年母親の保育ボランティアは更生保護の務め〉

グループを主宰しているX市保健センター保健師は、当初保育ボランティアを民生委員に依頼しました。民生委員と更生保護女性会を兼ねているメンバーが、市からの依頼について更生保護女性会の理事に相談したところ、理事であるFさんは民生委員としてでなく、更生保護女性会の行事として位置付けるべきであると考え、ボランティアを受けることをメンバーと相談して決定したと語っていました。

最初はね、(市から)民生(委員)のほうにお話がおりてきたんですよ。DさんとEさんとかが「Zがあるんだけど」って(理事の)Fさんにお話ししたら、更女(更生保護女性会)で、ひとつの行事に取り入れてほしいから言うので。みんなで決めて参加させていただいたんです。(Cさん)

### (2) 《関わり始めの若年母親の印象》

#### ① 〈イメージ通りの若年母親〉

インタビュー対象者の中で、「Z」に最初に関わったCさんは、若年母親がグループ開始時に音楽をかけて踊りだしたり、保健師がグループ開始の声をかけても参加するそぶりを見せないといった振る舞いを見て「やっぱり」若い母親はこんな感じなのかと思い、唖然としたと語っていました。

カセットをバーッとかけて音楽鳴らして、パーッと踊ったりね。「始めますよ」言うても何かちょっと…。「ああ、やっぱり10代のお母さんってこんな感じなんかな」と思って、ちょっと最初は唖然としましたけど。(Cさん)

#### ② 〈他の母親グループとの雰囲気の違い〉

ボランティアは、他の母親サークルでも支援を行なった経験があり、グループ「Z」は他のサークルの母親と雰囲気が違うと感じていました。

(他の母親サークルに)来てるお母さんと、ちょっと違いますね。(他のサークルは)年代上やから。雰囲気がっていうのか、何かな。(Cさん)

やっぱり外見とか、そういうの。(Aさん)

おとなしめ?(Bさん)

向こう(のサークル)はね。(Cさん)

## 2. 関わりが深まってからの若年母親に対する認識

### (1) 《関わりが深まってからの若年母親の印象》

#### ① 〈メンバーが変わり落ち着いた〉

参加当初はメンバーの振る舞いに咄然としていたボランティアも、最近は落ち着いた感じの母親が多くなったと語っています。子どもの就園や本人の希望によりグループを辞めるなどして年々メンバーは入れ替わるため、開始当初と現在のメンバーの印象は異なると全員が語っていました。

この頃、みんな落ち着いたお母さんが多いからね。全然、もう最初とは（違う）。（Cさん）

#### ② 〈母親の行動に慣れさせられた〉

Bさんは、「Z」に参加するメンバーの顔ぶれが変わっただけでなく、何回か若年母親と接した上で、自身の彼女たちに対する認識が変化しているととらえていました。Bさんは、自身のこうした変化を「慣れさせられた」と表現していました。

もう（母親たちに）慣れさせられたというか。こちらのほうがね。だんだん慣れたというか。向こう（母親たち）がちょっとおとなしなったというか。そこは定かじゃないですけどね。（Bさん）

### (2) 《若年母親流の育児を認める》

#### ① 〈若くても母親として行動している〉

ボランティアは、他のサークルとの雰囲気の違いは感じつつも、それは年齢が若いからであり、母親としての振る舞いや育児は一生懸命にやっているだろうと感じていました。

（グループ「Z」は）年がそんだけ若いいうだけで、ちゃんとお母さんはしてはるん違うかなと思いますけどもね。（Aさん）

あの子らはあの子なりに、一生懸命（子どもを）みてるんやろなと思いますね。（Bさん）

#### ② 〈子どもの行動を母親に転嫁しない〉

Cさんは、子ども達が多少乱暴に振る舞うことについても、年齢相応の行動であり母親が何歳であろうと関係ないととらえていました。

友達にボーンと積み木投げたりすんのは、どこの子もするでしょ？遊んでる間にね。どこの子でも小ちゃい時は、そんなんは結構ケンカみたいな感じですよ。何回か見ましたけど。それは誰でも、（親が）10代ではなくてもすることやからね。（Cさん）

### ③ 〈自己流の育児を受け入れる〉

ボランティアは、若年母親に対して世代の違いを感じており、季節に合わない服装をしている時は、助言したくなることもあると言います。しかし、それも 10 代である若者の特性であり、子どもを産んで親になっても、若いうちは自分の思うようにしたいのだろうと考え、若者らしい服装を受け入れようとしていました。

(冬場に) 背中見えてる子もおるしな。しゃあないわ思って。若いうちに何でもしたいんやから、子どもはもう別やねんやろな思うわ。自分のおしゃれになったら。(略) だから、今は何も言うたって。自己流で行きはるやろな思うわ。(Bさん)

### ④ 〈“子ども”なのに子育てをしているのは偉い〉

インタビューの中でボランティアは、若年母親を「子どもみたい」と述べる場面もありました。ボランティアは、若年母親達の努力は評価していますが、まだ「子ども」であるにとらえています。そうした認識のもと、「子ども」なのに「母親」としてちゃんとやっていることが「偉い」というように、若年母親の育児を寛容的に受け止め、受け入れようとしている様子が見られました。

(母親の) 年齢考えたらね、偉いわと思う。(Cさん)

そう。やっぱり、みんな遊びたい。(Aさん)

まだ、ご自分が子どもみたいな感じでもんね。(Bさん)

次号へ続く

### 引用文献

- Barnet,B., et.al. : (2002) The Effect of Volunteer Home Visitation for Adolescent Mothers on Parenting and Mental Health Outcomes, A Randomized Trial, Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine, pp1216-1222.
- Granovetter, S., (1973) :The Strength of weak ties, American Journal of sociology, 1973 (78) ,pp1360-1380 (=野沢慎司, 2006, リーディングスネットワーク論, 家族・コミュニティ・社会関係資本, 第4章, 大岡栄美訳, 弱い紐帯の強さ, pp123-158)
- Greene,S., (2007) :Including Young Mothers: Community-based Participation and the continuum of active citizenship, Community Development Journal,42 (2) ,pp167-180.
- Marshall,T.H.,BottomoreT., (1992) :Citizenship and social classes,1992 (=岩崎信彦, 中村健吾訳, シティズンシップと社会的階級, 法律文化社, 1993)
- 大川聡子 (2010) : 10 代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ, 立命館産業社会論集, 46 (2), pp67-88.
- 定月みゆき (2009) : 若年妊娠・出産・育児への対応, 母子保健情報, pp53-58.



# 10代の母という 生き方 ⑭

大川 聡子

## ★まえがき

前号から引き続き、若年母親グループに関わるボランティアグループメンバーへのインタビューを基に、ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし、若年母親を支える地域づくりについて考察します。

## 3. 若年母親に関わることの難しさ

### 1) 【相反する役割期待】

#### (1) 《母親役割を重視して若年母親をとらえる》

##### ①〈子どもをしつける親として振る舞うべき〉

Cさんは、若年母親に最も必要だと思うことは「人の話を聞く」姿勢だと考えていました。スタッフが「Z」が始まる時のあいさつや、今日の流れの説明をしていますが、メンバーが友達と話をしている様子を見て、もう少しけじめをつけて欲しいと言う思いを持っていました。

Bさんも、子どもをしつける存在として、若年母親自身も親らしく振る舞って欲しいと望んでいました。

(メンバーは) 人の話聞きやれへんわね。それが一番(必要だと思う)。(スタッフが) 説明してはっても、こっちの友達と隣同士で話したり、(略)「今から(Zを)します」言うても、お隣同士でピャーと話したりしてやるから。ああいうの、もうちょっとけじめつけた方が。(Cさん)

一応、親やねんからね。その(人の話はきちんと聞くということ、子どもに言うて聞かせていかなあかんねんからな。(Bさん)

## ②〈子どもより親の欲求を優先している〉

Aさんは、Aさんの世代が育児をしてきた時代は子どもが第一でしたが、若年母親は子どものことよりも自分のことが優先となってしまうがちであり、関わり方が難しいと感じていました。

Aさん　そういう（自分を優先している）のはちょっと感じるかな。私らの時はね、子どもが第一というか、そういうので来ましたからね。そういうのが、ちょっと分からないかな。（Aさん）

自分犠牲にしても子ども優先やもんね。昔はね。今はどうなんやろね？（Cさん）

## (2) 《10代であることを重視して若年母親をとらえる》

### ①〈自分を優先することは仕方がない〉

Bさんは、母親達の年齢を考えると、自分を優先することは仕方がないという思いを持っていました。

そら(子どもよりも自分のものを)欲しいと思うわ。年からいうとな。子どもよりも親のほうかな。そんな思ってもええ年齢やわな。（Bさん）

### ②〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉

Aさんは、自分中心に考えているように見える若年母親も、いざとなれば子どもを一番に考えるだろうと「信じて」いました。

いざとなったら子どもをね、あれしやる（第一に考える）とは信じてますけど。（Aさん）

## 2) 【若年母親との距離の取り方の難しさ】

### (1) 《若年母親側の認識を知りたい》

#### ①〈どのような存在ととらえているのか知りたい〉

Bさんは、ボランティアが母親からどのように認識されているのかを気にかけています。しかし、母親側からボランティアに声をかけることは少なく、どのように思われているのだろう、自分達に気を許してくれているのだろうか、という思いを持っていたが、自分の中にとどめていました。

どない向こう(母親たちは)思ってはるのかなって、私は思ったりするんですわ。だから、おばちゃんらに気許してくれてるんやろかなあ。どんな目でおばちゃん達を見てはんのかなあ、って思ったりするんですわ。（Bさん）

(1) 《拒絶されることへの恐れ》

① 〈関わることで疎ましく思われることへの恐れ〉

Bさんは、若年母親に積極的に話しかけるのを躊躇する理由として、こちらが親切と思っていたことが相手側にどう受け取られるか分からないこと、相手のバックグラウンドが分からないことを挙げていました。

あの子なんか、1人しょんぼりしてたら、ちょっと声かけてあげたいけどなあ。余計なことかなあって、1人思ったりする時あるんですわ。「小さな親切、大きな迷惑やったら困るしな」思うて。(Bさん)

(1) 《積極的にしかかわることの難しさ》

① 〈母親たちの周囲の人から助言をもらって欲しい〉

ボランティアは、参加当初のスタッフからの助言や、《拒絶されることへの恐れ》を持っていることから、「自分から積極的に関わることはできないが、何か困ったことがあれば、周囲の人に助言をもらって欲しいという思いを持っていました。

困ったことがあったら、周りの人に(Bさん)

助言してもらてね。(Cさん)

ちょっと声かけてくれはったらええかなと思うだけで、こちらから言うていく事はないと思うんですけどね。(Bさん)

② 〈母親側から話しかけてくれればより親しくなれる〉

Bさんは、〈疎ましく思われることの恐れ〉から、ボランティア側から話しかけにくいと考えていました。そのため、母親側から話しかけてくれればより親しくなれると感じています。

嫌でなかったら、向こうからお話しなさっていただいたほうがね。より親しくなれるんじゃないかなと思ったりしますね。(Bさん)

(2) 【雰囲気づくりに徹する】

① 《グループに来所しやすい雰囲気づくり》

〈小言は言わない〉

ボランティアが母親達に積極的に関わりにくい理由として、来所しやすい雰囲気作りへの配慮が挙げられました。ボランティアは、若年母親は育児に対して既に周囲から意見されているだろうと考え、これ以上意見することで、母親がグループ「B」に来にくい状況になることを恐れています。子どもをきちんとみているのならそれで良い、と10代らしい育児を容認する発言も聞かれました。

家で言われてたとして、ここへ来てまたそんな小言みたいなこと言われんのが嫌やって思  
って来はらへんようになったらいかんもんね。そやから、なんにもね？（同意を求める）  
なんにも。ただもうそこへ来て、なんかあったら、「どうしたん？」「ここ、ケガしてや  
った。どうしたん？」とか、そんなことぐらいは聞くけど。なんにも「ああしたらいいよ」  
とか「こうしたらいいよ」とかは言わなかったですね。（Cさん）

〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉

ボランティアは、母親に意見することに対して「自分の子でもない」からと配慮をし  
ています。そして子どもをきちんと見守ることが、自分達の役割であると認識していまし  
た。

（グループに）来やすいようにね、してあげな。やっぱりね。ついついね、私らでも家で  
も孫に、自分の子でもないのに孫にポンポンとこう言うでしょ。そんな言わんとこかな  
思うねんけど、ついついね。そういうことやっぱり言われたら、その子自身も嫌やんか。  
そやから、なるべく言わんほうがええの違うかな。ただ、赤ちゃんさえちゃんと見守っ  
てあげたら、もうそんでいいのかなと思ってね。（Cさん）

〈ほっとできる場づくりに徹する〉

ボランティアは、母親達がほっとできる場作りを意識し、小言のようにとらえられかね  
ない忠告はせず、母親達を見守る姿勢をとっています。

そやから、ここへ来たらもうほっとしたいからね。もうよそからはいろいろ聞きたくない  
と思うけどね。（Cさん）

親切がな、ひょっとしたら向こうに対してな、苦い言葉になってもいけないし。ここへ来  
て、ほっとしに来てはんのやったら、それ(こちらから声をかけない)がベストじゃないで  
すかね。（Bさん）

### （3）【関係を構築する】

#### ①《母親達との関係構築》

〈親しみを持って話しかけてくれた〉

若年母親達に「慣れさせられた」という B さんは、「しょんぼりしている母親に声をか  
けてあげたい」といった、若年母親と積極的に交流したいという思いを持っています。こ  
うした思いに共鳴したのか、母親も B さんに対し気安く話しかけてくることもあるそうで  
す。

ちょっとさっき隣で気安く…まあ話し方はね、ちょっと。でも、案外なんか親しみ持ってくれるような、もの言いをしてくれはったからね。あぁっと思ってたんやけど。さしてそんなに(母親達が)変わったとは思わないんですけどね。(Bさん)

#### IV. 考察

##### 1. ボランティアが持つ若年母親への認識の変化

若年母親は、「10代」であり「母親」であるという、2つの側面を持っています。こうした母親達を支援するボランティアは、《母親役割を重視した若年母親のとらえ方》と、《10代であることを重視した若年母親のとらえ方》という、相反する役割期待の中での葛藤が見られました。またボランティアと母親との関わりの中で、《若年母親側の認識を知りたい》という思いはありますが、《拒絶されることへの恐れ》から、関わりたいという思いを持ちつつも若年母親達に積極的に関わることができない状況にありました。しかし、直接的に関わらなくとも、〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉と認識し、〈ほっとできる場づくりに徹する〉ことで、ボランティアは若年母親を間接的に支援しています。このことから、ボランティアは「B」において母親達と関わる上で距離の取り方に戸惑いつつも、適度な距離感を保ち、関係を構築していくきっかけを作っていると考えました。

若年母親は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取っているため、もしボランティアが小言ととらえられるようなことを言えば、若年母親との関係を築くことは困難だったでしょう。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず少し想像力を広げ、自分たちの思う「親切」が彼女たちにとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、パターンリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」ととらえ、場づくりに徹していました。こうした状況を若年母親達がどのように受け止めているのかは明らかになりませんが、ボランティアに親しみを持って話しかけてくる母親もいることから、母親達もボランティアの役割に気づいており、お互いに理解を深めようとしている過程にあると考えました。このように、ボランティアは若年母親達を見守り、理解しようとすることで、母親達と関係を構築している過程にあると考えました。

大川(2010)の調査では、周囲からの反応に傷つく若年母親たちの存在が示されましたが、ボランティア側も【距離の取り方の難しさ】を感じていることが明らかになりました。これまで若年母親と関わったことのない多くの人々には、彼女らが妊娠や出産に向けてどのような思いを持ち、どのように生活し子育てしているのか、その実態は分かりません。若年母親の実態を知らず関わり方が分からないことが、偏見につながっていくことも考えられます。しかしボランティアは若年母親と関わることにより、母親への視点に変化を生じさせ、若年母親の育児を受け入れ理解しようとしていました。このように地域住民が若年母親の実態を知る機会を作ることが、若年母親の育児支援の一つとして必要であると考えます。

## 2. 若年母親とボランティアをつなぐ試み

「更生」を目的にボランティアへ参加する更生保護女性会メンバーと、「同年代の母親との交流」を目的に集まってきた若年母親達は、それぞれの目的が異なりますが、こうしたグループがなぜ機能するのでしょうか。その背景には、母親同士という仲間意識と土着性があると考えます。ボランティアは、グループでの若年母親の振る舞いに戸惑いつつも、「母親なのだから、子どもをみてくれると信じている」といったような、母親である者同士の期待を持って若年母親達を見ていました。近隣住民からの意識を敏感に感じる母親達も、ボランティアは受け入れ、グループは機能しています。田間（2001）は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい、といいます。ボランティアは、母性を主体的に内面化したことにより、同じ「母性」を持つ10代の母親たちを愛情を持ったまなざしで見守り、支えていると考えられました。さらに、同じ地域に住み生活圏域をともにしているという土着性が、より親しみを感じる要因となっていると考えられます。

こうした、社会的に不利な要因や多様なニーズを持ち、地域におけるつながりを求める人々と、ボランティアとして積極的に地域住民に関わりたいと考える両者を結び付けることは、意義深い取り組みであると考えます。グループ「B」において、ボランティアと母親達とをつなげたのは保健師でした。こうした社会的なニーズを持ち、地域から孤立しやすい人々と地域住民を仲介する役割として、保健師の存在は非常に大きいと思います。保健師の多くは保健所、市町村等の行政機関に所属し、支援が必要な対象者に向けて、個別あるいはグループ支援を行っています。また、地域住民の組織化活動を行っており、地域の住民活動にも精通しています。こうした特徴を生かして、保健師は支援が必要な人と地域住民を仲介し、関係を構築する機会を提供できると考えます。

地域住民とボランティアをつなぐ取り組みとしては、児童委員が子育てサロンを主体的に行っている地域や、乳幼児健診の際に地域の児童委員を紹介する地域もあります(厚生労働省, 2009b)。今後は、地域住民ボランティアや専門職が連携して、お互いの専門知識や経験を基に支援が必要な人々を支える地域づくりを行っていくことが必要でしょう。

若年母親がグループ「Z」等で、親族でなく同世代の母親でもない異なる立場を持つ人々と弱い紐帯を構築することで、若年母親が社会的に不利な状況から移動する機会を作り、地域に受け入れられていると認識することができると考えられます。このような場を継続的に設けることが、若年母親だけでなく、地域住民同士がともに支えあう地域づくりの一助となるでしょう。

### 研究の限界

本稿はまた一部の団体のメンバーの語りであることから、得られた内容に偏りがあります。しかし、これまで明らかにされてこなかった、若年母親に関わる地域住民の認識について分析することで、若年母親の地域における理解を促す方策を検討するための一助となったと考えます。

## おわりに

本稿では、地域住民ボランティアへのインタビューを通して、地域において若年母親と地域住民がどのように関係を構築しているのかを明らかにしました。周囲からの視線を敏感に受け取る若年母親にとって、地域住民との関係構築は大きな意味があります。地域での支援枠組みを構築していくことで、若年母親が育児をしやすい環境を整えるのみならず、固有の支援を必要とする人々がともに支え合える地域づくりの第一歩となると考えます。

## 謝辞

インタビューにお答えいただき、いつもグループ「B」を温かい雰囲気の中で包んでいただいたボランティアの皆様、またインタビューにご協力いただきましたグループ「B」の歴代スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

\*プライバシー保護のため、データの内容を一部改変しています。

## 引用文献

- Flick Uwe (1995): *Qualitative forschung*/小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 2002, 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社
- Granovetter, S. (1973): The Strength of weak ties, *American Journal of sociology*, 1973(78), pp1360-1380/ 野沢慎司 (2006): リーディングスネットワーク論, 家族・コミュニティ・社会関係資本, 第4章, 大岡栄美訳, 弱い紐帯の強さ, pp123-158.
- Greene, S. (2007): Including Young Mothers: Community-based participation and the continuum of active citizenship, *Community Development Journal*, 42(2), pp167-180.
- 平尾恭子, 上野昌江(2005):10代で出産した母親の母親行動とソーシャルサポートとの関連, *小児保健研究*, 64(3), pp417-424.
- 片桐清一(2001):若年妊娠の社会的背景とその支援, *周産期医学*,31(6), pp745-748.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009a):子ども虐待対応の手引き 平成21年度改訂版  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv36/index.html> (最終閲覧日 2014/09/23)
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009b):児童委員・主任児童委員活動事例  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/kosodate/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html) (最終閲覧日 2014/09/23)
- Marshall, T.H., Bottomore T., *Citizenship and social classes* (1992) /岩崎信彦, 中村健吾訳, シティズンシップと社会的階級, 法律文化社, 1993
- 松田茂樹(2008):何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ, 勁草書房.
- 大川聡子(2010):10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ, 立命館産業社会論集, 46(2), pp67-88.
- 定月みゆき(2009):若年妊娠・出産・育児への対応, 母子保健情報, pp53-58.
- 田間泰子(2001):母性愛という制度, 勁草書房

# 10代の母という 生き方 ⑮ —最終回—

大川 聡子

## 1. 若年出産問題を把握するためのエコロジカルアプローチの必要性

これまで、若年出産がもたらす社会的経験の意義について、妊娠・出産・育児を通して周囲の人々との関係を再構築していく過程を中心に明らかにしました。

①②では、若年出産が日本において政策的課題として注視されない背景に、若年出産をもたらす顕著な社会的課題がないこと、家族の支援があることや既存サービスの活用により、問題が不可視化されていることを示しました。③では、若年母親に内包される社会的問題について、経済的問題、高校中退問題、家族の問題の3つに大別して整理し、日本において若年母親がどのようにとらえられているかを明らかにしました。

④⑤⑥では、若年母親の語りから若年出産をもたらす社会的特徴を明らかにしました。結果から、子どもが欲しかったと考え出産を自らの意思で主体的に選択する母親の存在を明らかにし、その背景に、若年母親の短い修学年数や不安定就労などの社会的に不利な要因、家族間の葛藤や家族への思慕、そして夫と新しい家族を作ることへの希望があることを示しました。出産後の母親は、インフォーマルサポート、社会的支援、そして若年母親自身の努力をもって、社会的に不利な状況に対峙しようとしています。⑦⑧⑨⑩では、若年母親のグループにおけるインタビューから、社会的に不利な状況に対峙するピアサポートの役割について示しました。若年母親達は出産を通して、周囲の人々との関係を再構築し、将来を見越した生活設計をしていました。そのことにより自己肯定感を高め、母親としての生活に自信を持つことができていました。⑪⑫では、若年出産を「選択」する背景に、若年母親達の社会的に不利な要因と、10代という年齢に期待されている教育や就労よりも、母親となることに意義を見出す若年母親の意思の双方が影響していることを明らかにしました。このことから、若年母親の「予防」の取り組みに傾注するのではなく、若年出産を



個人のライフスタイルの選択として認め、こうした若年母親を支えるためのセーフティネットの必要性について述べました。

⑬⑭では、地域住民ボランティアへのインタビューを通して、ボランティアが若年母親と関係を構築していく過程を明らかにしました。ボランティアは、若年母親の様子を観察することで母親のニーズを察知し、パターンリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」と位置付け、居心地の良い場づくりに徹していました。こうしたボランティアの関わり方が、若年母親と関係を構築するきっかけとなっていました。また支援が必要な人々と、関わりたいという思いを持つ地域住民をつなぐことで、お互いに支え合うことのできる地域づくりにつながっていくことも示唆されました。

若年母親に対する社会資源のあり方について、**Germain(1980)**は、これまでの伝統的なアプローチでは、クライアントを受け身で依存的な立場に置く医学・病理の比喻を用いるか、「個人」だけに関心が絞り込まれる傾向にあったといいます。若年母親においても、出産後の社会的不利な要因が主眼としてとらえられ、出産に至るまでの母親を集団として捉え、彼女たちが共通して抱えている社会的背景には関心が払われてきませんでした。しかし、⑪⑫で述べたように若年出産を「選択」する背景には、若年母親達の社会的に不利な要因と、母親となることに意義を見出す若年母親の意思の双方が影響しています。このため本号では、若年母親を「個人」としてでなく、家族、学校、職場、地域の一員としてとらえ、「個人」とそれをめぐる「環境」の相互適応プロセスに焦点を当てるエコロジカルアプローチを用いて、若年母親の支援のあり方について検討したいと思います。

## 1) 若年母親と若者問題

若年母親が主体的に出産を選択する背景に、家族、教育、就労など様々な社会的要因や青年期の特徴が背景にあり、その中で主体的に「選択」されていることを認識しておく必要があります。若年母親は社会的に不利な状況の中で生活していますが、社会的に不利な状況の誘因となるものは、原家族の経済的不安定さです。④～⑩におけるインタビューから、若年母親達は高校入学当初からアルバイトをして労働市場に参入し、家計を助けたり学費を賄うなど、家族の庇護に頼らず(頼れず)自立した生活を送っている人もいます。若年母親の原家族は経済的不安定を抱えていることもあり、それが学業の継続を困難にしている誘因となっています。中学卒業、または高等学校を中途退学している若年母親は、その後専門的な職種に従事することは難しい状況です。若年層が将来に希望を見出せないことが「何もすることなかったし、結婚しよう」といったように、彼女達を妊娠・出産に導く要因ともなっています。しかしこうした「経済的不安定」は若年母親のみにみられる問題なのでしょうか。

宮本(2004)は、「若者の貧困化が隠される日本社会では、真に問題を抱えた若者が存在していることが認識されるのに時間がかかる」とし、子どもや若者の貧困が表面化され難い現状を指摘しています。若年母親となることで顕在化する貧困は、貧困家庭に育った子ど

も期の問題であり、若者問題でもあります。こうした社会的に不利な状況は、個人の努力で解決できる問題ではありません。若年出産層とは、単に 10 代で子どもを産んだということではなく、その背景にある社会的不利—親世代からの貧困の連鎖、ステップファミリー、高校中退、若年父親の不安定就労、乳幼児を抱える母親の就職難、母子家庭等—を持つ人々です。若年出産を一つの選択肢として認め、不安定さを抱え込む母親に対しても、またその子どもに対しても、不安定さを補うための「人生前半の社会保障」を整備していく必要があります。

さらに、若年母親はこれらの社会的不利に加え、青年期の特性をも併せ持っています。その一つに、「現在の思い」を重視する行動特性があります。筆者は若年母親グループにおいて次の妊娠のタイミングを考えたり、保育所入所の意識付けの一助とするため、20XX 年からメンバーに今後 5 年間のライフプランを検討してもらう機会を作っています。若年母親はライフプランをそれぞれに持っていますが、生活基盤や将来設計を立てる事より現在の思いを優先するため、目標に向かってどのように行動すべきか考えることが難しい状況にあります。「働く」ことを希望していても職業へのイメージも乏しく、今—この楽しさを重視しています。青年期の特徴である「時間的展望の拡散」がこうしたライフプラン構築の困難さにつながっていると考えます。

しかし、子どもが保育所または幼稚園、小学校、中学校と成長していくにつれ、若年母親は子ども達の成長の時間軸に合わせた生活設計をしていくことが必要となるでしょう。そうした際に、今後の見通しを立てることができるようなアプローチが必要です。

## 2) 若年母親に対するエコロジカルアプローチ

若年母親の支援は、若年母親を予防する取り組みの下に不可視化され、これまで家族に回収されてきたために、支援を受けられる母親と受けられない母親の間での育児の困難感が大きく異なっていました。若年母親が離婚し母子家庭となった場合は、母子家庭に対する支援が行われます。母子家庭に提供されている支援は子育てと生活支援、就業支援、養育費の確保、経済的支援の 4 本柱です。若年母親も教育・就労や育児支援など複合した問題を抱えており、生活支援・就業支援・経済的支援を必要とする存在です。

広井(2006)は、人生前半の社会保障として「若者基礎年金構想」を挙げています。また阿部(2008)は、貧困率を下回る生活をしている世帯に対しては、児童手当等の金額の見直しが必要であるとしています。しかし、若年母親にこうした現金支給を行ったとしても、⑦の G さんの「貯金なんて考えていなかった」といった語りもあつたように、その場の遊興費に使ってしまうことも考えられますし、家族に支給したとしても、子どもの教育や就労に関心を持っていない親もあり、出産後の社会的に不利な状況を緩和する使われ方をされるとは限りません。経済的支援だけでなく、包括的に教育、就労、育児、そして地域社会の理解を促すための実態に即した社会資源を整備していくことこそ必要だと考えます。宮本(2011)は「人生前半期を支える支援コミュニティ」として、0～40 歳を対象に①コミュニテ

イにおけるセーフティネット、②中間的労働市場・地域活動への参加、③キャリア教育・職業支援、進路選択支援、④病気や障害などにより市場経済に入れない若者への生活支援、⑤就業経験のない若者が「市場経済」へ入るための就労支援、⑥「市場経済」における雇用を通じたセーフティネット及び経済的セーフティネットを挙げています。さらに、すべての世代において、「ケア、教育、就労支援による社会へのつながり」が必要であると明示しています。家族・親族によるセーフティネットが乏しい若年母親にこそ、「ケア、教育、就労支援による社会へのつながり」が必要であり、一般的な若者に対する雇用対策や、離脱してきた学校に戻すための支援ではなく、より教育や雇用が困難な人々に対するオルタナティブなセーフティネットを構築し、個人の機会の平等を保障する必要があるでしょう。若者支援の取り組みとしては2010年に「子ども・若者育成支援推進法」が施行され、その基本理念の一つに、子ども・若者の発達段階、生活環境、特性その他の状況に応じてその健やかな成長が図られるよう、良好な社会環境(教育、医療及び雇用に関わる環境を含む)の整備その他必要な配慮を行うことが挙げられています。若年母親はライフサイクルが交錯する存在であり、若者であり子育てをする母親であるという大きな特徴を持っています。次項では若年母親の機会の平等を保障するために、エコロジカルアプローチを参考に検討します。エコロジカルアプローチ実践のための「生活モデル」として、人間の成長力と適応への潜在的可能性に関わり、援助媒体としての環境を動かし、環境の要素を変えていくといった3つの行動が不可欠であるとされています(Germain, 1980)。若年母親についても「個人」としてとらえるのではなく、その成長力や可能性を重視し、機会の平等を支えるための「環境」をどのように整えることができるのでしょうか。教育、就労、育児、地域におけるアプローチの4つに分けて検討したいと思います。

### (1) 職業教育の推進

若年母親は学校からの離脱により修学年数が短く、また横のつながりと言った同質性を持つ人との対人関係を築くことを求めるために、様々な文化を持つ学校文化<sup>1)</sup>への親和性は低い状況にあります。基礎学力が未定着であり親しい友人もいなければ、学校に通い続けることは困難でしょう。また若年母親の親達も学業継続にそれほど重きを置いていないことも、意欲の低下に影響を及ぼしています。一方で、校則違反のため本人は在学を希望していても退学を余儀なくされる母親もいました。妊娠後に出産を決意した際も、育児と学業継続との間で葛藤することもなく、自分のお腹に子どもがいるという身体感覚を重視し、出産後のライフプランはなくとも、若年で出産するということを主体的に「選択」します。こうした教育上の「失敗」が、不利益とリスクを産む大きな原因(Jones et al, 1992) となり、就業の困難さや貧困に直結していきます。若年母親は出産後の生活で初めて、中卒者(高校中退者を含む)の就労の困難さに直面します。教育の未達成による社会的不利を若年母親に帰する見方もありますが、義務教育でない高校に、高校生年齢にある生徒達の98%が進学するという現状が特殊な状況であるとも言えるでしょう。若年母親には高校を中退してい

る人が多かったのですが、内閣府が実施した若者の意識に関する調査(2011)によれば、高等学校中退者のうち、妊娠・育児を行っている者は18歳、19歳で10%を超えています。この数値は性別に分類していないため、単純に計算しても、高校を中退した18,19歳の女子の20%が妊娠中もしくは育児中であることが分かります。若年母親は高校中退者の支援を行っていく上でも看過できない数存在すると考えられます。こうした、若年母親の就労を保障していくためには、どのような方法があるでしょうか。

本田(2009)は、戦前からの普通教育重視傾向に伴い、職業教育が後退していること、さらに、学歴分布が現状で固定されると想定すれば、高卒者や高卒未満の者が、労働市場の中で酷い扱われ方をすることを防ぐために、教育において職業的な準備・装備を与えた上で社会に送り出し、その後も継続的に職業能力や教育暦を向上させる機会を拡充する必要性を述べています。現在の高等学校の入学者の多くは普通科が72.3%(2010年)を占め、高等学校で専門的教育を受ける人は少数となっています。一方で、2009年度において社会人が最も多く入学した学校は、専修学校が67,567人であり、大学院18,432人、大学12,399人、短期大学2,990人と比較してもはるかに多く、職業訓練等の事業を含めると10万人を超えています(文部科学省, 2011)。これほど多くの人々が専門教育を受けることを望んでいるのは、雇用情勢の悪化のため学びを職業に直結し、確実に就労できるための技能や知識を身につけたいという思いがあるからでしょう。

若年母親も専門職であり、求人数も多い対人援助職であるホームヘルパー、看護師、保育士、養護教諭、カウンセラー等への関心を持っています。しかしこれまでの学校生活において、こうした専門教育を受ける選択肢がなく、教育到達度が低く、就労経験が乏しく、さらに子どもを抱える母親といった社会的に不利な条件を複数抱える若年母親達にとって、職業的社会化は非常に困難です。さらに、若年母親が教育から離脱するのは、彼女達が今一ここの思いを最優先する行動特性を持っていることから、教育を受けることで将来に展望を見出そうとする、未来志向の学校や学校生活にそぐわないからです。こうした、若年母親の「文化なるものに固有の集団的な論理」(Willis, 1985)に基づくライフスタイルを尊重し、以下の3点が若年母親の教育環境整備に必要であると考えます。1つは、出産後の職業的社会化を進めるための専門的教育を身につける環境です。資格取得といった分かりやすい短期目標を提示することで、長期のライフプランを構築しにくい若年母親が教育を継続する動機付けとなると考えます。2つ目に、高等学校において職業教育を推進し、高等学校在学中にホームヘルパーなど職業に直結した資格を取得し、出産後の職業的社会化を推進することです。3つ目に通信制高校の活用です。高校中退あるいは中卒者のための定時制高校や単位制高校を活用し、仲間作りの場を提供し、希望があれば高校を卒業することができるような体制を整えることも必要です。

若年母親にとって、職業に直結した教育を受けることは貧困の轍から脱却する重要な手段です。困難な状況にあっても教育を受けることができるといった、生徒の多様な背景を認める環境、そしてそれを身近で継続的に見守る人が必要だと考えます。

## (2) 就労環境の整備

若年母親は、出産後就労希望があっても学歴が低く、職歴が乏しく、さらに乳幼児がいることからアルバイトさえも採用されない現状にありました。夫である父親も収入が高いとは言えず、若年母親の家族は金銭的には逼迫している状況にあります。その背景に若年層の高い失業率があります。貧困の再生産を絶ち切り子どもの可能性を広げるためには、就労を規模する若年母親及び父親に対して、就労に至るまでの道筋を広げることが必要です。

若年母親の就労につながる取り組みとして、宮本(2011)は就業経験がない若者が「市場経済」へ入るための支援が必要であると述べています。この一例として、筆者が聞き取り調査を行った、アメリカミネソタ州ミネアポリスの若年母親のためのオルタナティブスクールでは勉強だけではなく、母親に子どもの保育を1日1時間担当してもらい、それに対する賃金を支払っています。子どもの保育を行うことで、子育て経験を積む機会にもなり、教員は母親を知る機会にもなります。そして、母親には収入が得られるというメリットもあります。このように、子どもを預けて働くことが困難な状況にある若年母親に対して、子どもと共に1日数時間でも働くことができ、仕事をする中で知識や対価を得ることができる中間的な就労環境を整備していくことが必要でしょう。そのことにより「市場経済」に入る準備体制ができ、本格的な就労につながりやすいと考えます。

若年母親の就労支援では NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡が実施している、「地域のおせっかいおじさん・おばさん」が行う、若者が就労できるための伴走型支援も参考になるでしょう。この取り組みでは、地域で様々な職業を持つサポーターが自分のネットワークから就労体験先を探して、できるだけ早くその現場に若者を入れるようにしています。サポーターは、コンビニエンスストア店長やケアマネジャーなど様々な職歴を持っており、自らの職場に就業が困難な若者達を受け入れ、働くことを通した成長を見守っています。理事長である津富(2011)は、「こうした職歴とサポーターとの二枚看板を持つことで「縦割り」の壁を崩して相互に浸透しあって、重層的な支援を提供することができている」と述べています。就労支援は固定された機関及び期間だけの取り組みに終わるのではなく、継続して母親が生活する地域で支えていくことが必要です。現状では、生活保護を受けている母子家庭の母親には、母子自立支援員が就労や生活に関する相談を受けていますが、生活保護を受けていない若年母親に対しても、継続して関わり見守る地域の人々の存在は重要です。こうした取り組みを通して、若年母親に対する地域住民の認識が変化し、若年母親と関わることの難しさを感じている地域住民に対しても、関わり方の方向性を伝えることができると考えます。

さらに、母親が就労するための保育環境を整備していくことも重要です。そのことにより、子ども達だけでなく若年母親の地域参画にもつなげることができます。保育所入所には選考基準があり、母子家庭や母親の就労時間の長い家庭、母親が疾患を持っている家庭

が優先されるため、母子家庭でなく就労をしていない若年母親は、待機児童の多い地域では申請をしても入所が困難です。このため、待機児童の多い0～1歳は自宅保育をし、比較的待機児童の少ない2～3歳で保育所入所もしくは幼稚園に入園し、就労を検討する母親や、認可保育所と比較して高額な無認可保育所を利用する母親もいます。一方イギリスの就学前児童の子育て環境整備(Sure Start)では、条件不利地域での保育環境整備を推進しています。待機児童の緩和はもちろんのこと、若年母親のように社会的不利な要因を持つ母親や、そうした母親が多く存在する地域には、保育所入所が優先的にできるような政策的配慮が必要であると考えます。

### (3) 相談できる身近な専門職

若年母親は、乳幼児健診などの母子保健事業や保育所入所など母子福祉事業により、公的機関とつながり社会資源の情報を知ることができています。高校を中退した若者のうち、社会サービスの認知度が高いのは「妊娠・育児中」の者です。その理由について宮崎(2011)は、母子保健等を利用した公的機関との接触あるいは既に生活保護を受けていれば、それを起点として社会的な支援の集中的な投下が行われ、一定の情報量が確保されているといえます。乳幼児健診の受診率は、子どもの月齢が3～5ヵ月において95.3%(2013年)と高くこの期間に多くの人が地域の母子保健専門職と関わり、地域資源の情報を得ることができていると考えられます。

家族とのつながりが希薄な若年母親にとって、乳幼児健診や地域における母子保健や子育て支援事業を通して身近な専門職に育児を相談できることは貴重な機会です。現在では保健師や助産師、保育士が若年母親に関わり育児相談を行うことが多いです。対人関係に葛藤を経験している若年母親に対しては、できるだけ同じ支援者が継続して関わっていくことが必要です。また個人対個人では関係が構築しにくいといった特徴を持つ若年母親に対しては、母親が心を開いた支援者とともに訪問したり、夫や祖父母が同席できる時間に訪問したり、個別だけでなく集団での支援を取り入れ、友人を通じて支援者との関係構築を図るなど、若年母親が心を開く人と関係を構築し、母親個人の支援につなげていくことも有益であると考えます。さらに、このような場に自ら来所できる母子ばかりではないために、潜在的ニーズを掘り起こすことや、地域の病院や保育所などの情報を把握し、いざという時に連携できる関係を構築していくことも必要です。

若年母親のニーズである教育、就労、育児及び生活支援、そして地域社会に受け入れられることは、単独の機関の支援だけで達成できるものではなく、互いに関連し合う問題です。このため地域で若者に関わる機関－教育、医療・保健、雇用などの機関が連携して、包括的に社会資源を整備していくことが重要でしょう。

### (4) 地域社会における「場」づくり

若年母親は母親として承認され、自己肯定感を向上させることができるような「場」を

求めています。⑦～⑩で述べたように若年母親達は、ピアグループに自主的に参加し友人の輪を広げたり、母親としてどうあるべきかを学んだり、母親としての自己認識を深めるなど、多くのものを得ていました。若年母親達は、学業を中断したことにより同世代の若者達が共同生活を営む場から離脱しており、集団生活で得られる友人関係や連帯感、何か一つのものを行った時の達成感などを得られる機会に乏しい状況にあります。若年母親の孤立化を避けるためにも、地域において若年母親同士が集まることのできる場の構築が必要です。

若年で子どもを持つことに関しては、他者に母親として認められることの困難さが明らかになりました。若年母親に対する周囲の人々の評価は、若年母親の努力の下に「若いからできひんやろ」から「若いのに頑張ってるねんな」もしくは、「《“子ども”なのに子育てをしているのは偉い》という評価に変わっていきます。育児を「若いからできひん」とする見方は、一見若年母親の能力を過小評価しているようにもとらえられますが、その反面「若いだから、(育児が)できなくても当然だ」として、若年であることの「伸びしろ」を認め、明らかな差別に結び付けるのではなく、母親の育児を寛容的にとらえ、若年母親を力づけている言葉ともとらえられます。日本における若年母親は、スティグマを付与されるのではなく、地域住民ボランティアが述べているように〈ほっとできる場づくりに徹する〉といった、曖昧な形で関わる周囲の人々によって、地域社会に受け入れられています。そして、若年母親に身近に接する人々は子育てに励む母親を「頑張っている」として認めるといったように、若年母親と接することで周囲の人々の評価も変わっていきます。

このように、地域社会において若年母親の伸びしろを認めることが重要であり、地域住民が若年母親を理解することができるような場を提供することも必要でしょう。今回の連載では若年母親グループの事例や、若年母親の育児方法を尊重し、パターンリズムに陥らず母親を見守る場を構築する地域住民ボランティアの例を提示しました。若年母親達は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取ります。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず、少し想像力を広げ、自分達の思う「親切」が彼女達にとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、「小言」は言わずに場づくりに徹していました。このように住民一人ひとりが、社会的に不利な立場にある人々に対し少し想像力を広げ、そうした人々を受け入れるような声かけ、態度を示し、地域社会に受け入れていくことが必要であり、そのことの積み重ねが母親の自信につながっていくでしょう。

また、今回対象となった若年母親は、仲間とつながることで自身の世界を広げることができていました。このことから、若年母親同士が集まり、友人との関係性を育てる場を設け、その場に地域の人々の参加を促し、若年母親と地域住民が関係構築を促す機会を作ることが必要であると考えます。

若年母親自身も、周囲から認められることの困難に対する対処方法として、〈保育所の役員を買って出る〉と言う意見も挙げられていました。⑬で挙げたイギリスの事例のように、

若年母親自身が母親として何らかの役割を持ち、地域住民と接する機会を作ること、地域住民が若年母親への理解を深めることにつながると考えます。

## まとめ

これまで若年母親「個人」だけでなく「環境」を重視したエコロジカルアプローチについて述べました。若年母親は主体的に出産を選び、出産することでこれまでの家庭生活や学校生活で培えなかった「自己肯定感」を母親となることで持つことができ、母親になるという経験は、彼女たちが社会化していくきっかけとなっていました。

10代の妊娠が「望まない妊娠」とみなされ、妊娠を予防する取り組みのみが進められているのは、若年母親が青年期に子どもを持つという、ライフサイクルが交錯し地位違反を犯す存在だからです。現在の日本では単線的なライフサイクルが主流であり、学業の中断や若年での妊娠など、一旦そのライフサイクルから外れた場合、復帰するのは困難を伴います。単線的なライフサイクルを尊重し、貧弱な社会資源を個人の行動の結果として家族に回収することは、個人のライフスタイル選択を制限し、教育ならびに雇用の機会の平等を奪うこととなるでしょう。複線径路・等至性モデルにおいて提示したように「望まない妊娠」であったとしても、出産を主体的に「選択」し、家族や夫と調整し自らの思いを貫いた若年母親に対しては、10代で子どもを持つと決めた自らの選択が意味のあるものだったと思えるように、子どもと共に成長していく母親の時間軸に合わせたセーフティネットを構築していくことが必要です。若年母親というライフスタイルを尊重し、必要な社会資源を整備していくことは、学業を受けたいという人がどの世代においても学業を受けることができ、新卒でなくとも就労しやすい雇用環境を整えるといったような、一旦単線的なライフサイクルから外れた人々が、社会的に不利な立場から脱却する機会となると考えられます。若年母親は、こうした多様なライフスタイルのあり方を先駆的に提示する存在でもありました。

母親が若年出産を意義のあるものととらえることができるか、それは多様なライフスタイルを許容し承認することのできる、成熟した社会への道標となるでしょう。

(完)

## ★引用文献

阿部彩, 2008, 子どもの貧困ー日本の不公平を考える, 岩波新書.

Germain, C.B., 1980, Ecological Social Work-Anthology of Caryl B.Germain,(=小島蓉子訳, 1992, エコロジカルソーシャルワーク, カレル・ジャーメイン名論文集, 学苑社)

Jones, G and Wallace, C., 1992, Youth, Family and Citizenship (=2002 宮本みち子, 鈴木宏訳, 若者はなぜ大人になれないのか, 第2版, 新評論)

広井良典, 2006, 持続可能な福祉社会 もう一つの日本の構想, ちくま新書.

本田由紀, 2009, 教育の職業的意義ー若者、学校、社会をつなぐ, ちくま新書.



- 宮本みち子, 2004, 社会的排除と若年無業—イギリス・スウェーデンの対応, 日本労働研究雑誌, pp17-26.
- 宮本みち子, 2011, 若者の自立保障と包括的支援, 宮本みち子, 小杉礼子編, 二極化する若者と自立支援, 明石書店.
- 文部科学省, 2011, 生涯学習社会の実現に向けて高等教育機関に期待される役割について(データ編),  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/10/17/1311624\\_8.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/__icsFiles/afieldfile/2011/10/17/1311624_8.pdf). (最終閲覧日 2016/05/25)
- 内閣府, 2011, 若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)報告書(資料版)<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/shiryo.html>, (最終閲覧日 2016/05/25)
- 津富宏+NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡, 2011, 若者就労支援「静岡方式」で行こう!!, 地域で支える就労支援ハンドブック, クリエイツかもがわ.
- Willis, P. E., 1985, Learning to Labor —How working class kids get working class jobs (＝熊沢誠, 山田潤訳, ハマータウンの野郎ども, 筑摩書房, 1985).